UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニュースレター

56

GAPニューズレター　第56号目次

アダムスキーに関するコメンタリー（1）　デスモンド・レスリー　1

UFOの秘密（3）　フランク・スカリー　5

真の教育とは何か（2）　ジッドゥー・クリシュナムルティー　9

奇蹟を起こす方法　デッド・オーウェン　14

超能力開発の意義　久保田八郎　20

永遠に生きるためには　ジョージ・アダムスキー　23

空飛ぶ円盤同乗記（9）〈改訳〉　ジョージ・アダムスキー　24

声　32

お花見パーティー終了　36

編集後記　40

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。写真共禁無断転載。

GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で，世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について〝知る〟機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました．彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して，来たるべき時代に眼を転じること，人間はすべて〝コズミック・パワー〟の御子であり，そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました．この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた〝生命の科学〟の研究と理解を通じて体得できるものです．

日本GAPの目的は円盤とスペースブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり，奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります．その中心思想は次のとおりです．

1．この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある．
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており，危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている．官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが，通常その真相は洩らされていない．
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は，人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である．

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく，政治・宗教と関係のない非営利刊行物です．本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです．

◎GAP参加グループを有する国は次のとおりです．
アメリカ，オーストラリア，ベルギー，ブラジル，カナダ，デンマーク，イングランド，フィンランド，ドイツ，オランダ，インドネシア，日本，メキシコ，ノルウェー，スエーデン，スイス（ABCの順．1971年6月現在）

★表紙写真は1954年の夏、パロマー・ガーデンズを訪れたデスモンド・レスリー(左)とアダムスキー。

26頁のイラスト　池田雅行

アダムスキーに関するコメンタリー

（1）

アダムスキーの体験は事実だった！
現地や関係者を徹底的に調査した
デスモンド・レスリーが秘話を明かす！

デスモンド・レスリー

米国とソ連の意見が一致することはほとんどない。しかし金星に関する場合、信じがたいほどの濃密な大気と耐えがたい高温のため炭素と酸素を基調とする生命体の可能性は考えられない、という点では両国とも完全に合意に達している。

一体、老漢ジョージ・アダムスキーはイカサマ師だったのか？

それとも彼は――？

彼の存命中、多数の人は彼を山師、ウソつきと考えていた。UFO研究界でこのおかしなカリフォルニア人ほどの喧争をひき起こした人はいない。今や彼を非難した人々は自分たちの説が全く正しかったと思っているようだ。

それなのに、現在の諸発見にもかかわらずなぜ私はずうずうしくもこの書（空飛ぶ円盤実見記の原書）の再版を試みたか？ 調べれば確証できる全くの歴史的事実から成っている、もっと合理的になったと思われる私の論説にアダムスキーの〝つぶやき〟を加えたことを、なぜ私が素直に「過ちだった」と認めようとしないのか？ なぜこの書から彼の体験記をそっと除外して、アダムスキーなどは知らないよ、というような顔をしないのか？ なぜ私はみずから危険な目にあい続けようとするのか？

私は厚かましい。しかも相当に――。しかも彼を非難する大部分の人々とは違って、かなり骨折って彼自身や、彼が撮影した写真類、そのネガ、撮影用具、同時目撃証人たちや、その他の状況証拠などを調査したのである。そして多くの行き詰りや失望にもかかわらず、一九五二年十一月二十日の円盤着陸の話は実際に発生した事件であり、運よくそれを目撃して証言した人たちの報告どおり、ある程度正確な事実だという、人騒がせな確信を持つに至ったのである。

しかし金星の物理的表面には人間が住めないのに、円盤から出て来た人は金星が自分の本当のホーム惑星だとほのめかした。そうなると我々はどこへ行けばよいのか？

まず私は一九五四年にカリフォルニアへ行き、ジョージ・アダムスキー、アリス・ウェルズ、ルーシー・マクギニスらと数カ月間生活を共にした。そして彼らの生き方、行動や反応、誠実さ、精神的価値などによって彼らが好きになり、尊敬するようになった。彼らは〝善良な人々〟といえる人たちであった。どちらかというと一般人よりもすぐれているのである。他人が信じてくれるか、くれないかには特に関心を持っていなかった。彼らは或る物事を見たり体験したのであって、忍耐強くそのことを話したり質問に答えたりする余裕があった。

「私たちがコンタクトの現地へ到着したときにジョージはただ砂の中の足跡を指さすだけでした。彼は非常に興奮していましたので、続けて話すことはできなかったのです。興奮した学童のように飛んだり跳ねたりして狂喜していました」とルーシー・マクギニスは私に語った。

数週間後にジョージ・ハント・ウィリアムソンに会ったときも、彼は大体に同じことを話してくれたし、アリス・ウェルズは東洋人のような落ち着いた態度でその話を確証した。

アダムスキーが〝訪問者〟にむかって身振り手まねで話しているのを一同が最初に見たとき――この訪問者は上下続きの服を着た人であることが双眼鏡で見えた――、その地域は小さな採掘所が調査しているので、一同はアダムスキーが鉱山の調査員に話しかけているのだと思った。何か異常なものだと考えてその姿を長く注意深く見つめたのはアリスのようで、それでスケッチをしたのである。

〝訪問者〟が去って行く前に一同がアダムスキーの方へ走り寄らなかった理由を私は考えつくことができなかった。五四〇乃至七二〇メートルの距離である。一同の答は淡々たるものだった。アダムスキーは、合図をするまで来るなとみんなに言っておいたのだ。後にわかったことだが、アダムスキーは他人を本能的に自分の要求に従わせる一種の意志力を持っていたのである。

同行者たちは実際に宇宙船を見たのだろうか？ 見たのだ。全員が大母船を見ているし、軍用機が現場へ来たときにその母船が丘のむこうへ消えて行くのを目撃している。

円盤についてはどうか？

彼らの話によると、キラキラと輝く物体が石ころの丘の背後にいて、ときどき上下して見え隠れしたという。これは物

体のドームだったと彼らは考えた。茶色の服を着た人が石ころの丘のむこうへ消えた直後、強烈に輝く物体がものすごいスピードで上昇した。数秒間アダムスキーは身動きもせずに立って呆然自失の状態だったが、すぐに仲間のことを思い出して、こちらへ来いと合図をした。彼はほとんど口のきけない状態だった。最初彼は砂の中に鮮明にしるされた足跡を指さすだけだった。彼は息もつかずにぶつぶつつぶやいていた。（後に私は現場を訪れて、自分の足で鮮明な跡をつけることができた）

「彼が芝居を演じていたとすれば、見たことのないほどの名優だ。彼は興奮のあまり呆然としていた」とウィリアムソンは言っている。

「しかし彼らが母船を撮影した映画フィルムはどうか？　なぜ写っていなかったのか？」と私は尋ねてみた。

　するとウィリアムソンは首を振って答えた。「わからない。あれは借りてきたカメラだ。だれもそれを使用した経験はなかったのだ。ベイリー夫妻がどんな失敗をやったのか私は知らない。私には全くわからない。フイルムは空白のままだった」

　ジョージが地上で円盤をクロース・アップ撮影したけれども、フォース・フィールドでだめになったというネガ類はどうか？

　アダムスキーはそれらを探し出して私に見せた。その大きさや奇妙な形からみて私はすぐにそれが彼の時代遅れのハギー・ドレスデン・グラフレス・カメラ用の正規の乾板であることに気づいた。このカメラにはレンズがついておらず、彼の望遠鏡に装着して使用するのである。最初それらの乾板を調べたとき、まっ黒に見えたが、強い日光にすかして見ると、かすかに石ころのかたまりが見えた。そしてたしかにその前方に浅いベル型の円盤が少し傾いて、観察者よりも数フィート高く浮き上がっているのが見える。着陸しようとしているかのように三個の球が突き出ている。私がこの画像を指摘すると、何かが写っていることにジョージはひどく驚いたようだった。なぜ彼がその像に気づかなかったのか、私にはわからない。しかし――ここに奇妙な事があるのだが――もしこの乾板が円盤の放射線で黒くされたとすれば、いかなる驚くべき技術でもってパイロットは感光乳剤を再生させて、あの奇妙な文字を焼き込んでから、十二月十三日にネガを返したのだろう？

　この書（空飛ぶ円盤実見記の原書）が出版されて爆発的なベストセラーになったあとの、一九五四年の夏だった。奇妙な夏である。謎めいた魅力のある、時には怒ったりするアダムスキー氏と共に私はパロマー山腹で三カ月をすごした。敬愛すべき、人を怒らせるような、時にはとらえどころのない彼は、また時には全く畏怖すべき深遠さをたたえていた。この内奥の深さを示すときのアダムスキーを発見するには、彼が独りでくつろいでいるときでないとだめである。大勢で押しかけると彼を悩ませ過分に刺激するのだ。公衆の面前では演説がへただった。演壇上で心がときどき動揺したらしい。話を聞こうと熱心につめかけて行列をなしている多くの人は幻滅を感じ、失望して去って行った。少々精神分裂症だったと言えるだろうか？　私にはわからない。私は精神病学者ではないが、人はしばしばその勇猛な肉体に二人の人間が存在するという印象を受けた。一人は小さなアダムスキーで、多数の人が集まるとのべつまくなしにしゃべり、曖昧な拙い表現で語られる概念の雲で聴衆をきりきり舞いさせては常に人を押しのけて前進しようとする。もう一人は巨大なアダムスキーで、それは我々が知って愛するようになった男であり、親しい人たちの前だけに現われたアダムスキーである。ひとたび現われるや、自分たちは一つの偉大な魂を知っているのだということをみんなに確信させるのであった。巨大なアダムスキーは深く美しい声で静かに語り、信じられないほど老熟した賢明な忍耐強い態度を示した。その大きな燃えるような黒い眼をのぞき込むと、このアダムスキーは話すことができた、または話そうとしたことよりも、はるかに多くの事柄を知っており、体験したのだということに人は気づくのだった。

　彼の側近の一人は後に私に語った。

「もしジョージが知っていることのすべてを話すことを許されたとしたら、彼の生活はもっと楽になっていたでしょう。自分の体験を証明できたはずですから」

　しかし一九五四年に彼が私に話したある驚くべき事が発生していた。これはバンアレン帯が発見されるより以前のことである。しかも最初の宇宙飛行士が人工の宇宙船に乗って地球の周囲を回ったときよりもはるか以前のことなのだ。UFOに乗って宇宙飛行をしているあいだに彼が見たり聞かされたりしたことについて、後に出した書物 Inside the Space Ships（空飛ぶ円盤同乗記）に述べてあるように、彼は次のように説明したのである。

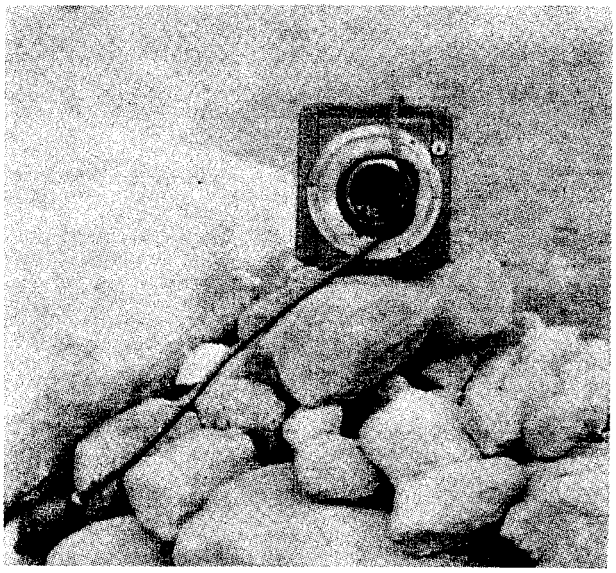
(1)地球をとり巻く放射能帯がある。（数年後にこれは発見されてバンアレン帯と名づけられた）

(2)（後にグレン中佐が見た）宇宙空間の「ホタル火」

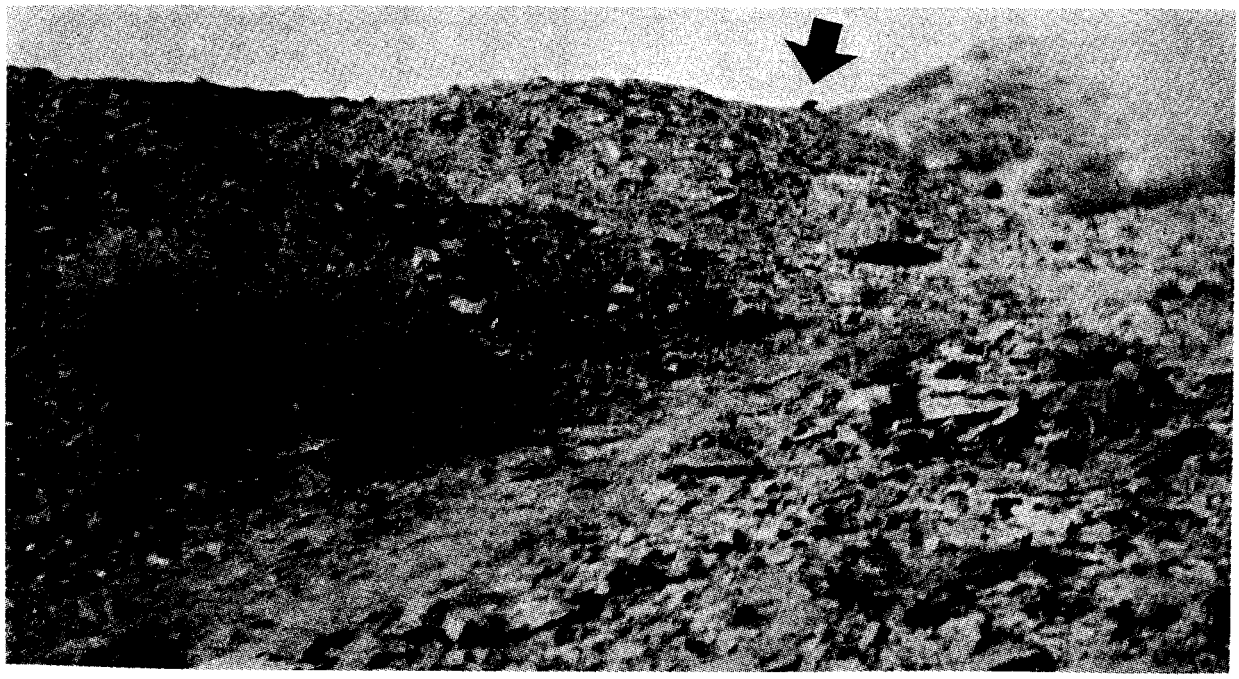
(3)成層圏の上に奇妙な現象があった。UFOが輝く光の帯の中に突入したとアダムスキーは言った。これが何なのかは彼にはわからない。キャビンの窓から観察したと言うだけで、何なのだろうといぶかっていた。

　この不思議な〝暗黒中の輝き〟現象は後に数度の機会にアメリカの宇宙飛行士たちによって報告されている。ジェミニ6号の飛行中にシーラは「宇宙飛行中の最大の驚きだ」と言っている。クーパーもマーキュリー9号の飛行中に同じような光る帯を観察している。

　もっと最近では宇宙飛行士カニンガムもクーパーの目撃を確かめようとして、この奇妙な光帯を見ている。コンドン報告でフランクリン・ローチがこれらの目撃について概要を説明している。



●上右の写真はアダムスキーが使用したハギー・ドレスデン・グラフレス・カメラ。
●上左は1953年夏，コンタクト現場を訪れたレスリーが自分の足でつけた足跡。
●下は1952年11月20日のコンタクト現場。矢印は円盤。



(4)一九六九年の終わりまでは、アステロイド帯、すなわち太陽と木星・火星のあいだを回る小物体の輪は、爆発した惑星の残骸だと信じられていた。ところが一九五四年にアダムスキーは「違う」と主張した。彼の〝訪問者たち〟が彼に話したところによると、爆発した残骸どころか、これは実際には発達中の一惑星であって、いつかは合体して一天体となり、最後は未来の生命体の住家になるのだという。わずか数週間前に宇宙飛行士たちはこれと同じ結論に達している。かなりの力を伴って惑星が爆発し、粉々に砕け散ったとすれば、その細片は遠方まで飛び散るはずで、太陽を中心とする薄い輪の形にはならないだろうというのだ。アダムスキーはもっと詳しく説明し、海王星と冥王星とのあいだにも第二のアステロイド帯があることを予言した。彼の〝訪問者たち〟は冥王星のはるか外側に三個の惑星があって、全部で十二個になるのだと話した（これら三個は未発見である）。しかもこの外側にも更に第三のアステロイド帯が存在して、これが我々の太陽系内の空間と隣接する他の太陽系群の空間とを混合させるという二重の役目を果たすというのである。

最初の否定的言明は確証された。だがアステロイド帯として知られているだけだ。たぶん一九七〇年後半に計画されているファンタスティックな十年間の玉つきボール式全惑星めぐり宇宙飛行が再度彼の説の正しさを証明するだろうか？

そこで疑問が起こってくる。パロマー山に住む、世をのがれた一カリフォルニア人が、自分の眼で実際に見たこともなく、または宇宙飛行士から進んだ情報を与えられなかったとすれば、一体彼は一九五三年にどうしてこのような事柄を知ったのか、ということだ。当時の宇宙飛行士といえばおおやけには存在しなかったUFOのパイロットだけである。

運のよい推測だったのか？

アダムスキーは気晴らしに多数の〝運のよい推測〟をやった、というのか。

彼が私に話してくれた事がもう一つある。それは遠隔操縦の観測用小型円盤で（直径は約六十センチ乃至九十センチ）低空でデータを集めるためにUFOから発射されるのだという。ある夕方、私はリンカン・スプリングズから彼の家に向かって道路を歩いていたとき、約四百メートルむこうのアダムスキー家の屋根から、すごく輝く一個の光球が急速に上昇するのに気がついた。銀黄色のベリー式信号光みたいで、上昇を続けてやがて視界から消えた。飛行しながら加速しているという印象を与えた。しかし習日の夕方には非常に接近してそれを見ることになったのである。

我々は夕暮れのなかを中庭にすわっていた。ジョージ、アリス・ウェルズ、ルーシー・マクギニスがいて、私は戸口に背を向けていた。すると、何かに見つめられているような奇妙な冷たい感じがし始めた。だれかが、または何かが私のすぐうしろに立っているかのようだ。さっとあたりを見回すと、百五十メートルむこうのリヴ・オークスと我々とのあいだに一個の小さな黄金色の円盤が見えた。すぐにその円盤はかすかなシューッという音を立てて背後に淡い航跡を残しながら空中を上昇して消えた。ジョージはおごそかに、にたりと笑って言った。「いつ君があれに気づくかなと思っていたよ！」

私は驚いた。「遠隔操縦物体の一つなのかね？」と尋ねたように思う。彼はうなずいた。「よかったなあ。この三十分間我々はワイ談はやらなかったぞ」と私は言って、一同は笑った。ジョージはある素敵な話を楽しそうに話していて、全く平静だったのである。私は寄宿舎で校長がそっと現われたときに運よく一度だけ行儀がよかった学生のガリ勉屋みたいな感じがした。

しかし宇宙人は私を訪ねて来なかったし、私の溢れるばかりの好奇心を満足させるために円盤が滑空して降りて来ることもなかった。当時、私はこのことをかなり不満に思っていた。しかし今はいわゆるコンタクトなるものがコンタクティーの生活や心に及ぼす影響を考えてみれば、それでよかったとも思う。評判や嘲笑で生活を破壊するか、もっと悪くいけば本人に偉大になったようなイメージを与えることにもなるのだ。私はその夏に会った少なくとも二人のコンタクティーを思い出す。二人はそれ以来〝救世主〟になって、新しい宗教を始めようとしている。一皮むけば虚栄というものが大抵の人間の内部に潜在しているのだ。新しい刺激を求める熱烈な大衆、愚かな追従者、餓えた羊たち。〝偉大なる我〟になろうとする誘惑――。私は稀代の悪党になっていたかもしれない。

別な数度の機会に、我々と向かい側の山のあいだの谷間を強烈に輝く光体（複数）が上昇するのを見た。ジェット機よりも速く飛び、完全に無音だった。ある夜、我々は一種の野外集会を開催して、三千人以上の人が集まった。そのとき私がスライドを映写して講演を行なっていると、あの輝く光体が数個かすめ飛んだ。谷の反対側の峯の下を飛んだとき、我々は大体の距離と飛行コースを目測できた。居合わせた二名の陸軍将校が自分たちの腕時計型ストップウォッチで時間を計る沈着さを持ち合わせていて、時速二千マイル以上で飛んでいたと推定した。

それは別として、私の実際の体験はきわめて微々たるものである。私はアダムスキーの話の真実性についてはなおも二心をもって彼と別れた。しかし別れる前に我々は金星人の肉体の性質に関して数度話し合った。これは最近の宇宙ロケットにかんがみて一大考慮を要するのである。ジョージはその訪問者たちが固形の肉体と温かい血液を持つ人間だと言い張った。最近の宇宙ロケットは、金星の物理的表面に地球の哺乳動物に似た物は存在し得ないことを示している。だから我々はあとでこの問題をもっと検討しなければならない。（以下次号）

久保田八郎訳

UFOの秘密
(3)

フランク・スカリー

第三章 ある個人の履歴

ここまで来るまでに読者は「スカリーはいったいどうしてこんなことを知るようになったのだろう」という疑問を感じておられるに違いない。

正直に言うと、文筆生活を送っているうちにそうなってしまったのである。何年も前になるが私は、自分が偶然のいきさつからフランク・ハリスの〝バーナード・ショー伝〟の著者になってしまった内輪話を書いたことがある。あとになってから私はこの記事を〝ローグス・ギャラリー〟と名付けて一冊の本にまとめたが、その後この題名をある探偵小説のためエラリー・クィーンに提供したところが、私の許可もなく映画にラジオに、はては月日が過ぎるにつれてその他至るところで使用される結果となってしまったのであった。

この〝ローグス・ギャラリー〟の読者の一人が私に「あなたはハリスのゴシップをよくお書きになる。いっそのこと彼の伝記を書いてはいかがですか」という手紙をくれた。署名は「サイラス・M・ニュートン」となっていた。

この名前からひとつの記憶がよみがえった。一九二九年から三十年にかけての冬、ハリス夫妻はニースからニューヨークまで旅行したことがあるが、その費用を提供したのがサイラス・ニュートンである。彼は二人をパーク・アヴェニューの自宅に泊め、ハリスがワシントンのお役人たちにシェークスピアに関する講演をするようお膳立てをしたのである。

何カ月か後、フランスのリヴィエラにもどってからハリスが話してくれたのだが、米国への途中、船室にいる彼に港湾当局から電話がかかったそうだ。そのときハリスはもう七十二歳で、〝わが生活と愛〟を書いたばかりにエリス島へ抑留されるなどまっぴらだった。彼はポケットに青酸カリの小ビンさえ用意していたのである。

「大変だよ、ネリー」と彼は叫んだ。「私は逮捕される」

だが実際には、船室へやって来た役人は彼に、彼が港で自由に行動してよい時間が延長された、と告げただけだった。

彼はニュートンの親切には心から感動した。ニュートンはハリスに一万ドルを提供して、世界一周旅行をしてその体験を若かったころの見聞と比較してみたらと提案したのである。しかし彼の記憶は日に日に薄れるばかりで、とても五十年前の思い出どころではなかった。

そのことがあってから私はずっとニュートンを、ケンタッキーで生まれてテキサスで育ち、ニューヨークでみがかれた、背のスラリと高い、たぶん白い山羊ヒゲを生やしたスマートな南部の老紳士だと思っていた。

だが現実に私の前に現われた彼は白髪など一本もない、あまり背の高くないガッチリした中年男だった。ベイラーとイェールの両大学時代には優秀なスポーツマンで、後々まで語り草になるほどの相当なゴルフのチャンピオンでもあるそうだ。文学には常に強い関心を示してきた人間である。石油業界では一流の地球物理学者として通っていて、油田開発の成功率では誰にもひけをとらない記録の所有者だった。彼は数百万ドルもかせいではそれを湯水のように消費していた。彼が一度に少なくとも百万ドルを使ってしまった話などは、彼の性質を物語る興味深いエピソードと言えるだろう。

当時の彼の夫人はナン・オライリーだった。彼女はニューヨークでも一流の婦人スポーツ記者である。幸福な結婚生活を十年ほど送ったとき彼は医師たちの口から、彼女はあと一年しか生きられない運命にあるという宣告を受けた。

彼は妻の名前で銀行に百万ドルの預金をしてから彼女に言った。「ナン、きみはお金の使いかたというものを知っていない。何事もそうだが、お金の使いかたも身につけなくてはならぬものの一つだよ。この百万ドルでその練習をしてほしいのだ。演劇の後援をするとか、グリニッチ・ヴィレッジから一歩も出たことのない人たちのためにパーク・アヴェニューでパーティを開くとか、彼らの詩を出版してやるとか――何でもいい。とにかく、一年間でこの百万ドルを使ってしまうことだ」

一年後に百万ドルはなくなった、そして、彼女も世を去った。

そこで彼はニューヨークをはなれ、続く十年間は主としてロッキー山脈から大平洋に及ぶ油田の開発に専念し、心の痛手をまぎらそうと何十万マイルも旅を続けて油源をさがし求めた。デンヴァーに別個の会社も設立した。それは今でもそこにあるし、社長の椅子にもやはり彼が坐っている。

私にハリスの伝記を書かせようとして彼は、私をさそってワイオミング、コロラド、カリフォルニアを通過する長距離ドライヴに同行した。しかし私には二番煎じのハリスの物語よりも、ニュートン自身の若き日の山師生活の話のほうがずっと面白かった。

厳重に警備された、ひと財産もする装置を使用して彼は石油を探し求めた。この装置のおかげで彼は、大資本の石油会

ちは彼ぬきで出発したが、ニューホールの切通しで後方に自動車の警笛が聞こえ、マーレイが私たちに追いついた。彼は自分の車をあるガソリン・スタンドに置くことにして、私たちは皆ニュートンのキャデラックに乗り込んだ。後席にはマーレイと物理学者、前席にはニュートンと私が坐った。

長いドライヴでは人々はいつもあらゆる方面にわたるおしゃべりをする。私たちの話はまず空飛ぶ円盤からはじまったのだった。当時は公式にも何にもまだ秘密扱いにはされていなかったので、科学者はどんな質問にも答えてくれた。彼の説明はまるで、自動車のエンジンの内部で混合ガスがどんなふうに爆発するかを説明するエンジン技術者のように冷静そのものだった。油田に着くと、科学者は彼のマグネトロンを、ニュートンは自分の探知装置を持ち出した。

二つの機械はぜんぜん違った形をしていたが、二人はたえずお互いの観測値を確かめあった。そして、その都度二人の数値は一フィートと違わなかった。石油が埋蔵されていると推定した地点でニュートンは磁気学者に深さはどのくらいだろうかとたずねた。彼はたちどころに二千七百五十フィートくらいだと答えた。ニュートンはノートをのぞいて叫んだ。

「去年の五月に測ったときは二千七百四十九フィートだ」

それから二人は、この一フットという開きがどうして生じたかについて冷静に意見を交換しあったが、その差はあまりにも小さいので門外漢の私には、数百万ドルにものぼるであろう資源を掘り出すのにわずか一フットの差などどうでもいいじゃないかと思われたのだった。

砂漠で夜明かしはごめんである。町までは二時間しかかからないのだから、私たちは一応町に帰ることにした。この有名な科学者はとちゅう私の家に立ち寄り妻をはじめ私の家族に会ってくれた。

私たちは、空飛ぶ円盤はどこから来るのか、他の惑星から地球までどうやって来たのか、どうやって故郷に帰るのかなどとあらゆる種類の質問を彼にあびせかけたが、彼は感情を害することもなくいちいちていねいに答えた。円盤の船室の内部、水、食糧、衣服といった、女性がよく口にする小さなつまらぬ質問にも、博士は自分の家の家具の話でもしているようにおだやかに説明してくれたのである。

彼の磁力に関する学識は実に深いもので、私たちなどとても足もとにも及ばなかった。核分裂に関する知識について原子物理学者と一般社会人との差が十年前はこんなであったろう。彼は、アインシュタインが電磁力を導入してニュートンの重力法則を修正して以来有名になった相対論的宇宙観についても話をしてくれた。その時にはあまりよくわからなかったが、今ではその重要さがよく理解できるようになった。

二機の円盤を調査した結果、円盤の動力は燃料でもロケットでもターボジェットでもなく磁力なのであり、地上では未知のある種の金属が見つかったことから円盤は他の惑星から来るらしいと、この学者は語った。事実、ジェット推進や何かでは月へも行かれないと彼は笑っていた。当時彼は石油で生活している人たちのための調査にも従事していた上に事業の共同経営者でもあったのだから、惑星間飛行の推進力としての石油燃料をけなしてみたところで一文の得にもならなかったはずである。

私たちの最初の出会いでもう一つ記憶に残っているのは、彼が私の体に関心を示したことだ。私には脚が一本しかないが、今までの義足は重すぎる上に私の脚の残りの部分が短かすぎるので、よい義足にめぐり会わなかった。

吸盤式の関節はどうだろうか、これなら肩や腰のベルトも不要だが、鋼鉄のように丈夫でプラスチックのように軽いやつを一つ作ってあげようと彼は言った。でも操作が問題だと反論すると、押ボタンで作動する小型モーターを埋め込めばよいではないのかと彼は答えた。

「全体で三ポンドもないと思いますよ」と彼はつけ加えた。

「それはすばらしいですね」と私は言った。「でも、友人と握手したり話をするために立ち止まったとき足だけがまだ歩いていたりしたら、笑われませんか」

「それも押ボタンで止めればいいのですよ」

このことは、彼の精神の動きが物にとらわれず自由である上に老練であることを知る手がかりとなった。

辞し去る前に彼は、今度フィーニックスから来るときには円盤の部品を持って来ようと約束した。ラジオに最もてこずらされたと言う。このラジオには真空管もアンテナも電線もなかった。船室全体がアンテナの役をしていたのではないかと彼は考えて、何とかして代用のアンテナを張ろうとして苦労していた。そのラジオで彼は高い歌うような音を聞いたのである。だがダイヤルがあまりにもデリケートで、長くその波長をとらえていることはむつかしかった。無器用な人間でもらくに調節できるよう糸つきの滑車のような仕掛を考えていると彼は言った。とにかく持って来ますよ、キングサイズの煙草の包みほどの大きさもないのだから、と彼は約束した。

彼は円盤があんなふうに解体されてしまったのを残念がっていた。軍は記念品あさりを黙認しているように見える。だから彼自身も二、三個取り外して来たのである。だがそれは記念品のコレクションに加えるためではなく、研究のためだった。

彼の説明によると、空軍は写真も撮影したという。しかしこの写真は機密保持のため二時間後には消えてしまう。許可された者だけが入手することのできる特殊な薬品を使用するともう二時間だけ映像が浮かび出るのである。もちろん彼自身はこのフィルムに手をふれることはできなかったが、自分でも何枚かの写真を写していた。あまりよい出来ではないがこれを持って来ましょうと彼は言った。

その後私たちは――胴衣を除いて――以上の品全部を見せてもらった。ラジオや計器類、それにフィルムも手に取って見たのである。

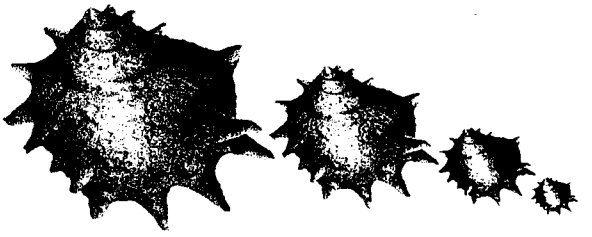
様子がおかしくなったのはそれからだった。空軍はプロジェクト・ソーサーを解散して地下にもぐってしまった。口にすることといえば、知っていることはす

（13頁へ続く）

真の教育とは何か

（2）

ジッドゥー・クリシュナムルティー



人間はなぜ死を恐れるのか――神とは何か？
インドの大哲が説く真の教育のあり方と自由に生きる法

なぜ死を恐れるのか

あなたがたが絵を描くかどうかは知りませんが、描くときには絵の先生は絵の描き方を教えるでしょう。あなたがたは木を見てただそれを描くだけですが、描くということは木を理解することであり、カンバスや画用紙に木を見て感じたことや、風に揺れている葉の動きなど、それが意味していることを表現することなのです。そうしたり、また光や影の動きを捕えるためにはあなたがたは感覚的に非常に敏感でなければなりません。もしあなたがたが恐怖心を抱いていたり、いつも「これをしなければならない。あれをしなければならない。さもないと他人がどう思うだろう」などと心配ばかりしていたら感覚的でいられるでしょうか？　美に対するいかなる感受性も権威によって徐々に崩壊されてゆきます。

そこで、こういったことについて学校があなたがたを教育すべきかどうかの問題が起こってきます。もし教師が真の教師ならば当然直面せねばならない困難について考えてみなさい。あなたがたが行儀の悪い少女や少年であって、かりに私が教師だとしたら私はあなたがたを教育すべきでしょうか？　もし私が教育したらどうなるでしょう？　私はあなたがたよりも大人ですし、より権威的ですし、また（教師という）仕事をして給料を得ているために私はあなたがたに服従を強制します。そうすることで私はあなたがたの心を片輪にしたり、知性を破壊したりはしないでしょうか？　私が正しいと思ったことをあなたがたに強制したら、あなたがたを愚かな人間にしないでしょうか？。

あなたがたはといえば、表面上は反対しているように見えても教育されたり、物事を強制されることを好んでいます。それはあなたがたに安心感を与えているのです。もしだれもあなたがたを強制しなければ、あなたがたは自分たちが全くダメになってしまうとか、正しくないことをやってしまうにちがいないと考えるでしょう。だから、「どうか私を指導して下さい。正しく物事が行なえるように援助して下さい」と言うのです。

さて、まだ私はあなたがたを教育するべきでしょうか？　あるいは、なぜ行儀が悪いのか、なぜこれをしたりあれをしたりするのかをあなたがた自身で理解するように援助すべきでしょうか？　つまり確実に言えることは、私は教師として親として権威を持ってはならないということです。私が本当に望むことは、なぜ自分たちはまちがっているのか、なぜ逃避するのか、といった、あなたがたが直面している困難を自分たちが理解できるように援助することです。自分自身を理解してもらいたいのです。私が強制してしまえばあなたがたを援助できなくなります。一人の教師として私が本当にあなたがたが自分自身を理解することができるよう援助したいと望むならば、私はほ

んの少数の少年少女しか面倒を見れないことになります。各々の生徒に個々の注意を払うことができるように、ほんのわずかな子供たちしか面倒を見れなくなれば、私は自分のクラスに五十名もの生徒を受け持つことはできません。そうなると私は、一度あなたがたが自分を理解すればあなたがた自身でできる事を強制するような権威を生み出す必要はありません。そこであなたがたにはいかに権威が知性を破壊するかを理解していただきたいのです。結局、知性とは自由—考える自由、感じる自由、観察する自由、質問する自由—が存在するときにのみ生じ得るのです。しかし私が強制すれば、あなたがたを私と同じような愚かな人間に仕立て上げることになります。こういったことは通常学校で行なわれています。教師は自分たちは知っているが生徒は知らないと考えていますが、教師が一体何を知っているというのでしょう？　数学や地理について多少知っているにすぎないのです。彼らは生命に関するいかなる問題も解いてはいませんし、最も重要な人生について問うてはいません。彼らはジュピターやあるいは特務曹長のようにどなっているだけなのです！

そこで、学校教育において重要なことは、生徒がいいつけられたことをおとなしく行なうように教育するかわりに、生徒が人生のすべての困難に対し恐怖心を持つことなく立ち向かえるように、彼らが理解したり、知性的で自由でいられるように援助することなのです。そのためには、本当にあなたがたに関心を寄せてくれて、金銭のことや自分の妻子のことなどを気にしないようなすぐれた教師が必要になってきます。またそのような状態をつくり出すのは教師同様生徒の方の責任でもあります。ただ服従してはいけません。何かの問題を通じて自分自身で考え方を見出しなさい。「父親が望んでいるからこれをやっているのです」などと言わないで、なぜ父親があなたにそれを望むのか、なぜ父親はひとつの物事が良くて他は良くないと考えるのかを学びなさい。単にあなたがた自身の知性を呼び起こすばかりでなく、父親が知性的になれるよう援助する意味からも父親に質問しなさい。

しかしあなたがたが父親に質問するようになったら通常どうなるでしょう？　彼らは逆にあなたがたを押さえつけようとはしませんか？　彼らは仕事のことで頭がいっぱいでイライラしていてとてもゆっくりすわってあなたがたと一緒に生活に関する非常に困難な問題や、人生を送るについての生活方法とか妻や夫を持つことについての問題などを話し合う余裕はありません。彼らはこのような問題に深入りしてムダな時間を使いたくないのです。それであなたがたを学校へ行かせているのです。この問題に関しては教師も父親と同様ですし、他の人々と変わりありません。しかし知性を生み出すことについては、教師や父親の責任のみならずあなたがた全部の責任でもあることを銘記しておかねばなりません。

問　どうしたら人間は知性的になれますか？

答　質問の意味は何ですか？　あなたが知性的になる方法を知りたいと望んでいるのでしたら、知性とは何であるかあなたは知っているわけです。たとえばあなたがたがどこかへ行こうとする場合、目的地はすでにわかっているのですから道順さえたずねればよいわけです。同じように、あなたは知性とは何かを知っていて、知性的になる方法を知りたがっています。知性は方法の探究そのものです。恐怖は知性を破壊しますね？　恐怖はあなたがたが探究したり、質問したり、尋ねたりするのを妨げます。たぶんあなたが恐怖心を持たなければ知性的になるでしょう。そこであなたは恐怖に関するすべての問題を調べ上げねばなりませんし、恐怖から解放されねばなりません。そうすればあなたが知性的になれる可能性が出てきます。しかしもしあなたが「どうしたら知性的になれますか？」と言うのでしたら、あなたは単に方法を培養しているだけで、愚か者になるだけです。

問　すべての人間は自分たちがいつかは死ぬことを知っていますが、なぜわれわれは死を恐れるのですか？

答　なぜわれわれが死を恐れるのかですって？　たぶん生き方を知らないからです。あなたが生き方をよく知っていれば死を恐れないでしょう。もしあなたが木々や夕日や落葉を愛するなら、また泣いている男女や、貧しい人々を理解し、あなたの心に真実の愛を感じるならば死を恐れないでしょう。私だけに説教させないで一緒に考えて見ようではありませんか。あなたは喜びをもって生活していませんし、楽しくはないし、物事に対し生き生きした感覚を感じません。それであなたは死ぬときにどうなるかと尋ねるのでしょう？　あなたの生活は悲しみにあふれているために死に対し異常なほど関心を寄せるのです。たぶんあなたは死後の世界に幸福があると感じているかもしれませんが、それは大変な問題で、あなたがそのことをよく調べたいのかどうかは私にはわかりません。結局、恐怖は死や生活や病気に対する恐怖といったものすべての根底にひそんでいるのです。あなたが恐怖の原因が何であるかを理解できず、恐怖から解放されなければ、死のうと生きようとたいした問題ではありません。

問　どうしたら幸福に暮らせるでしょうか？

答　あなたは自分が幸福に暮らしている〝とき〟を知らないのですか？　病気のときや肉体的苦痛におそわれた〝とき〟を知っていますね。だれかがあなたをなぐったときやあなたに腹を立てたとき苦痛を感じますね。しかしあなたは幸福な〝とき〟を知らないのですか？　確かに幸福とはあなたがそれに無意識であったり気づかなかったりする状態です。あなたが幸福だと気づいた瞬間に幸福ではなくなるのです。そうでしょう？　しかしあなたがたの大部分は苦しんでいます。それで苦痛に気づくと、それからのがれて幸福と呼ばれている状態へと逃げ込も

うとするのです。あなたは意識的に幸福を感じようとしていますが、意識的に幸福になった瞬間、幸福は去ってしまうのです。あなたは自分が楽しいと言えますか？　あなたが「実に幸福だった。何と楽しかったことだろう！」と言えるのは直後であり、瞬間であり、せいぜい一週間後までです。あなたが幸福に対して無意識である瞬間こそ、よいところがあるのです。

神とは何か

教育問題は実際非常に複雑です。というのは我々の大部分は或る種の教育を通して究極的には自由になれると考えているからです。教育というのは抵抗力の培養ではないでしょうか？　抵抗することにより、また自分がまちがっていると考える何かに対して自分自身の内部に防壁を築くことによって、もっと理解し得るようになるとか自由になれると考えるわけですが、これは事実ではありません。あなたが或ることに抵抗すればするほど、あるいはもがけばもがくほど、それを理解できません。実際、何かを見出せるのは、考えたり発見したりするための真の自由が存在する場合だけです。

しかし自由は明らかに一定の枠の中には存在し得ません。ところが我々の大部分はある一定の枠や概念に囲まれた世界の中で生活しています。たとえばあなたがたは両親や先生から何が正しくて何が間違っているか、また何が悪くて何が良いのかを教えられます。また他人の言っていること、僧が言っていること、伝統が伝えていること、学校で習ったことなどを知っています。これらすべては一種の囲いを形成しており、あなたがたはその囲いの中で生活していながら自分たちは自由だと言っているのです。一体人間は刑務所の中で生活している限り、自由だと言えるでしょうか？

そこで人間は伝統という刑務所の壁を打ち破らねばならず、そして自分たち自身で何が真実で何が正しいのかを見出さねばならないのです。つまり人間は自分自身を探究し理解しなくてはならず、いかにある人がすぐれていようが高尚であろうが張り切っていようが、またその人の前にいてどんなに幸福感を起こそうが、単にその人に従うだけではだめなのです。重要なことは探究することであり、伝統が生み出したすべての価値や、他が良いとか有益だとか価値があるとかいうすべての物事を盲目的に受け入れることではないのです。一度受け入れてしまえば、あなたがたは順応したり模倣し始めます。順応、模倣、盲従は決してあなたがたを自由にしたり幸福にしたりはしないのです。

我々の先人たちはあなたがたは教育されねばならないと言っています。教育はあなた自身、また外部の他人によってあなたがたに課せられていますが、大切なことは自分で発見できるように自由に考え自由に探索することなのです。不幸にして大多数の人々は心を閉じてしまい、考えたり発見したりしようとはしません。深く考えること、物事に入り込むこと、自分自身で真実を発見することなどは非常に困難なことです。それらを行なおうとすれば知覚力や継続的な探究が必要になってきますが、大多数の人々はそうしようという意志もなければ力もありません。彼らは「あなたは私よりも物事を良く知っていますし、私の先生なのですからあなたに従います」と言うだけです。

そこで重要なことは、幼児からあなたがたは探究の自由があり「せよ」「するな」という壁に囲まれていないということです。もしあなたがたが「これをしなさい」「あれをしてはいけない」と言われ続けていたら、知性は一体どうなってしまうでしょう？　あなたがたはただ人生を歩む無考えな人間となり、両親からあの人とは結婚してもいいがこの人とは結婚するなと言われるだけの人間になるでしょう。そのような事は明らかに知性の活動とは言えません。あなたがたは試験に合格するかもしれないし裕福になれるかもしれません。またすてきな洋服や沢山の宝石を手に入れられるかもしれませんが、慣習に束縛されて生活する限り知性は存在し得ないのです。

たしかに知性は、あなたがたの心がきわめて活動的に鋭敏に明瞭になれるよう、自由に質問したり自由に考えたり発見したりするときにのみ起こってくるものです。そしてあなたがたは、何をしていいのかわからず内部的にはある事を感じ外部的には別の何かに従うといったびくびくした人間ではなく、充分に均衡のとれた個人となるのです。

知性的であるためには伝統を打破し、自分自身で生きることが要求されますが、あなたがたはしてよい事と、してならない事を両親の考えで規定され、また社会の慣習によって規定されています。そこで自己の内部で絶えまのない闘いが起こるのです。あなたがたはみな若いがこのようなことに気づかないほど幼いとは思えません。あなたがたが何かをしたくても両親や先生たちは「いけません！」と言いますね。そうするとあなたがたの内部で絶えまのない葛藤が起こります。あなたがたがどのような葛藤をも解決しない限り、争いの気持や苦痛や悲しみにおそわれ、いつまでも何かをしたいという気持におそわれながら、しかもそれを妨げられるのです。

もしあなたがたがそういうことを非常に注意深く探って行けば、教育と自由とは矛盾するものであり、真の自由を求めるにおいて、あなたがたが一定の物事をしないように、それ自体の浄化をもたらす全く異なった過程が始まってくることがわかるでしょう。

あなたがたが若いうちに、人生において本当にやりたいことを自由に発見したり、発見できるよう援助されることは非常に大切なことです。もし若いうちに発見しなければ一生発見できませんし、決して自由で幸福な人間にはなれません。あなたがたが今率先してやり始めるように今種子はまかれねばなりません。

あなたがたがしばしば通る道路では村人が重い荷物を運んでいますね？　それ

を見て何を感じますか？　わずかな収入を得るために、破れて汚れた服を着て、充分食事もとらず毎日毎日働いている貧しい婦人たちを見て、何か感じることがありますか？　それともあなたがたはあまりにも恐怖に支配され、自分自身のことや、試験のことや、容姿や着る物に気をとられすぎて、彼女らに注意を払うことなどできないのではありませんか？　あなたがたは彼らよりも裕福で、上流階級に属しているので、彼女らには注意を払う必要などないと感じているのではありませんか？　あなたがたは彼女らが通り過ぎるのを見て何を感じますか？　手助けしてあげようとは思いませんか？　思わない？　それであなたがたがどう考えているかわかります。あなたがたは数世紀にわたる伝統や両親の言うことで鋭敏ではなくなっており、かつある一定の階級に属しているという意識が強いので、村人たちを見ても何もしないのではないでしょうか？　実際、あなたがたは余りにも盲目的なので、自分のまわりに起こっている物事がわからないのではないでしょうか？

両親や先生の言うことに対する恐怖、伝統に対する恐怖、人生に対する恐怖など、一連の恐怖こそがあなたがたの鋭敏な感覚を徐々に破壊していくのです。鋭敏な感覚とは何か知っていますか？　感覚的であるということは、感じること、印象を感受すること、傷ついている人々をいたわること、愛情を持つこと、自分のまわりに起こっている事を感知することなのです。お寺の鐘が鳴っているときに、その鐘の音に気づいて耳を傾けますか？　水面に映った太陽の光を見たことがありますか？　侵略者たちによって何世紀にもわたり支配され踏みつけられてきた貧しい人々や村人たちに気づいたことがありますか？　召し使いが重いカーペットを運んでいるのを見たら手を借してあげますか？

このようなことすべてが感覚的であることを意味しています。しかし感覚は、教育されたり恐怖心を抱いたり自分のことばかり考えたりすると破壊されます。自分の容貌とか着るものに気をとられることや、大抵の人が何らかのかたちでやっていることですが自分のことばかり考えていることは感覚的とは言えず、精神や心が閉鎖的になり、また美に対するすべての感知力を失うことになります。真に自由であるということはすばらしい感知力を持っていることなのです。あなたがたが自己本位におちいったり、教育のいろいろな壁に囲まれたりすれば自由はあり得ません。あなたがたの生活が模倣の過程である限り感知力や自由はないのです。あなたがたが知性を呼び起こすような自由という種子を今まくことが非常に重要なのです。なぜならあなたがたはその知性を活用して人生のすべての問題に取り組むことができるからです。

問　人間は社会で生活しながらすべての恐怖から自分を解放できますか？

答　社会とは何ですか？　価値の設定、法律や規則や慣習の設定が社会ではありませんか？　あなたは外部からこれらの状態がわかり「私はこれらすべてと実際的なかかわりを持つことができますか」と言います。できるではありませんか。結局のところ、あなたが価値の枠組にはまり込むだけなら、自由だと言えるでしょうか？　一体あなたの言う「できるか」とは何ですか？　生活の糧を得ると言う意味なのですか？　生活の糧を得る手段はいろいろありますが、自由であっても自分のしたいことも選択できないというのですか？　それが「実行できない」ということですか？　自分の自由を忘れて、弁護士や銀行家や商人や道路掃除夫になって一定の枠に入ることを「実行できる」と考えるのですか？　確かにあなたが自由であって自分の知性を養ってきたのなら、自分のすべき最上のことを発見できるでしょう。あなたはすべての因習を払いのけ、親や社会が認める認めないにかかわらず真に自分がやりたいことをやればよいのです。あなたが自由であればこそ知性があり、本当に自分自身がしたいことを行ない、調和のとれた人間として行動するのです。

問　神とは何ですか？

答　あなたはどのようにして神を見つけるのですか？　あなたは他人の言うことを受け入れようというのですか？　あるいはあなた自身で神とは何であるかを見つけるつもりなのですか？　質問することは簡単ですが、真理を経験しようとすれば多くの知性と探究が要求されます。

最初にお聞きしますが、あなたは他人が神について言うことを受け入れますか？　神がだれかということは――クリシュナでもシャカでもキリストでも――問題ではありません。彼らはすべて過ちを犯すかもしれませんし、あなたの先生も誤ちを犯すでしょう。たしかに、真実を見つけ出すためには心が自由に問わねばなりませんし、それの意味するところは単に受け入れたり信じたりできないということです。私は真実に関する説明を与えることはできますが、それはあなた自身で経験する真実とは同じものではないでしょう。すべての聖典には神とは何かについて書かれていますが、記述そのものは神ではありません。「神」という言葉は神ではありません。

真実なるものを見つけ出すためには決して受け入れてはならず、本に書いてあることや先生や他人の言うことに影響されてはなりません。そのようなものに影響されれば、彼らがあなたに理解してもらいたいと考えていることしか理解できません。あなた自身の心はそれが欲するもののイメージを創り出せます。心はひげの生えた一つ目の神もイメージに描けますし、その神を青にも紫にもできます。そこであなた自身の望みに気づかねばなりませんし、またあなた自身の欲求の投影でだまされてはなりません。あなたが神を或る型で見たいと欲するなら、あなたが描くイメージは自分の望みどおりのものになるでしょう。ところがそのイメージは神ではありませんね？　あなたが悲しみの状態にあったり、慰められたいと欲したり、宗教的向上心で感傷的になったりロマンチックになったりすれ

ば、終局的には欲しいものを与えてくれる神を創造できますが、それもまだ神ではありません。

だからあなたの心は完全に自由でなければならず、そのときにのみ真実なるものを見つけ出せるのであって、迷信を信じたり、いわゆる聖典を読んだり、ある指導者に従ったりして見い出せるものではありません。この自由を有するときにのみ、真の自由はあなたの欲求からばかりでなく外部の影響からもやってきて、心は非常に清澄になるのです。そのときにのみ神とは何かを見出すことが可能です。しかしただすわって考えているだけでは、その考えは指導者の考えと同じになり、むなしいものになってしまいます。

問　自分の無意識的願望に気づくことができますか？

答　まず初めに、あなたは意識的願望に気づいたことがありますか？　願望とは何か知っていますか？　通常あなたが自分の信じていることと反対のことを言っている人の話に耳を傾けないことに気づいていますか？　あなたの願望が耳を傾けることを拒んでいるのです。仮にあなたが神の存在を信じていたとして、だれか他の人が神などというものはあなたの欲求不満と恐怖の産物だときめつけたとしたら、あなたはその人の言葉に耳を傾けますか？　もちろん聞こうとはしないでしょう。あなたは一つの事を望んでいますが、真実は全く異なったものなのです。あなたは自分の願望の中に自分を縛りつけているのです。あなたは意識的願望に対し半分しか気づいていませんね？　自己の内奥深くひそんでいる願望に気づけというのはもっと困難なことです。隠れているものを見つけ出したり、それ自体の動機が何かを発見するためには、求めている心が全く澄みきって自由でなければなりません。ですから、まず自分の意識的願望に充分気づくようになりなさい。そのとき、表面にあるものに気づくようになるにつれて、深遠なものに入って行けるようになります。

問　なぜある人々は貧しい環境に生まれるのでしょう？　他方では金持ちで裕福な環境に生まれる人もいるというのに。

答　あなたはどう思いますか？　私に尋ねたり私の答を待つかわりに、なぜあなたは自分がその問題に対してどう考えているかを探ってみようとしないのですか？　あなたはそれが通常カルマと言われている神秘的な事柄に起因しているとお考えですか？　前生であなたが高潔に生きたので今生では富と地位が与えられたとお考えではありませんか？　あるいは前生で悪い行ないをしたので今生でその償いをしなくてはならないと！

ご存知のようにこの問題は非常に複雑な問題なのです。貧困は社会―どん欲と狡猾を用いて頭角をあらわすという社会―の責任です。我々は同じものを欲し、はしごを登って出世したいと願っているのです。我々全部が出世したいと欲したらどうなるでしょう？　人々は他人を踏みつけます。踏みつけられ蹴落とされた人は「世の中はなぜこんなに不公平なのだ？　みんなはすべてを持っているのに私は能力もなく何も持たない」となげくのです。われわれが成功へのはしごをのぼり続ける限り、常に病気と餓えがつきまとうのです。理解されねばならないのは成功しようという願望であり、なぜ貧乏人と金持ちがいるのかといった問題ではないのです。変えなくてはならないことは、出世しようとか、偉くなろうとか、成功しようとかいった願望そのものです。われわれはすべて成功したいと熱望していますね？　ここに誤りがあるのであって、カルマや他の説明に誤りがあるのではないのです。実際の問題は、我々全部が出世―完全な頂点とまでは行かなくても、少なくとも出世できるだけ出世しようとする―しようと願っていることなのです。偉くなろうとか、名をあげる人間になろうという激しい欲望が人々の間に存在する限り、貧乏人と金持ち、踏みつける者と踏みつけられる者が存在し続けるわけです。

問　神は男でしょうか女でしょうか？　それとも全く神秘的なものなのでしょうか？

答　その質問に対してはすでにお答えしたはずで、あなたは聞いておられなかったのだと思います。この国は男性が支配しています。仮に私が神は女性ですと言ったらあなたはどうします？　すぐ拒絶するでしょう。なぜならあなたは神は男性だという考えでいっぱいだからです。ですからあなた自身で見つけて下さい。しかし見つけるためには、あなたはいかなる偏見も持たないようにする必要があります。

（以下次号）

志田真人訳

8頁より

べて忘れろ、ということだけだ。「それは幻覚ですよ」というのがおきまりの答となった。うっかりすると気違い扱いされかねない。誰もが黙りこむようになった。だが大衆は黙ってはいなかった。政府関係というダムこそ閉め切られても、新聞という自由の湖には大衆からの目撃報告が続々と流れ込むようになったのである。

だが、自由な調査は政府筋の検閲とよく衝突するようになった。一九四九年の夏には自由に話をしてくれた人が、一九五〇年の夏には二千万ドルやろうと言われても口を開かなくなった。しかし、今に見ていろ、と私は思うのだった。そして事実、人々が忘れたころに道は開けたのである。

増野一郎訳

22頁より

な過程が自然に展開するのである。だいいち嫌悪感も消滅する。そして学習に喜びが湧いてくる。強烈なイメージを一度描けば、あとはソウルマインドが自動的に本人をその方向へ推進するのである。

33頁より

太陽系内の諸惑星にも人々が住める可能性があるということも科学的に立証するため、多くの文献を参考にして各人がめいめいの立場で研究する。以上の内容を例会ごとに討論する。

知識がなくとも、語り合いたい友人がほしいという方、入会して活躍してみたいという方、どんな方でも大感激です。静岡県内のみなさん、あるいは日本全国のみなさん、ぜひたよりを下さい。

171 東京都豊島区池袋4―435、峰木方

秋山　清

奇蹟を起こす方法

テッド・オーウェン

●だれでも応用できる！
●魔術的に希望を実現させる！
●超能力者になるための秘訣を公開！

端的に話そう。私は読者の時間を浪費したくない。この記事は〝奇蹟を起こす方法〟を述べたものである。だから自分のマインド（心）を応用して、次にあげた各項目を実現させることに興味があるならば、この記事は役立つだろう。

■旱魃地帯に雨を降らせる。
■ある目標をめがけてカミナリを直撃させる。
■ハリケーンを起こして、それを誘導する。
■空中を飛んでいる飛行機をコントロールする。
■海に浮かんでいる船（または水中の潜水艦）をコントロールする。
■不治の病を癒やす。　その他

この記事に述べてある〝奇蹟を起こす方法〟をひとたび読者が応用するならば可能になる物事は無数にある。右にかかげた各項目は〝自分の心〟で実現させる例としてホンの少数の例にすぎない！

読者は以上の説明を疑うだろう。全然問題にならないと思うだろう。右の各項目を実現させることは人間にとって不可能と考えられるからだ。それとも、可能だろうか？　モーゼやエゼキエルはこうした奇蹟を行なったではないか。それは聖書時代の話だと？　だが、ここで大切なことは「テッド・オーウェンとはだれなのか」ということと、「オーウェンは何をやっているか」ということなのである。一見きわめてバカげたように見えることをやっていると称するオーウェンの奇蹟の根拠はどこにあるのか。

私はテッド・オーウェン、すなわちPKマン（超能力者）であり、種々の奇蹟を起こす特殊な能力の持主である。

私は右の各項にあげた、一見不可能と思われる物事をやってきた人間である。そして実際に私によって奇蹟を起こさせられた人々の宣誓書を持っている。たしかにこれまで二百件を越える〝奇蹟〟を行なったが、これらはすべて記録してあるのだ。これは物質の力を超えたマインド（心）を応用したのである。つい最近も三週間にわたって、私を非難する科学者連を尻目に私はノーフォーク地帯へ大雨を降らせたのだ。この地帯は数カ月も日照り続きで、ひどい目にあっていたのである。私はハリケーンを起こしてそれをノーフォーク州（米国東岸）へもたらしたので、雨が四日間も降り続いた。そしてこのことを立証するために一機のUFOをノーフォーク上空へ出現させたが、これは私が実現させていた他の奇蹟的現象に対する裏付けとしてやったのである。こうした奇蹟を行なう前には必ず科学者、政府、地方新聞などへ手紙でそのことを知らせていたので、単なる偶然とは言えないだろう。これについては多数の宣誓書が手許にある。

とにかく証言はそろっているので、次の段階は読者がみずから奇蹟を行なう方法を伝授する前に、土台になる知識をお伝えしよう。そうすれば実態がもっとよく理解できるだろう。

私は五十年前に米インディアナ州、ベドフォードで生まれた。四十歳になるまでは超能力の開発研究に打ち込んだが、この超能力なるものは読者がこの記事を読んだあとで応用できるのである！　これはさほど驚くべきことではない。エジソンは光を発する電灯を完成するまでに多年にわたって実に五万回の実験を重ねたのである。彼がそれに成功して一般人に知識を伝えるや、だれでも電球が作れるようになったのである。

たしかに私は一人間にすぎない。私の頭脳はUFO人によって改変されている（以下UFO人をスペース・インテリジェンスの略語としてSIで表わす）。それで私の頭は発信と受信の両道通話装置になっているのだ。したがって読者が私の指示に従って実行するならば同じ事が起こるだろう。そしてSIとコミュニケートすることが可能になるばかりでなく私と同じように各種の奇蹟を行なうこともできるだろう。

読者がこの記事に述べてある〝方法〟をマスターすれば、世界を動かすこともできるはずである。そこで疑問が起こるだろう。「このような計り知れない価値を持つ知識を、なぜ一般人に公開しないのか？」「公開するのは危険なのか？」

それでは答えよう。現在、一般大衆の中には〝眠れる人々〟がいる。つまり偉大な人格を内部に秘めた人々がいるのである。現在、米国が深刻な悩みをかかえていることは公然たる事実である。そこでSIはこれらの〝眠れる人々〟を発見し、それを覚醒させることによって一般人を混乱から救出しようとしているのである。したがって、この記事に述べてある〝方法〟をマスターして実行するならば、SIはその人に目を向けるだろう。

そのとき彼らは（SIは）その人のマインド（心）をテレパシーを用いて調査するだろう。その人の過去の行状はすべてチェックされるだろうし、その人が未来においてやれる物事のすべてが〝予測〟されるだろう。SIは未来を予知することができるからである。それからSIは本人にコンタクトするかどうか、本人の頭脳を修正するか、超能力を与えるか、人類に益するように本人を指導するか、などを決定するだろう。もし本人が他人を傷つけたり、妨害したり、盗んだり、殺したり、憎んだり、金を儲けて裕福になったりするならば、SI（宇宙人）は本人を無視するのである。

SIは、人類を建設的な方向に進歩させるために自分の新しい力を応用しようとする地球人を発見してその人を向上させることにしか関心を持たないのである！

ここで私は断言したい。こうした計り知れない価値を持つ力を応用して他人を傷つけようとする〝悪人〟による危険は全然存在しないのであると。

ここで読者は考えるかもしれない。SIは秀才だけを選び出すのではないか、と。たとえば私は一万五千人の会員を擁する〝メンサ〟という国際的な団体に属しているが、ここの会員の知能指数は異常に高くて、これに入会するためには知能テストを受けて、少なくとも一四八以上の点数を得なければならない。しかるにSIはコンタクティーとして農夫、兵士、秘書、トラックの運転手というような人を選んだりする。すなわち、この記事に述べてある〝方法〟に従って自分のマインド（心）を向上させ、メンサの会員を問題にしないほどの超人的な頭脳を持つようになれば、だれでもSIから選ばれるのである。その〝選ばれた人〟は読者である〝あなた〟になるかもしれないのだ！

よろしい。これで基礎は充分だ。伝授にとりかかろう。読者は〝方法〟を知りたがっている。この〝方法〟はオーソドックスなものではないが、心配する必要はない。それを学んで実行しているあいだは、自分のやっていることを他人に話さないほうがよい。ただし自分を援助してくれる〝ヘルパー〟だけは別だが、これについてはあとで述べる。

奇蹟を起こす「心のイメージ法」

まず第一段階として、D・ロース著のMemory Coursesという書物を手に入れることだ。この書には変わった考え方をすることによって一連の言葉を記憶する方法が述べてある。読者は最初の二十語を記憶するだけでよい。たとえば第一番目は「帽子」である。そして次に記憶しようとする物――たとえば「飛行機」ならそれを関連づけるのである。飛行機を記憶しようと思えば、巨大なジャンボ機が帽子のフチのまわりをぐるぐる回っているイメージを描けばよい。バカらしいと思われるだろうが、これは「心にイメージを描く技術」なのである。そして心にイメージを描くことは超能力者になるための二つのキイの一つなのである。ロースの書物を入手して、その中に述べてある記憶用の二十語から練習を始めることだ。帽子、メンドリ、ハム、野ウサギ、丘、クツ、雌牛、ハチの巣、サル、森、潮流、タイヤ、ホテル、皿、犬、ハト、オケ、鼻である。これをグループ学習として行ない、各メンバーに記憶の対象物を言わせて、他のメンバーが紙に記録する。二十個の連想が終わったら、順々に思い出させるのである。

超能力者になるためになぜこんな練習が必要なのか、と思われるだろう。

あなたがついに念願かなってSIと接触したり奇蹟を行なったりすると仮定しよう。実際には、これらすべては心中にイメージを描くことによって行なわれるのである。だから右に述べた記憶練習をやっているときは、実際には心中のイメージを強化するために心の中に筋肉を作り上げているのである！ その練習をやるたびに心中のイメージを見るのが次第に容易になるだろう。そのイメージをコントロールすることも楽になってくるはずだ。

超能力者になるのに、この〝心のイメージ法〟がいかに重要かということをお話ししよう。数年前、私がメイン州で著名な不動産業者エド・エームズ氏に、私は宇宙人とコミュニケートして数日以内にブレワー・バンガー地域の上空へ一機のUFOをはっきりと出現させるように頼んでみよう、そうすればその出現事件が新聞に報道されるだろう、と話したことがある。よろしい、果たして実現するかどうかみてみよう、と氏は言った。そこで私はS1とコンタクトする〝心のイメージ法〟を応用し、デモンストレーションとして私が望んでいた光景をSIに見せているイメージを描いた。すると数日後に一機の円盤がブレワー・バンガー地域の上空に目撃された上、自動車のエンジンを停止させて、消えて行った。そしてこの事件がローカル新聞の一面に掲載されたのである。この事件に関するエームズ氏の宣誓書を私は所持している。もし「心のイメージ法」を応用していなかったらこの〝奇蹟〟を起こすことはできないだろう。

別なケースとして、ワシントン市郊外の病院に入院していたブレンダ・スウ・ペンミントンという娘の例をあげよう。彼女は頭蓋骨を砕いて死にかかっていた。そして両親が娘を救ってやってくれと私に頼みに来た。そこで私はSIにコンタクトしている場面と、私がSIたちに自分がやろうとしていることを〝話している〟光景とを心中に描いたあと、病院へ行って娘の部屋の中に立ち、次元の異なるシンボル（複数）が娘の体の上に置かれてそれらが次第に大きくなってゆきながら娘を癒やしてゆくイメージを描いた。このシンボル（象徴）というのは一つは虹である。この虹が彼女の頭にかかっていて一日ごとに大きくなってゆき、ついに部屋全体に充満してゆく光景を描いたのである！ 医師団がサジを投げていた瀕死の娘にとってこれが転機となった。現在彼女はウェストバージニアで元気に暮らしている。これも「心のイ

メージ法」を応用しなかったら実現しなかっただろう。このケースも記録が残してある。

私は十八歳の時に初めてロースの記憶法を読んだが、最初はつまずいたものの、やがてマスターした。もちろん、ほんとうにつまずいたのではない。SIがテレパシーによって私を導いたからである。つまり彼らSIがまだ〝眠っている〟私を他の必要な資料を入手して彼らと共に彼らのために働くように導いたのだ。

したがって、この「心のイメージ法」が如何に重要であるかがわかるだろう！これはむつかしい方法ではなく、たいそう楽しいことであり、友人たちに応用すれば喜ばれるし、何よりも自分の頭脳を強力にするのである！

第二段階の「自己暗示法」

さて、この方法を習得するための第二段階は最も重要である！ ある有名な科学者が――本人は地位を守るために名を秘したがっている――私のやっていることを徹底的に調査して、SIが私に超能力を授けたのは、私が自己暗示力をマスターしていたからだろうと言明した。この〝自己暗示〟が第二段階なのである。人によっては自己暗示力を身につけるのに数年を要することもあるが、読者が数日間でやれるように説明しよう。

たしかに自己暗示は心中の秘密のドアーを開くキイとなるもので、これがまだ未利用のまま埋もれている偉大な力の貯蔵庫を開放するのである。これを応用してやれる例を二、三あげてみよう。

数年前テキサスで私はチャーリー・ターナーというセールスマンから車を一台買ったことがある。チャーリーは英国人なので彼の言葉のアクセントが私の興味を引いた。契約書に記入しながら二人はしゃべり合ったが、そのとき彼は、この数カ月間車は全然売れず、一文なしの状態だという。私は相手の心中を見抜いてこの男が偉大な潜在能力を秘めた異常な人間であるというテレパシックな感じを受けたので、自己暗示法を教えるから、それを練習したらどうかとすすめた。すると金がなくて教授料が払えないという。そんなものは必要ない、タダで教えてあげようと答えて、私は彼のトレーニングを始めた。

自己暗示法を習得してからまもなく彼は車のセールスをやめて輸出入の仕事を始めた。そして数カ月以内に信じられないほどに成功したのである！ 銀行に多額の預金をし、この分野で広く知られるようになった。この大成功は自己暗示法の習得の結果であり、日常生活への応用のたまものだと言っているが、そればかりではない。ある夜、郊外の遠い場所に住んでいたチャーリーはストーブの上についている外部モーターを修理しようとして持ち上げたところ、ストーブのパイロットランプがストーブを発火させ、爆発して、ガソリンの炎がチャーリーの左手と左腕を直撃した。すぐに炎を消して救急車を呼んだが、来たのは三十分もたってからだった（これは朝の三時半に起こった出来事である）。あとで彼が語るところによると、自己暗示法を応用してものすごい苦痛をなくさなかったら気を失っていただろうという。しかしもっと悪いことが起こった。病院に着いてから彼は左腕から自己暗示を解いてしまったのだ（そうせよと私が教えていた）。これは医師が彼に処置を施せるようにそうしたのである。ところが彼は医師が来て診察するまでは痛みをやわらげる注射を打てないと看護婦たちから伝えられたのである！ そこで彼は激痛にもかかわらずふたたび自己暗示をかけて、医師が来るまで四〇分間すわっていた。やがて来た医師は左腕はもう使いものにならないだろうと言う。あまりにもひどく焼けただれたのだ。このときチャーリーは私の教えにそむいて、先生の手当は必要ない、自分で腕を治す、と医師に言ったのである！ 彼はタクシーで帰宅し、一週間ほどベッドに横たわった。腕の激痛をなくすばかりでなく、皮膚と筋肉が再生するようにと、自己暗示法を用いたのである！ 一週間後に彼は家の屋根に登り、新しいテレビアンテナを取り付けた。医師が使いものにならないだろうと言った左腕を用いたのだ！ 翌週には自分の車を乗りまわして日常の仕事をやっていた。その次の週に彼は私の所へやって来て、事件のことを話し、左腕と左手を見せてくれたが、左手の甲に小さな茶色の点が残っているだけだった。腕は完全に治っていたのである！

以上の件を詳細に述べたのは、日常生活や緊急事態が発生した場合に自己暗示法が如何に役立つかを示しているからである。もちろん痛みというものは警戒信号であるから、自己暗示法は医師の所へ行くまでの緊急時にのみ応用すべきである。私はチャーリーに対して病院にいて医師の指示に従えとどなった。「医薬と外科手術が第一だ、チャーリー！」と叫んだ。「そのあとで自己暗示法を応用するんだよ」

肉体的な苦痛のコントロールは、無数にある自己暗示法のなかの一つにすぎない。ある男が自己暗示法を習得した。歯科医を死ぬほど恐れていたからだ。それで十二年間も歯医者へ行ったことがなかった。彼は自己暗示法をマスターするとすぐに最寄りの歯科医院へ突進して、自己暗示をかけた上で十二本の歯を抜いてもらったのである！

こうした実例を多く知ろうと思えば、自己暗示に関する良い書物を読むとよいだろう。それには多くの書物があるので選択は読者にまかせよう。それらは基礎知識を与えるものなので、ここではもっとすぐれた方法を教えることにしよう。

自己暗示法を伝える前に、少し予備知識を伝えておく。

痛みは警戒信号である。あなたは緊急時において痛みを消すためにのみ自己暗示法を応用し、そのあと病院へ行くべきである。それから自己暗示を解くのである。なぜなら痛みは医師が治療をする上で指針として必要なのだ。常に医師と共に行動せよ。自己暗示法を薬、医師、手術などのかわりに用いてはならない！

ところで、私が自己暗示法を教えた人

々を少し紹介しよう。実業家「自己暗示法を用いて以来、人々が私をいらいらさせなくなったし、もう私をバカにしない。私は実に嬉しい気分だ。別人になったみたいだ！」。裁判所詰め記者「あなたから自己暗示法を学んで以来、そのすばらしい結果に驚いている！　それを応用してからは幸福そのものだ！」。宝石商「あなたの自己暗示法で起こった物事は金で買えるものではない！」。秘書「最初の二週間は何も起こらなかったが、ある日突然、かつてなかったほどに楽しくなった。信じられないほどなので、この幸せが逃げることを心配している。ほんとうに幸せなのだ！」。弁護士「あなたが教えてくれた自己暗示法のおかげで、私の仕事は三十パーセントほど増進した。これは真に役立つ方法だ！」。裁判所詰め記者「今週私はもっと楽しくなり、もっとお金ができたし、これまでにないほどの多くの仕事をやった！　自己暗示法を用いてステノタイプのスピードを二十五語ほど増加させた。この自己暗示法こそは私の身に起こった最上の事柄である！」。看護婦「まるで奇蹟だ！　今は数年前と同じようによく眠れる！　この数年間は夜間半分しか眠れなかったのに」。エレクトロニクス技術者「二週間はこの方法が信じられなかったが、今はぐっすりと眠れる」

このような例はいくらでもある。この方法が如何に強力で効果的かがわかるだろう。賢明に応用すれば（お望みなら医師の協力のもとに）、自己暗示法は驚くほどに自分の生活を改良するのである！

だがもっと重要なのは、この方法によってあなたを直接にSIや超能力の方へ導く可能性もある、ということである。

さて、私がお伝えする自己暗示法は、あなたをSIの方へ導くように工夫されている。しかしここで、その方法を応用することによって役立つ事柄を少しあげてみよう。

(1)憂うつな気分をなくして、楽しく愉快にする。
(2)あらゆる物事に直面する勇気を起こさせる。
(3)疲れたとき、数分間で爽快な気分にする。
(4)必要とあらば眠気をもよおさないようにしてくれる（ただしこれをあまり長く続けないように注意すること）。
(5)一夜、または必要なときに、ぐっすりと眠らせる。
(6)肉体的な痛みや不快感をなくす。
(7)物事を遅らせるとか過食、喫煙、飲酒などの悪習をやめさせる。
(8)恐怖、緊張、自意識過剰などを除く。
(9)自分の人格、他人に対する態度、周囲の状況などを改良する。
(10)自分を改良して収入をふやす。

自己暗示法の練習法

さあ、自己暗示法の〝秘密〟は何か。

それはこうなのだ。人間の普通の意識状態においては、想念は潜在意識にさほど深く記録されない。ところが自己暗示による〝引き金メカニズム〟を応用すると、何に想念を集中していようと人間の心の力のすべてはそれに集中する。そして自己暗示をやめると、目覚まし時計と同じように心がセットされて、自己暗示をかけているあいだに命令しておいた結果が最大限に得られるのである。普通の意識状態においては人間は知能の五ないし五パーセントを用いているが、自己暗示によってコントロールされた潜在意識は、知能の七十ないし九十パーセントまでを引き出させるのである。何という相違か！

よろしい。それでは正確に自己暗示をかける方法を少しずつ教えることにしよう。第一段階は、〝ヘルパー〟から暗示をかけてもらうのである。ヘルパーは夫か妻、ガールフレンドまたはボーイフレンドなど、だれでもよい。この方法を茶化さないでまじめに取り上げてくれる慎重な人を選べばよい。あなたが何らかの疑惑を持っているなら試みないようにしていただきたい。

振子を一個用意する。珍品店で入手してもよいし、なければ長さ十五センチの糸の端に指輪を結びつけてもよい。室内のライトを消して、あかりを一灯だけあなたの後頭部の上のあたりにつける。そしてあなたは寝イスに横たわる。ヘルパーがその横に立ち、糸の端を持って、振子をあなたの眼前にぶら下げたまま前後に振り動かす。あなたの眼の少し上のあたりを振幅十五センチで動かして、あなたはそれを見つめる。そして揺れ動く振子に眼が集中しているあいだに、ヘルパーは次の言葉を述べるのである。

「さあ、あなたは私の言葉を聞いて下さい。動く振子をじっと見つめながら私の声を聞きなさい。あなたの全身は次第にリラックスしてきます。眼も次第にリラックスします。二つかぞえると眼をつむり、あとは私の声が聞こえるだけです。一つ……二つ。さあ眼を閉じなさい。眼を開こうとしないように。あとでゼロというまではこの深い精神集中を解かないように。

私の声だけを聞きなさい。他の事を考えないように……。あなたは今深くリラックスしてゆきます。呼吸をするたびに全身がやわらかくなります。あなたに役立つ私の言葉だけを聞きなさい。全身がますますやわらかくなるのを感じます。両手は布のようにやわらかくなる。

私の言葉を聞くことに心を集中させれば、ますます心の力を通じて良い結果が得られます。さあ、肉体内でこっている筋肉をすべてリラックスして、やわらかくしなさい。

ますますおだやかな感じ……。おだやかさと幸福感が全身を包む感じ……。あらゆる緊張といらだちは顔と首から消えてゆく。顔と首をリラックスして、この部分はやわらかくリラックスしてゆく。

（訳注＝以下、全身をリラックスさせるための同じような言葉をしばらく反復する。これはいわゆる催眠術とは異なって、眠らせるのではなく、ヘルパーの声に心を集中させる基礎練習である）

さあ、注意して聞きなさい。今後あな

たが自分で自己暗示を練習するときはいつも、五倍もリラックスし、五倍も全身がやわらかくなります。毎日自己暗示法を応用するたびに、ますます楽しくなりリラックスしてゆき、神経はますます静まってくる。練習するたびに急速にリラックスできるようになり、ますます練習が容易になる。そして練習するたびに、ますます容易に心を集中させることができるようになる。

さあ、私の言葉を注意して聞いて下さい。そして言葉の一つ一つを受け入れなさい。これから述べる言葉は生涯あなたの潜在意識に刻みつけられて消えることはない。そして生涯あなたに対して強力に役立つのだ。強力に！

今後あなたが自分で自己暗示法を応用するときは、次のようにしなさい。

まず眼を閉じる。次に心の中に一個の電球を描き、自分の手が両眼の間のミケンに触れて、パッと点灯したところを心に描きなさい。これが〝引き金メカニズム〟。これを描き終わった瞬間あなたは表面の意識を消して、巨大な潜在意識にあかりをともしたことになる。ただしあなたが実際に目覚めていることに相違はありません。次にゆっくりと三つまでかぞえなさい。そうすると自己暗示の準備ができたことになる。それから力強く自分自身に語りかける。何度もくり返して、そのたびにますます力をこめて。たとえば『今日は私は幸せになる』と言うかわりに『今日ばかりか毎日私は幸せになり、リラックスして、おだやかになる。今まで私を悩ませ、いらいらさせていた物事は、もう私を挫折させる力を持たない。それらは壁にはね返るゴムボールのように私からはね返って行くのだ！』

言い換えれば、自己暗示法を行なっているあいだに自分に対して激励演説を行なうのです。これを力強く反復する。それから自己暗示を解くのですが、このときは常に次の手順に従うのです。こう言えばよい。『私はゼロをかぞえて体を起こす。爽快な幸せな気分に満ちて、心身ともに完全にバランスがとれている』続いて逆にかぞえなさい。……四、三、二、一、ゼロ……額に手を触れたときに頭の中の電灯がパッと消えた光景を描いて、『さあ、起きよ！』と自分に対して大声で呼びかける。そして眼を開く。両眼の前に手を上げて指をビシッと鳴らす。これは深い精神集中を解いたシルシです。

以上述べた方法を心に刻みましたか？

（彼または彼女はうなずく）よろしい、それでは私があなたの額に触れると、今述べた方法が生涯あなたの潜在意識にしっかりと刻み込まれる。これはあなたにとって強力に役立つ。強力に！

（ヘルパーは相手のミケンに触れて言う。『さあ！』）

さて、あなたが深い集中を解く前に、もう少し指示しておくことがあります。このあとの二週間は、起こってくる物事についてあれこれ考えたり、それが妨げるのではないかと心配してはいけません。それは明るいともしびを持って暗い押入れに入り、その中に〝暗黒〟があるかないかを見きわめようとするようなものです。すばらしい結果を得るための秘訣は、せんさくしないで自分をそのままにしておけばよろしい。この自己暗示法を完全にマスターするには二週間から四週間かかるでしょう。だからそれまでに奇蹟的な結果を期待しないことです。

さあ、ゼロをかぞえれば深い集中が解けます。楽しい爽快な気分で、心身ともに完全にバランスがとれて……。あなたの神経はリラックスして落ち着いています。心身からあらゆる緊張は取り除かれる。体は爽快で軽く感じる。心に何かの心配、恐怖、不安があっても、集中を解くと消えてしまう。四、三、二、一、ゼロ！　眼を開きなさい！（ヘルパーは聞き手の眼前で指をビシッと鳴らす）」

（訳注＝ここからふたたびオーウェン氏の話にもどる）

どうだろう、読者のみなさん。これはちょっと長いけれども、ヘルパーがあなたに自己暗示法を教えるのに必要な〝魔法の公式〟なのだ。右に述べた手順のすべてを翌日かまたは数日後にもう一度くり返して行なうとよい。今後、いつでも自己暗示法を応用するたびにやらねばならないのは、まず自分の右手か左手の親指のツメの根元の白い半月形の部分を見つめて、「心は深く静まってゆく」ととなえるか思念することだ。そして眼を閉じて三つほど数をかぞえる。そうすれば自分の望ましい物事が実現するように自分自身に語りかける準備ができたのである。

SIに接近する方法

SIに接近するための方法は次のとおりである。次の言葉を小さな紙に書いて常にハンドバッグか財布に入れておく。

「私は今、自分の心を長い時代を通じて古代エジプト、インカ、アステカの時代へ逆行させる。当時の偉大な秘密を知り、その秘密を私の所へ持ち返り、今私の住む世界で人類を援助するために応用するのである」

自己暗示法を学んだら、週に二度この紙片をベッドへ持って行く。寝る前に普通の自己暗示法を行なう。暗示法が終わって眼を開く前に、自分に対して次のように語りかける。

「私が眼を開くとき、自分で読む内容は大自然の力すべてにより必ず実現するのである」

それから眼を開いて、紙片の文章を力強く読む。

もう一枚の紙片には次のような三番目の公式を書いておく。

「私はここに私の心、魂、肉体を創造主にささげ、創造主が世界と人類を改善されることを決定されたときに共に働くのである。しかし私は悪魔を根底から否定し徹底的に排除する！」

右の第二の公式も週に二度応用するのだが、ただし朝、目覚めた直後がよい。普通の自己暗示法を行なったあと眼を開いて、右の公式を力強く自分にむかって読む。それから眼を閉じて数を逆にかぞ

えて、起き上がる。そうすると楽しい一日をすごすことになるのだ。

以上で大体に説明したが、もしヘルパーがここに述べた方法に疑惑をいだくならば、真に信頼できる別な人をヘルパーとして選ぶ必要がある。私は多数の人にこの公式を教えてきた。正しく行なうならば魔法のように作用する。だからヘルパーは信頼できる人でないといけないのだ。

「こんなことをやっている暇がないよ」と言う人もあるだろう。「興味はあるがむつかしすぎる」と言って本誌をバタリと閉じてテレビを見る人もあるだろう。

なかには深く研究して記憶法を習得し強力な「心のイメージ法」を開発する人もあるだろう。そしてヘルパーを得て自己暗示法をマスターするだろう。そして百万の味方を得たように感じるだろう。次第に幸せとなり、時の経過とともに自分の生活全体が変わって改善されるだろう。だが紙片に書いた公式はバカらしく思われて、やらないかもしれない。

少数の人はこの記事に述べた方法のすべてをまじめに実行するだろう。そうすると二つの結果の内、一つが起こるだろう。あたかもこちらが相手のドアーベルを鳴らしたのに応答するかのようにSIが注目するだろう。彼らは本人の心を調べて、別な惑星からもたらされた秘密事を扱うのに適した人間であるかどうかを決定するだろう。彼らが本人の心を調べて、その結果、欲望、意志の弱さ、権力欲、貪欲、野卑、残酷さなどを発見したら――本人がどんなに他人をごまかしていても、彼らSIには地球人の心の状態すべてがわかるのだ――それ以上の進展はないだろう。そして超能力は与えられないだろう。

しかしあなた方の社会のど真中に――おそらく主婦、社員、トラック運転手、弁護士、野球選手、その他職業を問わず、子供でも――私が述べた方法をマスターできる潜在能力を秘めた〝眠れる人〟が少数ながらもいて、SIに心を調べられ、テストに合格して選ばれるような人がいるかもしれないのだ！

そのときからSIは本人を選んで超能力を授けるだろう。彼らが私にそうしたように――。

あなたはSIによってトレーニングと協力が望まれている。世界は現在危険な状態にあるからだ。人類はいつ破滅するかわからない。しかしあなた方のだれかがSIに見出され、認められてトレーニングを受けるならば、まだ世界を幸福な安全な場所にするチャンスはある。健全に生活でき、戦争も殺人も憎悪もない場所にすることができるのだ。

終わりに、創造主があなたがたを祝福されんことを祈る。勇気がわいてきて、この記事に述べた方法を試みようという衝動を感じるならば、ぜひやっていただきたい。創造主のために！

久保田八郎訳

訳編者付記

テッド・オーウェン氏の「心のイメージ法」と全く同じ原理を述べた、望ましい物事を実現させる方法を、「希望を実現させる心の映画法」と題して本誌第五十二号の二十二頁に編者が述べたことがある。その当時編者はテッド・オーウェン氏なる人物を知らず、五十二号の記事は別な方面から与えられたインストラクションを伝えたものであるが、むかしから編者は何となく自分でこの方法を心得ていて望ましい物事の実現に応用していた。東京へ移住してからは特にこれを実行してしばしば好結果を得ているし、五十二号に発表以来、会員の方々からも種々の実現報告を受けている。

自己暗示法も重要である。本記事に述べてある方法はいわゆる催眠術や自己催眠法ではなく、強烈な信念を潜在意識に叩き込むための積極的な推進行為であって、普通の催眠術の如く被術者の意志を術者に譲り渡すことではない。潜在意識のメカニズムは科学的には未解決であるが、魔術的な力を持つことはたしかである。これに強烈な建設的暗示を吹き込むことが〝引き金〟の役目をし、本人の活動をその望む方向へ進行させるばかりでなく、運命の形成にも決定的な役割を果たすと考えられるが、科学的な機構はやはり不明である。この記事でヘルパーが練習者にむかって述べる言葉は、自己暗示を行なう方法の説明であり、単独で開始するよりもこの方がより大きな印象を与えることになる。しかしどうしてもヘルパーが見つからねば、このイントロダクションをはぶいて単独で自己暗示法を実行して差支えない。いずれにしても強固な意志を持って続ける必要がある。気まぐれに試みてすぐやめるのでは何にもならない。

SIとのコンタクトを図るための基礎姿勢として述べられた最後の部分の「本人がどんなに他人をごまかしていても、彼らSIには地球人の心の状態すべてがわかるのだ」はきわめて重要である。だからこそ日本GAPは多年にわたって想念観察を奨励してきたのである。

我々は他人をあざむく前に自分自身をあざむかないように自省する必要があるがそれにはまず自分自身の心の状態、想念内容などを知らねばならない。そのためには絶えず自己の想念を注目し修正することが肝要である。そしてそのような行為自体が別の場所から――たぶん上空のどこかから――SIによって観察されており、更にそのような人間たちの行為も宇宙の到る所で観察されているのである――創造主によって！

一般人は本記事に述べられた「心のイメージ法」や「自己暗示法」の驚くべき効果を全く知らないし、想念観察の意義についても知識を持たないにもかかわらず、自己の心の内部は自身が最も熟知していると思いがちだが、これは錯覚である。自分が何をやろうとしているかについて知らないのが地球人の特徴である。第一、人間に与えられた〝生きる目的〟をほとんど意識することはなく、実際には何もかも不明のままに生涯を終えるのが普通だが、こうした人々の放つ想念が充満するこの世界で、ひとり高次の精神状態を保つのは容易ではない。精神問題の探求は人間にとって最も重要である。

超能力開発の意義

久保田八郎

事業をやっていて痛感するのは、取引先との交渉や新規契約の取り付けなどに際して相手の甘言にひっかからぬように警戒を要するということである。その場合には徹底した腹の探り合いが行なわれるのであって、ポイントは相手の信用度にある。眼前にいる未知の人が正直で誠実なのか、それともハッタリ屋で虚言癖のある人間かを適確に見抜かなければならない。こちらが如何に高尚な精神を持ち、慈悲の心に満ちていても、残念ながら地球世界では商取引の場でそれが通用しないことが多く、逆に「こいつはお人好しだ」と見られて低次元な人に利用され、健全な事業活動が破壊されることもある。商取引に限らず、如何なる利益社会や共同社会にも反宇宙的な人間がいるから、厳に注意を要する。宇宙哲学の実践は人間としての宇宙的な生き方の確立を目指すものではあるが、邪悪な人間の奸計におちいって、なすがままに相手に蹂躙されるのが慈悲の精神ではない。ときには断固たる態度を示して低次元の無法な攻撃を防ぐ必要も起こってくるし、そうすることによって相手に反省の機運を生ぜしめることが真の慈悲となる場合もある。つまり単なる〝お人好し〟になってはいけないということなのだ。お人好しになるのならば徹底してその精神を貫くのがよかろう。強盗に押し入られて身ぐるみはがれても、なおかつ感謝して、よく強奪してくれたと相手を礼拝するほどの高潔な人格者ならば、それはそれで一つのカルマを作ることになるだろうが、これは被害者側の試錬にはなっても業界では通用しないことで、これでは社会秩序は維持できなくなる。「社会秩序が維持できない」と表現せざるを得ないほどこの世界は危険であり低劣な想念が充満していることは事実である。だからこそスペース・ブラザーズはこの地球でひそかに居住して絶対に正体を洩らさないのである。ブラザーズでさえこれだから、知覚力の乏しい我々地球人が愚鈍な生き方をすれば劣敗の人生をすごすことになるだろう。再度述べると、慈悲の精神とは取引先や事業関係者のすべてをあたまから信用してかかることではないのである。といって社会で不信感が蔓延すれば悲惨な状態が展開するだろう。ここで意味するのは、あらゆる人間の内部に宿る創造主の意識（英知ある生命）を認める一方、他人の未発達なセンスマインドから出る曖昧模糊とした判断力にもとずく言行に同一化してはならないということであって、これは「和して同ぜず」という論語の名句が見事に表現していると思う。

悪とは何か？　ゾロアスター流に言えば、それは「熟さない善」であるということになるが、この言葉にはある種の期待感がこめられている。現在は未発達で地球人が勝手に分類したという善と悪の二次元のうち後者の領域の中を低迷している人も、いつかは善の次元に昇華するという期待感である。果たしてそうだろうか。悪質きわまりない人間も「必ず」善人になるという保証があるのだろうか。この激動の惑星地球の万人が宇宙の法則に目覚めて天国のような社会となる日が現在の文明期の崩壊以前に来るだろうか。他人や社会にいつまでも期待がもてるほどこの世界は安穏無事であろうか。

ここで根本的な問題が起こってくるのである。そもそも他に対する期待または信頼、寄りかかりなどを基本的態度としている限り、自己の知覚力は発達しないということだ。端的に言えば、他人が善人か悪人かを人間のセンスマインドで論議するよりも、まず自己の知覚力を向上させることが先決問題である。もっと具体的に言えば、個人のテレパシー、透視力等の超能力の開発が最重要事であって、これこそ宇宙的行動の基本的要件となるのである。この能力を持たないで他人の評価や事物への執着等に終始しても始まらない。自分の行動の結果はすべてカルマ（原因と結果の法則）に従うが、このとき事態を予知するテレパシックな直感力が絶大な威力を発揮するのである。

私自身も過去において悪質な妨害や陥穽に何度か直面したが、その都度超能力者のアドバイスや私自身のささやかな感知力によって切り抜けてきた。数名の偉大な超能力者の能力は驚嘆にあたいするが、そのうち悟ったことは、自分自身でこの能力を開発しなければだめだということであった。したがって月例研究会ではテレパシーの合同練習を実施しているし、私自身もテレパシー、透視力等の自己訓練を行なっているのである。

練習次第でだれでも開発できる

私の経験によれば、テレパシーや遠隔透視力は練習次第でだれでもある程度は開発できると思う。多くの人が超能力に興味を示しているし、その方面の著書が読まれているようだが、毎日一定時間、計画的に練習を続けているという例はあまり聞かない。もっとも、なかにはひそかに猛練習を続けていながら他言しない人がいるのかもしれない。

テレパシーの参考書としては種々あるなかで何といってもアダムスキー著「テレパシー」が最高である。超能力開発の基盤としてまず宇宙的感覚を身につけることが重要であるが、その方法を具体的に詳述したものとしてこれ以上の書はない。テレパシー練習法はこれに書いてあるので、ここでは省略する。練習に際しては親密な人同士（夫婦、友人等）で二人一組となって行なうのがよいが、練習相手がいなければ一人だけでもやれる。ESPカード、トランプのカード、文字

・図形等を封入した封筒等、工夫すれば方法はいくらでもある。日常生活においても、手紙を受け取ったときすぐに封を切らないで、しばらく手許において、中味を直感的に言い当てるようにする。電話がかかってくれば、無意識に受話器を耳にあてないで、「だれから、何の用件でかかったか」を瞬間的に直感するようにする。玄関のベルが鳴った場合も同様である。電車の中で人が読書していれば、何の本を読んでいるかを本人の想念をキャッチして知るようにする。他人と対談している場合は絶好のテレパシー練習が可能となる。相手が発言する直前に本人の想念内容を感知し、「この人は今こういうことを言おうとしているな」と、事前に印象を感受するようにする。こういう練習法を自分の日常生活のクセにしてしまうのである。この態度がクセになってしまうと無意識に無考えに行動することなく、何が起こっても直前に一瞬リラックスして内部からわき起こる印象を浮かび上がらせようとする習慣が身について、次第にテレパシックな感受力が出てくるようになる。この日常のテレパシー練習にはあとで必ず正解が出てきて、自分が事前に出した解答の正誤がいやでもわかるから、きわめて都合がよいし、だいいち、練習するのに金がかからない。いつでもどこでも無料で行なえる。こんなすばらしい練習法を知っていながら実行しないのは大損というものだ。

以上はテレパシーの主として受信練習に関することであるが、送信の練習も一人で行なうことができる。夜間などに遠方にいる友人か家族に「こちらへ電話をすぐにかけよ！」と強烈に思念する。相手がテレパシックな受信能力はなくてもたまたまリラックスして受信に適した状態にあれば感応することがある。あるいは電車内で少し離れた位置にいる人を目標にして、「こちらを向きなさい！」と送信する。これらが不成功に終わっても決して失望することはない。相手に受信能力がなかったり自分の送信力が弱かったりすれば成功しないのは当然なのだ。要は忍耐強く続けることである。

私の知識によれば、こうした超能力の開発は練習量に比例するようである。つまり自転車や自動車の運転能力は正常な人ならばだれにも潜在するのであって、練習すれば次第にやれるようになるが、これと同様にテレパシーや透視の能力も本来人間の内部に潜在するのだけれども、大半の人はこの事実に気づかないか知っていても練習をしないために能力が引き出されないのである。このような超能力は特殊な人だけが持つ天賦の才能であって普通人はいくら努力しても不可能だ、と考える傾向が一般にあるが、そんなことはない。だれが練習しても方法さえ正しければ、練習量に応じて少しずつ能力が出てくるのである。

イメージを描くとよい

重要なのは、「自分は必ず超能力が開発できるノダ！」という絶対的な確信をまず持つことである。やっているうちに何とか変化が起こるだろう、という程度ではモノにならない。強烈な確信を持つためには最上の方法がある。それは本誌第52号22頁に掲載された「希望を実現させる『心の映画法』」と題する記事に述べた、心中にすでに実現したイメージを描く方法である。これと全く同じ方法が本号の記事「奇蹟を起こす方法」に詳述してあるので、52号をお持ちにならぬ方はそれを読んで応用されるとよい。簡単に説明すると、『「超能力は開発できる」という信念を持つ」というよりも、むしろ、すでに自分が超能力者となってしまった姿を明瞭に心の中で描くのである！これをテッド・オーウェン氏は「心のイメージ法」と呼んでいるが、方法は「心の映画法」と異ならない。この不思議な魔術のメカニズムは科学的には未解決だがあらゆる分野に応用できることは多数の実験者の報告からみても明らかである。GAP会員でこの方法を用いてすばらしい成果をあげた方々を私は知っているし、私自身も応用して信じられないような結果を出したこともある。たとえば今年の二月頃だったか、ある夜、私は自分がすばらしい透視能力者になっているイメージを強烈に描いて就寝した。数日後、会社からの帰途、S駅で下車して駅前にある書店へ立ち寄った。いつもなら向かって右側の語学関係の書棚をざっと見渡し、ついでに私の会社で出している「UFOと宇宙」誌の売れ行き状況を見てすぐに店を出るところだが、この日に限って私は奥へまわり、どういうわけか滅多に行ったことのない左側の書棚の方へ引っ張り寄せられるようにして、ゆっくりと書物の群れを見ながら移動した。そして全く関心のない育児、生け花、料理、マージャン、囲碁等の本がぎっしりつまっている棚の前の或る位置で体がピタリと止まった。ひょいと眼前を見ると、多数の書籍の中にひっそりと埋もれている透視力に関する一冊の小型本が眼についた。それは体を止めた位置の直前にあって、まるで私がそこへ来るのを待っていたかのようだった。取り出して拾い読みしながら、これは本物だ！と直感して買い求めた私は、以後その著者である透視能力者から驚嘆すべき透視によるアドバイスを直接に受け、これが私の透視力開発練習に拍車をかけることとなり、超能力研究の一大転機となったのである。

以上は私の数多い体験の一例にすぎないが、希望を実現させる手段としてイメージを描く方法は単なる信念以前の問題として重要な意義を帯びていると思うので、現在も私はこの方法をいろいろな面で応用しているのである。「実現するかどうかはわからないが、とにかくやってみよう」というのと、最初から「すでに実現している！」と思い込んで行なうのとでは想念のパワー自体に大差がある。その強力な想念放射線が四次元世界に原型を形成して、やがて三次元世界に投影されたときに実現の過程が生じると考えられるが、とにかくこの問題は理屈ではなく実験によってみずから証明してみることだ。心の分野においては科学的に不可解な神秘的な面が多々あるけれども、

実証による帰納法も無視できない方法である。

四官の抑制と想念の観察

以上は、超能力開発が自己防御の武器として重要であると言っているのではない。それもあるが何といってもこれは宇宙的な人間として生きる上で必然的に要求される要素である。なぜならテレパシーの正しい開発には四官のコントロールと想念の観察を基本的態度とする必要があるからである。当然のことながら暴飲暴食をつつしまねばならない。つまり味覚の抑制である。アルコールで神経を麻痺させていてはテレパシー練習は絶対に不可能である。したがって練習前には飲まない方がよい。タバコは少々なら差支えない。むしろ煙を吹かすときのリラックスした気分は受信に好都合な場合がある。といって喫煙を奨励しているわけではないから、誤解なきようお願いする。

受信時にはリラックスした状態を保つことが大切であるが、これは必ずしも寝椅子かベッド上にだらりと寝そべっていることではない。そういう姿勢はかえって好ましくない。むしろ体を起こして真直ぐに伸ばしながら、しかも緊張感を解放した状態である。だから仕事中でも歩行中でもリラックスすることは本来可能なはずである。このよい例は、風呂上がりの際の心身ともに爽快な清新な気分である。あのような気分を何とかしてつくり出すのである。これには技術を要するが、練習を続けると慣れてくる。

戦後まもない頃に私は自宅で入浴中、湯ぶねの中でゆったりしていたとき、突然胸騒ぎが起こって兄のことが気になり始めたことがある。その頃、彼は遠方の町の病院に入院中であった。しきりに気になるままに就床したところ、夜中に死を報じた電報が来たが、死んだ時刻は私が風呂釜の中で胸騒ぎを起こした時刻と一致した。異母兄ながらも私をよく可愛がってくれた彼は臨終の際に私の名を呼び続けたということであった。これは入浴中にリラックスして〝受信感度〟良好であったためのテレパシー現象だと思う。

しかし真のリラックス状態を起こすには四官の抑制によるセンスマインドの鎮圧が重要である。焦燥、怒り、憎悪、悲哀等による緊張感はテレパシー受信の大敵であって、これは退治する必要がある。むしろ万物一体感を基調とした平安かつ公平な心的態度を保つ必要があるが、これは前述の如く、他人の低次な想念にも何にもかにも同調することではなく、万物に浸透しているライフ・パワーを認めて、それとの一体感を起こすことを意味するのである。これは容易なことではないが、内部にそのようなフィーリングを生ぜしめる練習を続ければ、次第に精神の高揚が可能となってくる。とにかく何にしても練習すなわち自己訓練を行なうことが、先決問題であり、言葉による理論の展開だけでは何にもならない。

むかし若年の頃、名僧と称される人に会ったことがある。私がテレパシーの話を出すと、その坊さんは即座に否定して、仏教の精神からいえばそんなものは邪道だとコキおろし、ビールをがぶ飲みしてはわけのわからぬことを大言壮語していた。しかし仏教関係者でアダムスキー哲学を非常に熱心に研究される方々もあるところからみると、教義の解釈は千差万別であるらしい。

一体に如何なる宗教や哲学にしても、また科学上の推理や発見にしても、つまるところは人間の〝感覚〟の問題に帰着すると思う。この世界ではこれが未発達なために（とスペース・ブラザーズは指摘する）、センスマインドによる推理に頼らざるを得ず、いきおい種々の思惟法が生じ、道徳的基準を設けて言動を律することになった。この枠からはみ出れば社会的制裁を受けねばならぬ。

しかしこのような次元から飛躍して高度な自由を得る可能性はある。一般人のレベルを越えた〝超感覚力〟の探究とその応用による〝新しい世界〟の発見である。

学習も容易になる

我々は言葉の綾に陶酔してはならない。宗教的哲学的美辞麗句に魅せられて幻想の世界を彷徨するのと、現実の世界を直視してその背後にある実体を認識するのとは根本的に異なるのである。前者を私は宗教的感傷と呼んで、真の求道精神と区別している。しかし我々はともすると、この感傷におちいりやすい。そして甘えの精神が増大するのである。自分自身に対してきびしくあろうとすればするほど内観的になるはずであり、その極限に達したときが超感覚の発現のときであろう。換言すれば、超感覚力の開発には内界観察と外界に対する alertness（注意、警戒というような意味）が不可欠な条件である。これからみると他に対する非難、憎悪等が如何に次元の低い精神の状態であるかがわかるのである。内観を忘れているか、またはその重要さに気づかない状態であるからだ。すなわち非難、憎悪等は外界のある一点に激烈な想念を集中させた一種の自己忘却状態であり、放心または無意識の状態でもあると言えるのである。

この世界を生き抜くのは容易ではなく油断をすればたちまち蹴落とされてしまう。そのためには高度な直感力と同様に世渡りの実力を持つことも必要である。実社会で愛の心をもって他人を救済するのはよいが、その方法は賢明でなければならぬ。そのためには相応の知識と仕事上の実力を持つことである。宇宙的な主義思想に傾倒するのあまり簡単に学業や仕事を放棄するのは必ずしも賢明とは言えないだろう。知覚力が鋭敏になれば学業や仕事に対する理解力も増進するはずである。学業嫌悪症にかかったら暫時休息して気持を静めてから、「心のイメージ法」を応用し、自分がすでに難解な個所や記憶しがたい部分を完全に理解し暗記して試験で百点を取って欣喜雀躍している姿を強烈に描くとよい。そうすると、いつのまにかすぐれた学習法をやることになるか、または友人等の援助者が現われて問題の個所を教えてくれるよう

（13頁に続く）

永遠に生きるためには

ジョージ・アダムスキー

人間の転生の回数は十五、六回。この満期を更新するには？　読者の要望にこたえて、本誌第19号の重要記事をここに再録。

ゾンビとは何でしょう？　ゾンビとロボットとは同一物です（訳注＝ゾンビとは魔法によって生き返らされた死体。あやつり人形と化す）。それは意志を持たない形態物か、または他からの影響力によってあやつられる形態物です。ロボットは遠隔操作かまたは内部に仕掛けられた録音テープによって作動しますが、それが知的な表現判断として唯一のものです。

三十億の人間が地球の表面から突然一掃されたらどうなるでしょうか。おそらく全人類の九十九パーセントは〝永遠〟というものを知らないで消滅するでしょう。人間は〝習慣〟という録音テープによって動いているからです。人間は創意をあらわすことはまずありません。「肉体を斬る者を恐れないで、魂を斬る者を恐れよ」とイエスは言っています。私はイエスがウソをついているとは思いません。

斬られたり破壊されたりすることがあるとすれば魂とは何でしょう？　これはハニー氏の記事「センスマインドとソウルマインド」（本誌18号）にうまく説明されていると思います。これがイエスの言う〝破壊されることもある魂〟です。この魂は肉体と同様に無機物でできているのですが、相続の法則によって〝大霊〟の潜在性をもっています。しかし永遠の生命の目的――そのために魂が創造されたのですが――を遂行するためには魂自体の持つ領土を捨ててしまい、個我としてのそれ自体をなくして〝宇宙の魂〟の奉仕のために生まれ変わることが必要です。これが「私の意志でなくて、あなたの意志がなされる」という意味です。

これを別なふうに説明しますと、無機物でできている個人の魂は〝大霊〟と融合するようになるものなのである、と言えます。そこには〝二〟のかわりに〝一〟だけが存在します。そこで私と父とは一体であると言えるわけです。〝父〟は永遠ですから魂も永遠化するのです。しかし現在そうであるように、現世においては魂は一時的なものです。そしてそれは〝大霊〟の一つの現象であるために、他の現象によって自らを支えています。ところが他の現象のほとんどは、他人によって無数にくり返されてきた現象の世界から影響を受けています。

そこで人類の大多数はゾンビ型の生存を続けているか、またはロボット型の生活を送っていて、創意をほとんどあらわしていないということができます。

この問題については、残念ながら適確に説明した文献が他に見当たりません。〝生まれ変わり〟について書かれた書物のほとんどはカルマについて語り、結局〝だれもが救われるのだ〟という印象を与えています。あるいは「人間はレッスンを学ぼうとしなくても自己の生き方や向上の仕方について思いわずらう必要はない。なぜならば人間は〝永遠なるすべて〟と〝何度も生まれ変わる機会〟を持っているからだ」と言う人もあります。しかしこれは真実ではありません。

人間は宇宙の法則に従うことや、〝宇宙の魂〟に個人の魂を没入させることを学ばなければ、本人は個我としての自己の正体を破壊することになるのです。人間は無限に生まれ変わる機会を持っているのではありません。これはあなたが自己の正体を永遠に持ち続けようとする場合にきわめて重要なことです。

この法則をこの世界で教えている教師を私は知りません。なぜならこれは土星で私に与えられた全く新しい教えであるからです。人間が自分の本来の自我に気づくには、この法則の熱烈な探求を必要とします。右の法則は一度正しく理解されるならば実際に永遠へのカギとなるものです。それは真実の生活にもとづいて発見されたのであって、希望的観測から作られた法則ではありません。

次のように言う人があります。

「この地球と同様に、他の諸惑星でも人間がどんどん生まれるならば、宇宙はまもなく超満員になるのではないか」

答は「ノウ」です。永遠の生命を得る可能性を示さない人は消去されるという法則があるのです。これについては先にも簡単に述べましたが、次の言葉はこの法則について言及したものです。

「自分の魂を惜しむ者は魂を失い、自分の生命を失う者は永遠の生命を得るだろう」

この言葉の意味は、自分のエゴを保とうとする者は宇宙的な永続性を得るためのすべてのチャンスを失うけれども、自分のエゴ（個人的な意見や欲望）を捨てる者は永続する生命を得るということです。それは落下して海洋と一体化する一滴の水滴に似ています。その場合は個別化された形あるものとして存在しなくなるのです。あなたをも含めて一体どれほどの数の人が永遠の生命を確保しているか知っていますか。これには自分自身を〝至上なる英知〟の意識の中に没入させることを必要とします。それ以外に方法はありません。

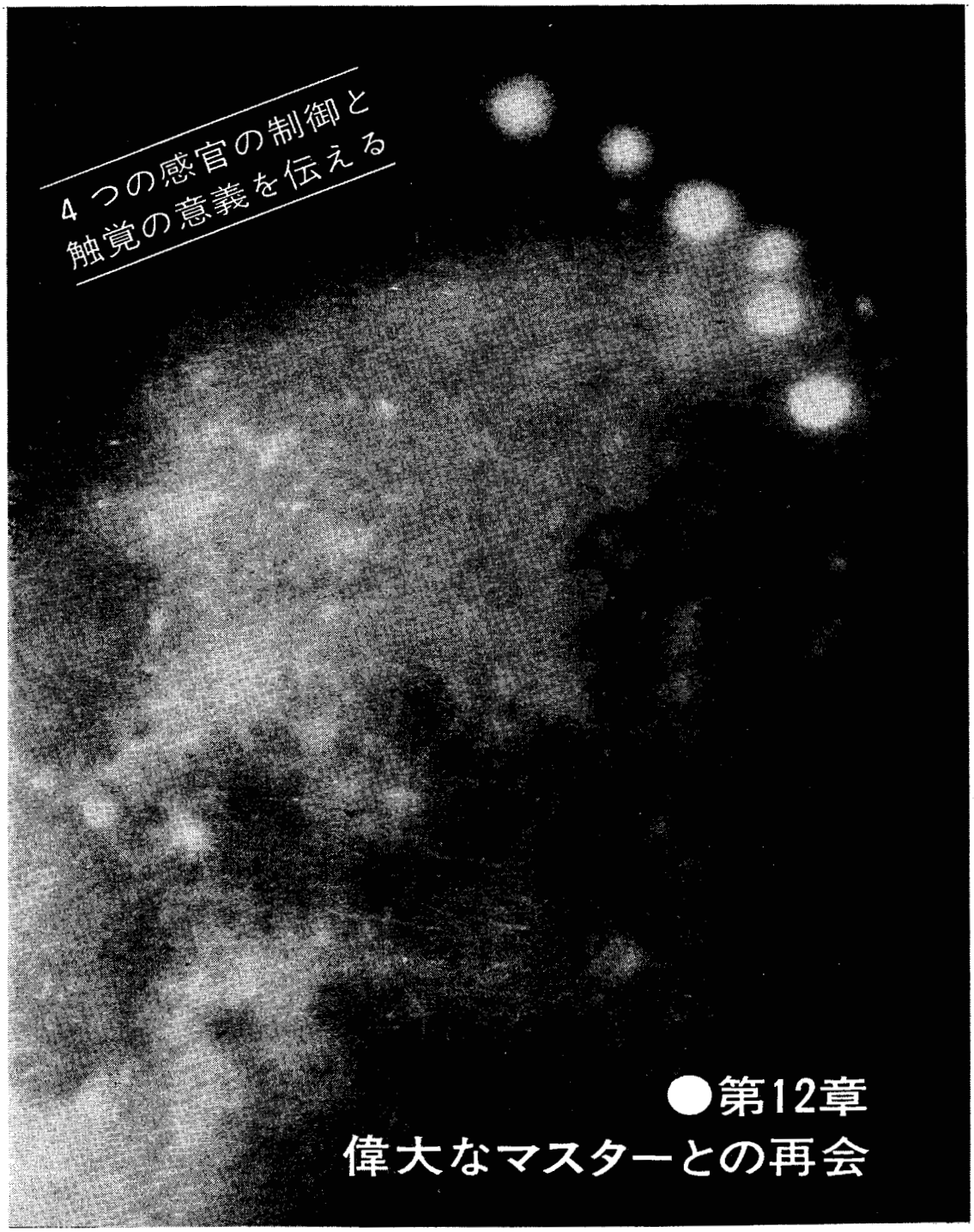
そうだとすれば〝生まれ変わり〟はどこで具体化するでしょう？　これには恩恵の法則があって、人間は十五、六回の（生まれ変わりの）チャンスが与えられるのですが、もしその間にゴールに向かっての進歩がなければ、諸元素は元の位置に返って他の物体によって用いられます。そうなると完全な記憶の喪失が起こります。記憶を持たない人間は全くのゼロに等しい存在です。永遠の生命を得るとは宇宙的な記憶を持つことです。これまでに述べた〝絶滅〟とは本人の正体を忘れてしまうか、または記憶を失ってしまうことにはほかなりません。

改訳―― INSIDE THE SPACE SHIPS

空飛ぶ円盤同乗記

（9）

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎 訳



●この写真はジョージ・アダムスキーが1950年5月29日に撮影したもの。月と地球との空間を円盤の編隊が飛ぶのをキャッチした。

レストランでの会談後まもなく、また
も印象に従って私はロサンジェルスへの
旅に出た。その町へのドライブの間中ず
っと、子供の頃にクリスマス直前によく
体験したおぼえのある、興奮に似た一種
の楽しい期待に満たされていた。
時間が経過するにつれて、他の惑星の
友人たちのテレパシーによる呼びかけが
ますますはっきり感じられる。たとえ
ば、今度の会見は地上のレストランに制
限されずに、ふたたび彼らの宇宙船の一
つへ私をつれて行くらしいことがわかっ
てきた。
この楽しい気分につつまれながら、旅
行の最初のあたりでドライブ中に通りす
ぎた山々の見なれた美しさは、更に荘厳
にさえなったように思われた。そして自
然の状態の黄金色、または耕作された輝
く緑色で覆われた峡谷は、私たちのこの
地球に対する愛情を全身に起こさせたの
である。たしかに、もし人類が新しい眼
でそれを見ることさえ知ったならば、苦
痛や闘争の余地はあり得ないだろう。
このドライブで時間は更に急速にすぎ
た。私は例のホテルへ入るとすぐに自分
の部屋へ行き、それからロビーへ引き返
した。
机の上方にある時計は午後五時を少し
すぎたばかりの時刻を示しており、たし
かに私は空腹ではなかったが、今、小さ
なレストランへ何かを食べに行って、そ
れから引き返して友人たちを待つほうが
よいと感じた。そこでそのようにして、
六時近くになって再度ホテルへ入ろうと
したときにラミューが私の方へ近寄って
来た。
私は喜んで相手を迎え、長く待ったの
かと尋ねた。
「いいえ、全然」と彼は言って「いつあ
なたに会えるかはわかっていました！」
と言う。
ポンティアックを角の道路わきに駐車
させてあった。乗り込んでから私はファ
ーコンのことを尋ねてみた。
「彼は今度は来られないのです」とラミ
ューが言って「それで、あなたにお会い
できないのが残念だと伝えてくれという
ことでした」
ロサンジェルスから遠ざかって行く長
いドライブ中ずっと、持続する幸福と期
待の気分が私の心中に残っていた。時折
少し言葉を交すだけで、対話はほとんど
ない。
やがて我々は主ハイウェーからはずれ
て、約三十分間、狭い道路をがたがたと
進んだ。円盤の輝きを見つけようと暗闇
の中を探していると、ついにかすかな輝
きを遠方に見た。輪郭がはっきりするに
つれて、土星の円盤かもしくはそれに似
た円盤にちがいないということが、大き
さからわかってきた。
やはりそのとおりで、ズールが我々を
迎えに出ていた。
上空に停止している母船までの上昇は
急速に行なわれた。「これは……？」と
私が言い始めると、ズールが微笑してう
なずいた。「あなたがこの前に乗った土星
の母船かとおっしゃるのでしょう？——
そうです」
着船の手順は前回の訪問のときと全く
同様に完了した。大休憩室の方へ私を案
内しながらズールはちょっと立ち止まっ
て言った。
「今夜あなたをつれて来るようにと言っ
たのはマスター自身です。この訪問は全
く彼があなたに話したいからなのです」
中へ入って私はこの室内の華麗さとそ
こに満ちている調和した雰囲気にあらた
めて感動した。この前私が会った人は全
部いたので、みな知っているが、それ以
外に二人の美しい婦人が加わっていた。
二人とも双生児かと思われるほどよく似
ている。紹介される前に、これは土星の
婦人だなと私は思った。二人のブラウス
の右袖の肩の近くに、前回の訪問のとき
土星人の男たちのシャツについていたの
と同じ記章があったからだ。
友人たちが歓迎の辞を述べてから、私
はこの未知の美しい人たちと挨拶を交し
た。二人の容姿と衣服は他の婦人連と異
なっている。二人とも私のすぐそばに立
ち続けていたので詳細に観察する機会が
あった。両婦人の濃い黒褐色の髪と眼、
巻き上がった濃いまつ毛、驚嘆にあたい
する純白の肌、頬を染めた薔薇色の輝き
と豊かな真紅の唇——。二人の態度は他
の婦人よりもずっと快活そうに見えたが
これは土星人であるということに関係は
なく、むしろ本人たちの性格の特徴なの
だと思う。
共に淡青色のブラウスを着ているが、
長いだぶだぶの袖は手首のところで絞っ
てある。このブラウスはどちらかといえ
ば短いジャケツに似ており、首の部分は
幅の狭いロール・カラーで仕上げてあっ
た。スカートもブラウスと同じ色で、同
じ生地で作ってある。生地の織目は非常
にこまかく見えたが、その織り方は私が
全く見たことのないものであった。だぶ
だぶのスカートには幅の広い腰ベルトが
ついていて、他の婦人たちの服と同じよ
うに足首までの長さがある。小さな足に
淡い黄褐色のサンダルをはいていた。
マスターが見当たらないので、全員が
立ったままでいるのは彼が入って来るの
を待っているのだろうと私は推測した。
ラミューが私に話しかける。「今夜は
米空軍の活動が激しいので、本船は今上
昇中です。たぶん地球から約二万七千メ
ートルの位置に滞空するでしょう」
いうまでもなく私は動揺を全然感じな
かったし、それまでにも感じてはいなか
った。
このときマスターが入って来たので、
全員は彼の方へ向き直った。
彼の眼が私の眼と会ったとき彼は微笑
し、低い肘かけ椅子でかこまれたテーブ
ルのところまで歩み寄った。この椅子は
外見が少々くすんだ絹のように見える魅
惑的な材質のもので覆われている。
ラミューが私を導くと、マスターが彼
の右側にすわるようにと指示した。例の
土星の婦人の一人が私の横にすわり、他
の人たちもそれぞれの席についているあ
いだに、私は記章の意味を彼女に説明し
てくれないかと尋ねる機会をつかんだ。
すると彼女は私がその右肩の記章を調べ
ることができるように親切に体をねじ曲
げてから言った。「これは土星がこの太
陽系の〝法廷〟であることをあらわして

Reda

いるのですわ」

彼女の言う〝法廷〟という意味が私にはよくわからなかったが、相手はそれ以上説明しなかった。

そのデザインは輪でかこまれた一個の天体でできており（私たちの望遠鏡で見える輪のついた惑星とほぼ同型である）天体の中には釣合のとれた天秤の図があった。

お礼の言葉を述べて私は椅子に体をもどしてから、これほどにすわり心地のよい椅子は他にないだろうと思った。地球のエアー・クッションでさえもこの椅子ほど快適ではない。

マスターが語り始めた。

「友よ、今夜あなたの聞く話が、たとえ以前のくり返しのように思えても、それは私の話す事柄があなたの理解にとって重要であるからです。たぶんもう少しくわしく説明すれば、あなたがそれを記憶するのに役立つでしょう」

彼がそう言うのを聞いて私は嬉しくなった。なぜなら私に約束されていたテレパシーによる援助があったにしても、その全部を記憶できないのではないかと心配していたからだ。

マスターは言った。

「地球人がおかしている大きな誤りは、絶対に分割してはならない多くの部分を分割する習慣にあります。あなたがたは形式や教訓などに沢山の差別を設け、多数の人は好き嫌いをはっきりさせていますが、これらすべては地球の混乱状態を増大させるのに役立っているだけです。

他の世界の私たちはこのような差別をしないで、万物の相互関係と相互依存を認めています。あなたがたの面前にある障壁に、創造主に関する私たちの想念の力と輝きがそそがれているのを、あなたが深く感じてきたことは私にわかっています。このイメージを常に私たちの眼前で映像化させ続け、心の中に記憶されることによって、私たちは創造主の中に万物が存在することを決して忘れないのです。

創造主こそは人間に対する、いわゆる〝生命〟の贈り主です。また創造主は私たちを通じて私たちの創造物に対する生命の贈り主でもあり、何を創造するべきかを教えてくれる教師でもあるのです。無機物や元素類の化合法を知っているのは創造主であり、それは人間ばかりでなく宇宙をも生かしていますし、それらが（無機物や元素類が）一つのフォーム（形ある物）の体験を通じてより高次なフォームに適合するように高められるにつれて創造主は更に多くの事をやっているのです。金星や、その他さまざまの程度に進化している惑星群にいる私たちは、無機物や元素などを、不変の新しさをもつ、永遠に活動する創造主の表現のエッセンスとして認めています。だから地球人が知っているような単調さは決してあり得ないのです。

したがって、全宇宙の聖なる創造主の創造物が私たちによって崇拝されるように、いろいろと異なる貢献の分野において元素類を支配する人間の創造物も、同様に崇拝され讃えられるのです。かわって元素類も自身が更に高次な貢献の基準にまで高められるようにと、日々よりよき貢献――決してやむことのない貢献をしたがるようになります。その奉仕は永遠であるからです。

これをもっとはっきり理解できるように例をあげましょう。地球の無機物のなかに見出される鉄のかたまりは、ある特殊な分野で人間に役立ちます。ところが、この鉄にいわゆる〝電気〟の力を与えると、鉄はそれまでの貢献から〝磁気を帯びた〟といわれる別なタイプの役立つ物に変化します。したがってそれは以前には持たなかった吸引力を与えられたことになります。これは元素または無機物がより以上に役立つために進化したことを意味します。最初は単なる無機物の鉄でした。次に元の状態ではできなかった吸引という高次な貢献の状態に達しました。このようにして次々とこの鉄はより以上に高度な役立つ状態に進化することができて、その創造主に報いるのです。

こうしてあなたは人間に貢献する無機物や他の元素類に関して私が話す意味がわかるでしょう。こうすることによってそれら自体には創造主に対する貢献を通じてある理解力が与えられます。この法則は地球では変異の法則または進化の法則として知られていると思います。

あなたや私もそうですが、人体は元素類や無機物で構成されています。あなたの体を構成しているこれらの元素類や無機物はそれら自身に刻まれた印象類に従うということが、あなたにも立証できます。というのは、もし印象類が喜ばしい性質のものならば、〝人間〟と呼ばれる生物も喜ばしくなるからです。しかし怒った状態にあれば、肉体もそのように表現します。これで肉体内の無機物や元素類は絶えず創造主に貢献していることがわかります。

あなたがた地球人は共同で働くよりもむしろ互いに敵対し合う共同動作を起こすことによって、絶えず不幸を招いています。あなたがたは源を創造主に発しながら他のものになりさがってしまいました。自然の状態にあるかわりに自分に対して多くの誤った概念を加えています。ちょうど高貴な美しさをもつ美人が、多くのつまらない装身具を身につけて、結局その効果を高めるだけで自分の美しさをだめにするのと同じです。

あなたがたは真の生命または英知を伴わないものを加えることによって、これと同じことをやっているのです。人間の実体の中にある先天的なものについて話してみましょう。金星の私たちはそれに従って生活していますが、地球ではやっていません。ただしこの原理は他の惑星ばかりでなく地球でも応用できるものです。

あなたがたは人間が五つの感覚から成り立っていると主張し、更に第六感、第七感などを加えています。真に存在する感覚を理解し発達させるかわりに、これらの独断的に考えられた感覚を発達させようとしています。透視力、透聴力、テレパシー、超能力などの力が存在することを明言するのに、一語で全部を表現できるものを少なくとも四つにそれぞれ分類

していています。その結果、人間の真の本体が混同され、失われるようになっています。

これをもう少しはっきり説明しましょう。まず第一に人間はあなたがたが自然と呼んでいる無機物と元素類による産物です。第二は、人体という知的表現として聖なる創造主の産物です。人体の無機物や元素から成る部分は四つの径路すなわち感覚を与えられており、その感覚を通じてその部分はいわゆる物理現象としてあらわれているのです。英知または神性は、あなたがたが物質的と言っている肉体全体のあらゆる細胞を通じてあらわれています。

私が今述べた四つの感覚とは、視覚、聴覚、味覚、嗅覚です。地球のあなたがたが〝触覚〟と言っている感覚を私があげなかったことを考えてごらんなさい。というのは、触覚こそは他のすべての感覚にまさる〝英知〟であるからです。

このように説明してみましょう。いかなる世界でもあなたがたのような人体を作ることはできないし、それを生かすこともできません。これは宇宙の創造主によってのみ可能です。そこであなたがたは、一つの肉体の内部で一つの肉体の形成が行なわれるとき、母になる人は別な肉体の完全な組み立てについて何をなすべきかを知らないということを認識する必要があるのです。それでも胎児は完全な表現にむかって成長し、やがて、いわゆる物質の世界に生まれてきます。

生まれるとき、この幼児は眼、耳、口や鼻を持っています。眼は初めてものを見るし、耳は初めて音を聴き、鼻は初めて嗅ぎ、口は初めて味わう。これらは肉体の一部分として創造されたのです。肉体が初めて物質の世界を目撃するのと同様に、これら四種の表現径路も初めて物質界を見ます。肉体に属するからです。しかしこの幼児の母親は幼児の肉体がどのようにして作られたかを知りません。

しかし、私が各種の感覚から除外した〝触覚〟は知っています。なぜなら、それはこういうわけなのです。赤ん坊がまだ母の体内で成長しつつあるあいだに、もし母親の体に圧迫が加えられると、内部の胎児もその圧迫に気づきます。この場合の両者の分離状態を考えてごらんなさい。というのは、生まれようとする胎児が母体内で変化するための準備ができたとき、母親はこの行為を制御もしなければ指導もしません。この場合、この変化しようという行為（出産）が、感覚を二つの異なる反応――母親と子供の反応――に分離してしまうのです。このことは、感覚の分野において両者の感覚が互いに独立して働いていることを立証します。またこの〝触覚〟または〝感覚〟は英知の分野でも働いており、何をしたらよいか、いつやればよいかを知っていることも立証します。それは〝知る者〟であるらしいのです。

私たちが分析の目的でこれを考慮に入れるとき、触覚は基本的なもの、すなわち実際には肉体の魂――全包容的な英知の一部として認められるのです。なぜならそれは一感覚であり、しかもご存知のように感覚は警戒の状態であって、これは私たちの言う意識的意識なのです。

さて、この意識が〝人間〟として知られる無機物とチリの肉体を離れるとき、眼、耳、鼻、口はもう機能を果たしません。肉体が無意識になると触感のようなものを起こさないからです。言いかえれば、人体を叩くことはできますが、人体は感覚と呼ばれる知覚作用または触れられるという感じを起こさないでしょう。

これに反して、もし人が眼を失い、聴覚、味覚、嗅覚を失っても、意識である触覚は残ります。それで本人は多少とも生きて人間らしく動くことができます。そして肉体が何かで打たれると、それは前述の場合とは異なって、触感または苦痛を感じます。

これで次の事実が容易に理解できるでしょう。すなわち人間と呼ばれる肉体の真の英知は、これまで非常に誤って用いられ、見当違いされていたものなのですが、実は触感として知られている感覚が真の英知であり、肉体の魂または生命なのです。〝人体〟は――万物も同様ですが――その無機物や元素類が〝四種〟の主要な肉体的表現径路を通じて役立つように構成されていますが、一方、五番目の〝触覚〟は宇宙的なもので、これが他の四つに対して知覚力を与えます。したがって一度この触覚が離れると、他の四つは知覚力または機能を失うのです。

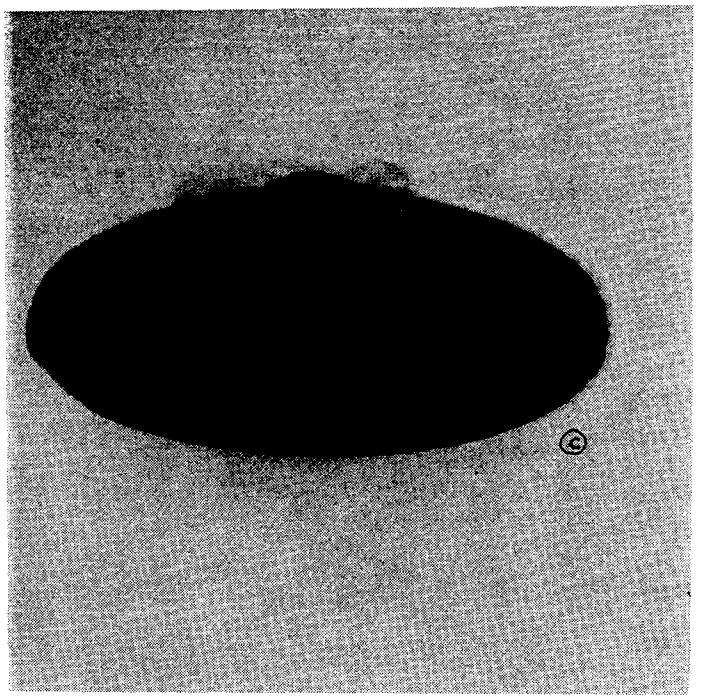
人間がこの事実を認めるとき、仮相の背後にある自己の実体を見出して、これがなされるならば長く住んでいた狭い牢獄は互解し、宇宙の住人になるのです。そのままで人間は、いかなる物にせよ自分の住む惑星をも含めて万物の中に働く法則を発見し、そのときこそ人間は自分自身を〝知る〟のです！　そうすることによって人間は万物を知ります。また、それまでは決して知らなかった〝大宇宙の英知〟である創造主をも知ることになります。

無機物の人間が創造主と一致した状態にまで高まり、創造主とその子が一体化するのは、この認識または理解によるのです。ひとたび地球人がこれを学び、悟って、心で知るばかりでなく、私たちがやっているようにそれを生かすならば、彼らは他の惑星で私たちが持っているのと同じような生活の喜びを持つようになるでしょう。

友よ、もちろんあなたはこの法則を知っていますし、長いあいだそれを教えるばかりでなく実行しようと努力してきました。それはあなたにとって新奇なものでもなければ、あなたの独創的な教えでもありません。彼らが創造主の子としてその相続権を楽しもうとするならば、万人が知らねばならない宇宙の法則です。

あなたは地球の同胞の心に、自己を理解することが第一の要件だということを極力印象づける必要があります。そこでまず疑問が起こります。「自分とはだれなのか？　今自分ははずれてしまったけれども元の一体性へ帰るためには、いかなる径路を通じてそれをあらわせるのか」

人間にはつけ加えるべき物は何もないことを同胞に気づかせなさい。人間はすでに自分が所有しているものをあらわしさえすればよいのです。しかし所有して



ジョージ・アダムスキーが6インチ反射望遠鏡を使用して撮影した円盤。ドームの周囲に水蒸気がかたまって小さな雲になっている。これは極を逆転させるときによく起こる現象だという。円形のフチに欠けた部分があるのはカリフォルニアの熱気流と円盤のフォースフィールドが合成してひき起こしたものである。

いるものが何であるかを理解しなければなりません。そしてこの理解を〝実行〟に移す必要があります。重要なのは実行であるからです。ひとたびこれが達成されると、地球人の苦脳はすぐに消えるでしょう。というのは、そのとき視覚、聴覚、味覚、嗅覚の四つの感覚器官を作り上げるのに用いられているこれらの元素類は更に向上して、それにより各感覚器官がもっと鋭敏な器官になるのです。しかもそれら各器官はいわゆる物質世界ばかりでなく、宇宙的な貢献をするでしょう。

地球人が認識しなければならぬもう一つの事実は、〝宇宙〟はその外側にでなく内側に物質を含んでいるということです。なぜなら、宇宙の内部で起こるあらゆる物事も、創造主の内側で起こるのであって、外側ではないからです。だから私たちは自分の世界と同様にあなたがたの世界や生命に　関係があるのです。私たちはみな同じ〝至上なる英知（創造主）〟の国にいるからです。

私たちは長い時代を通じてこのことを学び、実行しています。この理解があるために私たちは地球人がやっているように、危害を加えようという動機で他人を傷つけることはできません。自分たちがゆがめたものは何にせよ、万物は一家族なので、それと共に生きなければならないことを私たちは知っているからです。

ひとたび肉体人間の心がこの程度の理解にまで達するならば、醜悪なものや不快なものを見ることはなく、万物が美と高揚の聖域にむかって進んでいるのを見ることになります。

地球人がこの法則を考えるならば、万物が低次な状態から高次な状態へ働いている様子を見て、それを理解するでしょう。これは宇宙的な目的で働いているのです。高次から低次へ働くのではありません。しかしその力は、低次なものが高次なものに高まる力を持つことができるように、高次から低次に降りて現われることもあります。この法則を知っている私たちの諸惑星の住民は、自分の発達のためにそれを応用していますし、その応用によって永遠の生命と万物の役割を認識する段階にまで成長しているのです」

このとき人口過剰という考えが私の心の中にひらめいた。これは地球の各国がしばしば関心を持つ話題であるからだ。間髪を入れず、この偉大な知恵を持つ人は私の考えに答えた。

「そんなことはありません、友よ。私たちは人口過剰ではないし、こんな状態は地球人をおびやかしているようには私たちをおびやかしません。地球人のように無考えに無計画に人間をふやさないからです。自然のバランスの法則があって私たちはそれによって生きているのです。しかも一つの惑星で多くの知識を得た人たちは、もし望むなら別な惑星での生まれ変わりを求めることもできます。この目的に対して彼らは二つの選択権を持っています。つまり出生という径路を通じてこの変化をなしとげるか、または同じ肉体を持ったまま宇宙船で直接に運ばれるか、ということです。これは地球でさえも多く起こっています。ぼう大な数の人間が生まれ変わりによって地球から別な惑星へ〝進級〟しているのです。その他に少数ではありますが、あなたがたの聖書に述べてあるように宇宙船で直接運ばれている人もあります。

〝死〟は地球と同様に他の惑星群にもありますが、私たちはそれを死とは言わないし、また地球人のように死者を悲しむこともしません。私たちはこの離別が一つの状態または場所から別な状態または場所への変化を意味するにすぎないことを知っています。

私たちはある場所から別な場所へ行くときに自分の家を持って行くことはできません。これと同様に、死んだときもある世界から別な世界へ、家である肉体を持って行くこともできません。地球人の肉体を構成する材料は地球のものですから、その世界を維持するためにそこへ残さねばなりません。一方、地球から別な惑星へ移動する場合は、その世界がそこに存在する必要物や状態に応じて家を建てるための材料を提供してくれます。

宇宙に関する地球人の概念は実に貧弱なものです。彼らは無限の宇宙を想像できないのに、永遠という言葉を使用します。人間自身の定義によれば、永遠とは始めも終わりもないことを意味します。そうすると宇宙はどんなに広大なのでしょうか？　永遠と同様に広大なのです。

したがって人間は一時的な現われではなく、〝永遠〟の具体化なのです。そしてこの真理を体得している私たちは不変の現在の中に生きています。真理そのもの

は常に現在であるからです。

金星の私たちは地球人と同様に着飾っていますし、似たような工合に多くの物事を行ないます。私たちの肉体と地球人の肉体や衣服に大差はありません。非常に違うのは、〝自分とは何か〟の理解です。

私たちは生命は全包容的であり、私たちがその生命で「ある」ことを知っていますから、他人を傷つければ必ず自分をも傷つけることになるということもわかっています。そして生命体が永遠に生命体であるためには、その存在の基本的な状態を続けねばなりませんし、これを表現するためには常に新しくある必要があるのです。

だから、私が述べたように、私たちは退屈というものを決して経験しません。過ぎゆく一瞬一瞬が歓喜の瞬間です。どんな仕事をやらねばならぬということはない。もし、いわゆる労働をする必要が起こるならば、私たちは全身に喜びと愛をもってそれを行ないます。私たちの惑星では地球と全く同様に、日常の仕事の割当てがあるのですが、あらゆる人間はみずから行なう奉仕のために等しく尊敬されます。欠点を非難する人はいません。たとえいわゆる召使いのような仕事であろうとなかろうと行なわれる奉仕に差別をしません。あらゆる奉仕は等しく認められるのです。

地球人はこの法則を与えられてきました。それを知っていて、かつて他の惑星で実行した人々によって、地球へもたらされたのです。それはソロモンの宮殿の建設の部分で述べられています。一日の終わりに平等に一ペニーを支払ったブドー園の労働者の雇用は、救世主イエスがくわしく語ったように、奉仕に対する等しい名誉の承認であったのです」

偉大なマスターがここで話をやめて、その手が軽く眉の上方を動いたとき、私は全然身動きもしないで熱心に聞いていたことに気づいた。少し体の向きを変えてから私は相手がふたたび話し始めるのを待った。

「あらゆる惑星上の大気はわずかな相違があるけれども、地球の科学者が現在信じていることとは違って、地球人は不安なしに宇宙のどこへでも行けるはずです。実際、ひとたび地球人が自分自身を理解して人体の偉大な適応性に気づけば、これは彼らの自然の天性になるでしょう」

ふたたび彼は話をやめて、あたかも瞑想にふけるかのように軽く頭を下げたがまもなく語り続けた。

私たちは人間の集まりの中にすわれば必ず祝福の念を起こすほどに意識的な知覚力が発達しています。眼前に人間が存在していることが一つの祝福であるからです。私たちは相手を単に人間として見ないで、人間として知られるフォームを通じて生きた状態にある創造主の英知として見るのです。私たちのこの理解は、人間以外の万物に対しても同様です。

私たちは最小のものから最大のものに至る万物の成長を通じて、創造主の英知がみずからを現わしているのを見ます。いかなる物でもそれを流れる、または支える生命なしには、その物ではあり得ないことを私たちは学んでいます。私たちが知っている生命とは〝創造主〟の至上なる英知なのです。

睡眠中でさえもこの創造主の存在を感じていないことは一瞬間といえどもありません。

これが人間の真の目的なのです――そのためにこそ人間が創造されたのです。なぜなら、他の万物は各自の特殊な貢献の分野で自己を現わしていますが、人間こそは創造主の英知という最高の状態を表現することが可能な、無機物と元素類の進化したフォームであるからです。

私たちは互いに他人を警戒しませんし他人の所有物を欲しがったりしません。みんなが各惑星の財産の平等な関係者なのです」

他の惑星から来たこの偉大な教師の言うことはすべて明瞭に理解したが、一つの疑問が私の心に浮かんできた。彼らは――もし殺すとすれば――食物を求めての〝殺し〟をどのように見ているのだろうかと思ってみた。また果物や野菜の消費さえもどのように考えているのだろうか？　というのは、これらも自分自身の表現の形を持って生きているからだ。すると例によって私は何も言わないのに答が返ってきた。

「これには別に不合理なものはありません、友よ。あなたがチサの葉を食べるとそれはあなたの一部分になりますね？　その結果、そのときからチサの葉はあなたと一緒に物事を体験し始めるのです。したがって、あなたが実際に行なった事は、一つの物をあなた自身の形に変形したことです。もしあなたが食べなければ、そのチサの葉は成熟し、種を生じてふたたび同種族を増加させますが、それだけの体験で終わるかもしれません。しかしあなたに役立つことによって、あなたを通じてより高い貢献をするように高められることになります。

動機というものもこの原理に関係してきます。もしあなたの動機が破壊のためや傷つけたり搾取したりすることなら、それは間違っていますが、その動機が、他の物をあなたの標準にまで高めることによって、その物に対してなし得る奉仕を含んでいるならば、それは正しいのです。あなたは実際には一無機物を一つの状態から別な状態に変形させて、それがなおも大きな奉仕になるようにしているわけです。そうすることによって、あなたは生長または発達の法則や、地球で〝進化〟と呼ばれる時間の法則に従って行為していることになります。これがあなたの創造主の法則です。

地球人はフォーム（形あるもの）を重視し――崩壊するものなのですが――そのフォームが存在するすべてだと考え始めたために、進化の法則に気づいていません。しかしフォームはそれを通じて生命または英知が現われる径路にすぎないのです。〝全包容的英知〟は一枚のチサの葉を通じて表現できませんから、チサの葉は漸進的な段階によって、より高い物に変形される必要があり、その物を通じてより高次な貢献を現わせるのです。そのようにして葉は報われるのです。

この法則が、他の惑星群や他の太陽系の住民によって認められ応用されてきたように、地球人によって完全に認められ〝実行〟されるならば、地球の大気の状態は浄化されるでしょう。そのとき万物はそれ自体から喜びの放射線を放射し、それが人類の住む大気圏内に浸透するからです。

私たちがどんな方法によって現在生きている状態にまで進歩したかをあなたは知りたがっていましたが、今お話ししたことが私たちの生きるための基本的な法則です。地球人もその法則を受け入れて実行すれば進歩できるのです。

地球人が、自分は肉体すなわち家屋ではなく、家屋の〝居住者〟にすぎないことを知るならば、彼らはどこでも望みの場所へ家屋を建設できます。彼らも元素に支配されるかわりに元素の支配者になるからです。

地球人はある程度まである元素類を支配する知識を得たのに、一方その知識の誤用がひろがって、地球の多くの文明が過去に破壊されてきたように、元素類は人間を破壊するものに変化しつつあります。

これが今日私たちの見る地球人の段階です。私たちは機会がありさえすればどこでも援助を試み続けますが、地球人のようにほとんど発達していない人々に、多数でもって援助の手を伸ばすことは困難です」

マスターは一瞬沈黙してから言った。

「あなたが私たちの宇宙船に案内されたのは、これが最初でもなければ終わりでもありません。他の世界の私たちは、あなたが地球人に伝えるための真理を、時々あなたにもたらすつもりでいることを確信して下さい。私たちはいわゆる精神的宗教的な真理ばかりでなく――もっとも、そんなふうに区別しないのですが――他の世界の物質的生活についても語りましょう。〝ただ一つ〟の生命が存在するだけです。その生命は全包容的です。地球人は、二つの生命に仕えることはできず一つの生命だけに役立ち得るのだということを悟るまでは、絶えず互いに反目し合うでしょう。これは、地球の生活が他の諸惑星の生活に匹敵するようになるまでに、全地球人が〝知らねばならない〟一大真理なのです。

では、友よ、あなたが地球へ帰る時間です。あなたが学んだ事柄は地球人にとって非常に価値のあるものです。話したり書いたりして彼らに告げなさい。今までに聞いたことを忘れはしないかと心配する必要はありません。あなたが話したり書いたりするときは、考えなくても絶えず記憶の流れがあなたに来ますから」

他の世界から来たこの美しい宇宙船の内部は静寂である。この夜のレッスンは理解と意義において深いものがあった。ともかくも、全員がこの同じ教えを、おそらく生活を通じて何度も聞いていたことは私にわかっていた。しかし今夜のレッスンは彼らが賛美したもののように思われた。その話を聞いた各聞き手の内部に新しいものが開けて、各自が自分の理解を更に大きくしたかのようだ。

ふたたび私は地球へ帰らないで、この慈悲深い友人たちと共にとどまって、一緒に他の惑星へ行くことを願ったのである。しかし賢者は言った。

「友よ、地球にはなすべき仕事が沢山あります。人類は餓えているので、食べさせなければならない。多くの時代を通じて地球にひろがっている無知という暗黒の中で人類が滅亡しないように、あなたは帰ってこの心の糧を彼らにわかち与えなさい」

* * *

地球への帰途、私はなおもマスターの言葉を聞いているような気がした。それはラミュー、ズール、私によって保たれている沈黙の中で、私の意識に対してやさしく説きながら落ちてくる言葉のようである。

ロサンジェルスへ帰るドライブ中も同様だった。私は地上へ降りた円盤のパイロットがいとま乞いをしたのをぼんやり記憶しているが、言葉は交されなかったと思う。

ラミューがホテルの入口の所で車をとめて、私はゆっくりと路上へ降りた。そのとき何か言いたいことがあるような気がして振り向いた。私が口に出す前にその内容をたぶんラミューは知っていたのだろうが、彼は眼に理解の色を示し、まじめな微笑を浮かべながら、静かに待った。

すると急に浮かんできたので言った。

「今回は私が受けたテレパシーによるメッセージをたいそう強く感じました。ロサンジェルスへむかって出発したとき、何が起ころうとしているかを私は確かに知っているような気がしたのです。今回はマスターご自身が私にテレパシーを送られたのでしょうか？」

「そうです」とラミューが言った。「あの方が送ったのです。あなたの受信能力は発達していますが、以前と違うのはマスターが送信したからです」

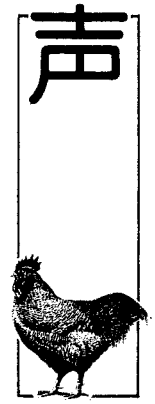
「しかし――私が感じたあの精神の高揚は」と表現につまずきながら私は言葉を続けた。「マスターから私に送られたにちがいないと思うのです」

「ええ、そうです。あの方はこの太陽系内でなおも活動している最も進化した人の一人です。その面前にいるだけでも愛と理解力が高まるのです。私たちは全く幸せです」

一同は別れを告げて、私はホテルへ入った。こうした会見のあとはいつもそうなのだが、私は眠たくない。今度は時刻を見ようとさえしない。下方でなく上方を見ながら窓辺に長く立っていたのをおぼえている。以前に体験したあの奇妙な分離感が内部に起こったが、今度だけは悲しみの感情はない。私は自分の考えを大声で口に出したような気がする。

「一つだ。すべてが一つなのだ。どこもかしこも！ 分離はない！」

声



いつも忙しさに追われる中でのGAPの諸活動に対する先生の忍耐力には本当に感心しています。私がア氏の宇宙哲学を実行し始めてからの体験等について、また考えている事について少し話します。

最初のうちは何が何だかさっぱりわからず、とにかくくり返し読み、いままでやっていたでたらめな生活態度をア氏の哲学と少しずつ置き変えていくうちに、自分が今度は果たしてどんな態度を取ったらいいのかわからなくなってきました。焦ったり、また途中で放り出したくなったり絶間ない混乱が続きましたが、その度に忍耐という言葉が現われ、結局これ以外の方法がない事がわかり始めました。そしてそれらの混乱が少しずつ減少してくると、今まで本を読んでいてどうしてもわからなかった事や日常生活の中での疑問に急速に答が得られるようになって、次から次へと疑問を発しましたが、それも長くは続かず、ある日急に本を読むのもそれらを考える気にもならなくなってまた失望しました。いったい何故かと思い色々考え、やはり私という人間は何をやっても駄目なのだろうか等と考えたりしていましたが、二、三カ月後に答を見付けました。心は消化できる以上に食物を欲しがるという事でした。

現在わからない事や全く不可能事に思えることは依然として沢山あります。発した疑問の答が同時に得られることも二、三カ月、半年あるいは一年かかることもありますが、必ず答が得られることに私は確信を持っています。

去年の夏ちょっと面白いと思ったのは、ニューズレター55号の声欄にも載りましたが、室内に入ってくる蜂に向かって「蜂よここへ入って来ると殺されるぞ。早く出ていけ。いやそっちじゃない、今入って来た方だ」と思念すると四匹中三匹は今入って来た所から出て行き、一匹はどうしても駄目でした。私のは少々乱暴でしたが、とにかく、偶然でないことは確信しました。今年になって妹にニューズレターを見せ自分の体験を話すと、早速やってみたらしくその話をしてくれました。朝洗面所で顔を洗っていると目の前に嫌いなクモがいたそうで、その時私の話を思い出し、窓を少しあけて、窓のふちを通って外へ出て欲しいと思念した所、自分の意図どおり窓のふちを通って外へ出て行ったという事でした。

私は過去に多くの虫、小動物、鳥に至るまで沢山考えもせず、また楽しんで極く当り前の様に殺してきましたが、今は全てが私の仲間です。彼らについてまだまだ知らなければならない事が沢山あります。

今年三月一日に以前から欲しいと思っていたP・トンプキンス・C・バード著の「サボテンが喋った」を手に入れ興味深く読み、以前挿木した鉢植えの沈丁花を室内に持ち込み早速実験してみました。三月三日から毎日それにテレパシーを応用すると同時にステレオでクラシックを聞かせたのです。三月四日の日記には沈丁花に三つの蕾がついているけれど、そのうちの一つはほのかに匂いが感じられたとあります。庭には他に三本の沈丁花があり、そのうちの一本から挿木したものです。その三本共まだ蕾は硬く鼻を寄せても匂いません。三月八日に三つの蕾のうち二つが咲き始めたが、他の三本は一週間程してから咲き始めたのです。そして結局花も一週間程早めに終わり、新芽が出てきました。それを母に見せますと、「いったいどうしたの」と庭の三本の沈丁花と見くらべて不思議そうな顔していました。今さらに病気のサボテンとオジギ草の種を植え木鉢に植え沈丁花の時のようにしていますので結果が楽しみです。

様々の事が異なった経路で少しずつ答としてやって来ますが、中でもはっきりとしているものを二、三書きます。それはある日の夕方ラジオでニュースを聞いていると、踏切で乗用車と電車の事故があったということです。その途端その光景が目の前に現われて、ツートンカラーの電車と乗用車の前・後部を切り離し、そのうしろ少し離れた場所から見た感じで、二人の人間、右に白いエプロン姿の中年の女性、左側に若い青年の後姿を見ました。その後続けてニュースの詳細を聞いていますと、そのとおりでした。私の目が見ていたのは実際には室の隅に置いてあるステレオのスピーカーのあたりでした。

それからニューズレターの臨時号に十五・六回の転生について書いてあり、私は今現在何回目なのかと尋ねると、まわりにはなにも見えずに、十三（実際には13）という数字が始め小さく現われ、徐々に大きくなってそして消えました。これは単に空想の産物ではないと確信しています。

また今年四月十四日、つい二、三日前の事ですが、以前壊れてそのままになっていたカセットテープレコーダーの修理を思いつき、分解し、スピーカー、録音レバーを取り変え、組み立ての段階で二、三カ所そこが不完全であると指示されたのを何となく無視し、組み立て終わると始動しません。何故かと思い長い時間をかけて調べて見ますと、最初に指示された二、三の場所が原因でした。これらの事は小さな事ですが、無視した結果何倍もの時間と手間がかかったわけです。とても良い経験だったと思っています。

以前先生に質問の返辞を頂き、楽しい想念応用法と重要性について考えましたが、あまり良くわからずに今年一月の月例会でさらに質問を重ねたのですがピンときませんでした。ところが会も半ばを過ぎて自己紹介の時、緊張の面持で順番を待っていると、すぐ左横の人が面白いことを言って皆が笑い私も吹き出していました。すると今までの緊張が退散し心身共にリラックスでき、何なく自己紹介することができたのです。他の人にとって恐らくどうということはないでしょうが、その時私は先生の言われた楽しい想念の重要性について少なくても一部分理解できのです。

過去一年間を振り返ってみますと、極くわずかずつではありますけれど、今まで全く無関心であったものに目を向け、絶対不可能だった事柄に可能性を見い出し、種々の事柄を理解するにつれ楽しさも増してきつつあります。反面毎日やらねばならない事をおこたったり、小さな声の指示をついつい無視して良くない結果を招くことも多々あります。この地球でのレッスンをマスターするのには、とてつもない大きな決心と忍耐力、信念、勇気を必要とする事は確かです。背水の陣という言葉がありますが、私は過去にやってきたようにもう逃げ廻る事は出事ない状態です。しかしまた事実に直面する事にも大きな恐怖を感じています。これらの突破口を見つけるにはまだ少し時間がかかることと思います。私の状態を理解できない両親は早く何ばわりする始末ですが、両親の言う事も理解でき、ただもう少し待って欲しいと言うだけです。過去に焦りに乗じて友人が危険だからやめた方がいいと言うのを聞かずに催眠療法なるものを受け、かえって悪い結果を招いた経験があります。焦りも危険ですが、臆病になってもいます。

生涯を通しての大仕事ですが、やり抜く決心はあります。やらなければ自由にはなれませんし、当然真の生まれ変わりも楽しい物事もなく過去の墓場に逆戻りする事は目に見えています。

今身の廻りの物、事等を分析していますが、徐々に原因が現われ、見えるものもあります。もう一度私に間違ってやってきた事がないかじっくり思い出し、原因を究明してみるつもりです。この事は今これを書いている最中に来た印象です。何か見落としたか無視した事があるのかも知れませんから。

これからもずっとおつき合いするわけですが、どうか良く御指導をお願いします。何もかもが活動的な時節ですが、くれぐれもお体に気をつけて頑張って下さい。

千葉市　中里信彦

久保田先生、いつもありがとうございます。総会の帰り、私に変化が起きました。GAPもまた変化をしたのでしょう。極小型機の数は相当のものでしょう。ブラザーズは何でも知っておられます。「新たな決意に栄光あれ！」

静岡県　高梨和明

総会、そしてあのすばらしい会合に私を呼んでくださって、ほんとうにありがとうございました。おせじではありませんが、あの先生の講演はすごい迫力がありましたよ。あれだけ重要、かつ偉大な情報に接することができただけでも出席したかいがありました。

今、私はその時の講演テープを六回ほど聞き終わったところです。ここで感じたこと。文明の利器であるカセットコーダーとは何とすばらしいものなのでしょうか。あの感動を再び私の部屋で聞けるなんて！　一回聞いただけでは多くのことを忘れてしまう私のおつむの悪さも、ある程度カバーしてくれる。これを発明した人にただ感謝、感謝。

総会を聞いて感じたのですが、今までの先生の過去にくらべて、私は先生のようなすさまじいまでの経験

を体験しておりません。私は今の今まで親のスネやモモを食って生活してこられた幸運？な人種の一人であります。何も先生のすべてをまねなければいかんなどとは思いませんが、とにかく先生の過去に比べればなんとも迫力が無いし、味が無い。「時代がちがうよ、時代が……」と言ってしまえばそれまでなのですが、このような感じは現代学生の心の中にかなり深く内在していると思われます。それが一種の大人への反発にもなっているのではないでしょうか。

私の内の多くの習慣想念の中で、人に起こされなければいつになっても眠っている、ということがあるのですが、時計を見てびっくりして、自分自身に対してけっとばしてやりたくなる時など多々あります。とにかく私の心の中の99%はセンスマインドなのかと思うこともあります。そこで毎月必ずといっていい程、「さあ、今から想念観察をつけるぞ」とオーソンの写真の前で誓うのですが、手帳をつけ始めるやいなや、「そんな気持ちになったけなあ」とまことに三日も持ちません。そしてあとはただ後悔の念になやませられる。

しかし、そんなふうにやらんかったり、やったりする努力（？）が実って来たのか、私自身の想念傾向がわかり始めました。要するに、なまける→心配し、イライラする→後悔する→性欲だけ。これらが一日の想念のうちに何んと多いことか。だれか私の頭を力いっぱいぽかりとなぐってくれなどと思ったこともありました。

今生の自分は、前生からの結果とのこと、前生において私は何をやって来たのか、どんなことを経験したのか（どうもドイツにあこがれが強いのですが）。前生のうち一時代か二時代ぐらい知っておいても損はないと思うのですが。それにGAP内のある人たちとは他人とは思えないのです。先生、そっとおしえてくれませんか。以上の疑問をもし知っていたら。

深い洞察力の乏しい私にとってGAPは心のよりどころであります。私にとって大切な大切な泉です（表現力もとぼしいようだ）。とにかく一生大事にして行きたい気持ちがいっぱいなのです。

二年間私は先生に接することが出来ましたが、そのあいだにおいて、すばらしい人たちが何人かやめて行かれた時も、ふしぎだなあと思うことはあっても、先生に対する懐疑心が心に起こることはありませんでした。むしろ先生が純真な、かわいい人であるなあ（失礼）と思うこともありました。

人間がほんとうに馬鹿になって人を信じられるなんて、ほんとうにすばらしいことですね。信じられるというしあわせは何にもかえがたいものだと思います。先生の計画なさっている遠大な計画の協力者として一生を託す気持です。これからも宇宙哲学の師として、先輩として、導びいてくれませんか。私の力でよかったなら私自身の力を出しおしみするつもりは毛頭ありません。先生の感じた私についてのフィーリングが良いフィーリングであることを期待しつつ、首を長くして御返事、またはおしえを待っております。地球の黄金時代をGAPのみなさんといっしょにむかえられることを心のスクリーンに焼き付けて……。

東京　馬籠　務

GAPに入会させて頂きましてから初めてお便り差し上げます。

先日のGAP総会に招待下さいましてありがとうございました。各地から志を同じゅうする人達が先生を中心に一堂に会し、先生のその力強い情熱的な声音で語られる宇宙哲学講議を聞き、崇高なムードの中に身を置くことが出来ましたのは、将来、自己の発展の為にどれ程の勇気と力付けの良い刺激になったか知れません。

私は地方に離れて住んではいますが、心はいつもGAPと共に先生と共に有ると感じております。総会から早一週間も過ぎてしまいましたが、私の頭の中にはまだ先生の声や姿のイメージが強く印象に残り、想念観察における良き心の番人と成っていただいています。先日の総会やニューズレターでも、この想念観察の事をどんなに強調しても過ぎることは無い、それ程に重要で本源的かつ大変困難なものであり、やり逐げるには強靱な鉄の意志と信念が絶対不可欠で、これこそが宇宙生命の理解へのドアーを開くカギとなる物だと言うような事を言われましたが、私も想念観察を始めて三月程たちますが、次第にその重要さと難しさが解って来ました。

私は仕事の性格上、手帳に記録する事が出来ませんので、いつも注意深く内省的であろうと努め、心に浮かぶ想念をチェックし、分裂的な想念が起こった時はすぐそれを打ち消すよう努力しますが、なかなか思うにまかせません。特に怒りや恐怖などの強烈な感情は押さえようとしてもすぐには難しく、まだまだ未熟だと思い知らされます。それで先生に質問したいのですが、想念観察をする上で効果的な訓練法やコツのようなものが有るのでしょうか？　また分裂的な想念を排除するだけでなく、もっと積極的に、例えば総会で先生が言われた瞑想的な事などをしなければ宇宙的な波動に同調できないのでしょうか？

以上の事をよろしく御教示下さるようお願い致します。まだ私は宇宙哲学を頭の中で理解しただけに過ぎず、これから意識の世界へ第一歩を踏み出し始めようとしている段階ですが、私はどうしてもやり逐げなければなりません。現状の中にぬくぬくと留まっていては生きる意味がなく、たゆまなく進化する事が人間本来の目的であり使命だと思われるからです。

先生は言葉に酔うな、と言われました。確かに色々な分野で高尚なことを扱う場合、誰しもが陥りやすい状態であり気を付けなければいけない事と思います。私達は、この偉大な宇宙哲学の論理体系をただ頭の中で理解し論じ合うような、知識的な遊戯を楽しんでいてはならないと思います。実践の無い哲学では絵に書いたボタ餅と同じです。何よりも必要なものは、日々の生活での目立たないひたむきな努力の積み重ねであって、それが緩慢な速度ではあるけれども着実な進歩を生むものと信じます。それには大きな愛と強い情熱と堅固な意志を、それから創られた物全てに表れていると言う神の意志に対する謙虚な気持をいつも忘れずに持ち続ける事が大切だと思います。

地方に居住する為に先生やGAPの活動に直接お手伝い出来ないのを大変残念に思います。もし私のような者でも必要とする事がありましたら微力ではありますが何でも覚悟があります。

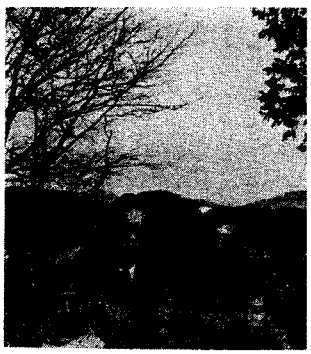
世の中の一人でも多くの人間に、私の回りにいる無知な人々に知らせる事が出来るように成るまで、私は世の中で宇宙の意識を発見し、それを表したいと思っております。遠く険しい旅が今まさに私に始まろうとしています。

静岡県　黒田保夫

宇宙研究会　昭和五〇年新春例会会催

我が研究会は昭和四十八年三月に静岡県中部の人々を中心にして発足し、東は富士、西は浜松の範囲の人からなっております。現在の会員は三十名程で、今回は多くの会員の中よりアダムスキー哲学に熱心な人々を数名集めて例会を開きました。また研究会と言っても決して固いものではなく、むしろサークル的な雰囲気の中で一人一人が同胞であるという強い仲間意識からなっております。

一月四日午前十時、国鉄藤枝駅に集合し、市内の金比羅山にて例会を開きました。山頂には神社があり二百七十度の大展望です。山の中腹には桜の木が数多く植えられ、左手遠方には富士ははっきりと顔を見せ、山の霊気は一同の調和と理解の感情を測り知れぬほどにたかめました。参加者は各市を代表するかのようにして、清水の伏見之男氏(写真後初右)、静岡の小沢康宏氏(後列左)、藤枝の豊福等氏（前列中央）と私・秋山(前列左)、島田の渥美秀樹氏（前列右）でした。た



だ浜松の水野正宏氏が急用で来られなかったのは甚だ残念でした。各人から活発な意見がいろいろと出された結果、これからの会の方針として次の三項目が提案されました。

1　円盤の動力及び原理の研究
　当初は小型の円盤模型を作り、浮上実験を行なう！
2　アダムスキー哲学の実践
　「生命の科学」の内容を日常生活に応用する。
　「空飛ぶ円盤同乗記」に出てくるような人々の想念に各人が近づくよう努力する。
3　アダムスキーの体験の立証　（以下十三頁へ）

先日、UFO目撃の件に関してお手紙をさし上げましたが、その後、異常な状態にまで事態が進展してまいりましたのでお知らせいたします。おとつい（十二月七日、土曜日）よりUFOを見たいと思い、一生懸命テレパシーで呼び続けていたのでありますが、昨日十二月八日、日曜日の午後七時三十五分にUFOが現われ、懐中電灯を振って合図したのですが、あっという間に南方に飛び去りました。この時、赤っぽい星のような光であり、最初に発見したのは前の手紙に書きましたところの梶君であります。梶君の話では、その時に現われたのは二度めで、その前に一度同じものが来たのを見たそうです。しかし、あまりにもあっけない出現でしたので、ぜひ戻って来てもっとはっきりと分かるように飛んでもらいたいと心の中で呼び続けていたところ、午後八時になり、三たび同じ方角（東方）にUFOが現われました。この時も、僕は部屋の中におり、梶君は表でバットを振っており、発見者は梶君でした。（このことには意味があると思います。なぜなら、僕は前日以来、今度UFOが現われても人には教えない方が良いかも知れないと思っていたので、その考えに対する宇宙人側の解答だったのかもしれません。これからは、教えてあげるつもりです）

この三度めにあらわれた時にはUFOは非常にゆっくりと飛行し、銀と赤に交互に点滅（回転かも知れません）し、そして上下に揺れながら、急にスッと前に動いたり速度をゆるめたりしながら飛行しておりました。この時のUFOの動きは目を疑うほどの非常なためらかさで、あれだけの金属のかたまりが空中であれほどなめらかに移動できるのを目の辺りに見て、UFOの持つエネルギーの強大さや、宇宙はUFO（逆重力宇宙船）にとってエネルギーの大海なのだということを痛感いたしました。この時も大声を出して呼んでみたり懐中電灯を点滅したり振り回したりして合図をしてみたのですが、南方でしばらく滞空（停止）した後、その場で消えました。戻って来てほしいと思い続けて、実際に戻って来て下さったのには、感激いたしました。

さて、昨日の話はそこまでで、必死にUFOを呼び続けた結果来てくれたのだと思いますが、今日（十二月九日、月曜日）も、またUFOが現われました。今日は学校で友人に昨日のUFOの話をしたところ、その友人の知り合いに非常に熱心なUFOの研究者がおり、彼がUFOを見たがっているということを聞きました。それで今日はその人が僕のところに来るような気がしていましたので、もしその人がやって来たら、UFOが現われないかと軽い気持ちで空を見ながら思っておりました。いつも呼びかけるような強い気持ちじゃなかったのではありますが、彼が来なかったにもかかわらず、午後五時十五分に南西上空に赤っぽい色の星のような光体が現われ、すぐ金色に変わって近づくように飛んで来ました（この時、梶君はまだ学校よりもどっておらず、目撃者はたぶん僕一人です）。かなり近くまで寄って来て、僕の位置より少し北よりの西方にて、光が大きく金色に輝いたり小さく赤色になったりした後、またもとのような安定した金色になり、飛行を続けながら四十～五十秒ぐらいで消えてしまいました。発見してから消えるまで約五分間ぐらいでした。この日は、南西にUFOが現われる少し前より、南方の山の斜面に妙なかなり明るい金色（少し赤みがかった）の光点があったので、それを見ていたのですが、UFOが消えてから部屋に戻った時には南方の山の斜面の光点も消えておりました。UFOの動きを見ておりますと、やはりこちらの呼びかけに応じて意識的に来ているようでありますし、今日はそれほど強く呼びかけていたわけではないのにやって来ております。今、気がついたのですが、今日はUFOを撮影しようと思い、フィルムを購入いたしましたので、あれほど近くまで来てくれたのかも知れません。一応撮影はしましたが、何分にも三脚もなく、手で持ったままでしたし、夜間ですので、うまく写ったかどうか。

近いうちにあのUFOの宇宙人達とコンタクトできるかも知れませんので、現在二、三の友人と相談し、準備（友人より車を借用し、どこかUFOの着陸できそうな人の少ない場所をさがし、そこから呼びかけるつもりであります）しております。僕はぜひコンタクトを成功させたいと望んでいるのでありますが、友人（彼はほとんどUFOや宇宙人に関する知識はありません。それだけの心構えがあるかどうか。もし守るべき秘密があるなら、それを守り通せるかどうか、など多くの疑問があります）といっしょでも大丈夫かどうか。もしうまくいかなければ少しこわいですが、一人で試みるつもりであります。ただ宇宙人の中にもいろいろあり、僕が目撃しているUFOの動きから見て、それに乗っている宇宙人達は友好的であることはまちがいないとは思いますが少し不安です。しかし僕が想像している通りのすばらしい、精神的にも進歩した、文字通りの「宇宙人」であれば、ぜひコンタクトを成功させたいと思います。

福島県　奥野正人

昨日（一月十五日）午後五時四十五分に、東方よりUFOが飛来しましたので、こちらからも懐中電灯を点滅して合図したところ、UFOも二、三度点滅しましたので、再びこちらも点滅すると再びUFOも点滅して返して来ました。その時は非常にゆっくりと飛んでおり、止まっているのではないかと思う程の速さでしたが、午後五時五十三分頃に東南の空に離れていきました。それはいいのですが、UFOが行ってしまったため部屋に戻った直後、後藤という友人（彼は僕がUFO研究をしていることは知りません）が興奮した様子で僕の部屋に入ってきました。それで、ははあ、こいつも見たのだなと思って、お前もUFOを見たのかと言ってやると、「UFOかどうかわからない。最初、電線が光っている（反対して）のかと思ったのだが、はじめ五、六個が尾を引いて飛んでいて、しだいに数が増えて二十個以上にもなった。非常にゆっくりだったし、黄色や赤色に色を変えながら、長い尾を引いて北から南へ飛んで行った。五分間以上も見えていたと思う」と言っていました。どうやら僕が部屋に戻ってしまった直後にUFOの大編隊が飛んで行ったらしいです。本当に残念なことをしました。全く一生の不覚です。後藤は、あれだけすごかったのだから誰か他にも見たものがいるに違いないと言っております。他からも報告があるかもしれませんので早速お知らせします。それから午後九時になって、梶君ともう一度大群がこないかと思って外をながめていますと、赤い星の様なのが一機だけ、五時四十五分のと同じコースを飛んでゆきました。

奥野正人

最近の出来事を伝えておきます。十月二十日より想念観察をやってみようと思い、十一月二十五日まで行なう。正味二十日間程度しかやらなかった。私の想念観察というのは少々違い、夜寝る前に一ヵ月のでき事を朝から順を追ってかたっぱしから記入していく。次の日の朝集計して、今日の行動のもととする。最終的に一ヵ月行なって総合的なものを出す、といったぐあいだけど、記入するだけで終わってしまう。面白いのはふと心の中にもぐり込んで一日の出来事を思い出そうとすると、それがほとんどはっきり思い出せる（この理由はほぼ見当がついているが……）二十五日で終わっているけど、十二月の例会でも言ったように、その後これをやらないとどうも具合が悪くなってしまって、生活のリズムが崩れるようで、しかたないため、やうやく十二月八日から再開しています。しかしまだ集計をやっていない状態です。

十月の末から、どうもテレビを見ているとダメになるように思えて、なるべく見るのをやめて、母が見る時は外に出て自然に触れるようにしています。私が農家生まれかもしれないけれど、特に植物や鳥が好きです。オーラと関係はありますか？　このごろは雲も「いいなあ」と思います。

少々それたけど、二十九日に流星を見たのを皮切りに現在まで流星十回程度、白色の謎の物体一回、UFOと別断できるもの二回。UFO目撃については別紙を見てください。ただし報告が下手ですけど。自色の物体は地上七、八メートル位の所を北から南へ無音で光を発せず飛行。一秒位で形は不明、大きさはこの紙の半分位かな？　錯覚ではないが、よく考えれば鳥とも思えます。目撃日時は十一月十五日九時二十四分ごろです。これだけならたいしたことはないけれど、同夜九時四十五分ごろ近くの友達が「母船を見た！」と言って家に飛び込んで来た。コズモ七号の喜多方で撮影されたものと同じようだったと言う。さらにこの前日、どうも母船を見られるような気がして仕方なく、仕事中でもひまを見ては空をながめていたことは偶然でしょうか？　十六日朝九時近く、かなりの地震があった。二十日の夜八時四十五分ごろ南の方角を見ていると天頂より十度以内に流星（？）が見えた。白、無音、一瞬、大きさは（明るさ）四等星位。同日夜九時またもや地震があった。二十九日十一時二十五分、南仰角三十度付近より赤色の流星が出現。一等星の三～四倍位の大きさ。ほぼ三秒間見られ、相当（少なくても本体の二十倍位かな？）航跡を残し、仰角二十度付近で消える。少し弓なりの落下であった。距離は、案外近いように感じる。この日は承知のとおり月食の日で、こ

れを見た時は星があざやかに見えていた。何か出現することはわかっていた。次の日の朝震度四の地震があった。地震の前には何かが現われるようです。十二月十四日にも夜九時五十分ごろ地震があったそうです。

昨年も同様に流星やUFOが見られたけど、特に十一月十八日の火の玉のようなものの落下、十一月二十九日の西方から私の方に向かってくる光体（オレンジがかった赤色）が忘れられない。後者のものは、オーソンやア氏、先生の顔を思い出した後であるし、コズモ六号に載っているように、自転速度が速くなった時でもあるし、関係があるかもしれない。

ここらで話は変わりますが、今月になって急にかぜをひいてしまったけど、肉体的にはマイナスでいてESPカードの透視が五〇％近くとは。理由はじっくり考えてみるつもりです。

いままでは全く聞かなかったクラシック音楽を聞くようになりました。友達（十二月の例会に私の右となりにいた人物）が「美しく背きドナウ」を譲ってくれまして、「これだ！」と思ったからです。自分の求めていた音楽はこのようなものであったのです。彼には例のオーラのことを教えてあったからでしょう。

先月からア氏の書物を読み直していますが、なぜか「空飛ぶ円盤とアダムスキー」を読んでいますとア氏を疑ってしまうようになりました。わずかちょっとのことですし、時たまなのですが、こんなことが起こってはいけないと思います。なぜこう疑うようになったのかわかりません。哲学は信じますが……。疑うのはセンスマインドであることはわかりますが、良いアドバイスをお願いします。今一つの転機であると思われます。

千葉県　鈴木一宏

質　問

私は人を助けなければならぬと思っています。つまり、できるならば宇宙の意識（神）に目覚めさせることができれば本当にすばらしいのだが思って――おります（言っている本人がまだまだのようですが）。しかし〝カルマ〟に関することを考えてみますと、個人が苦しんでいるのは、その本人のカルマの結果であって、この人は清算している状態なのだ、というふうに考えられるのです。つまり、これを他人から助けてもらっていれば、その〝助ける他人〟にも幾分ながらカルマが吸収され、またいつまでもそれを清算することはできない――ということになるのではないでしょうか。だから苦しんでいる他人を見ても、むしろ助けるのは控えたほうがその本人のためにはよいのである――というふうに考えるのですが――。また助けることによってカルマが（助ける人にも）吸収されるのですから、絶対助けるべきではないと考えてもおかしくないとも思われます。これらの考えはすべて自分を思っているがために生じているものだと思われますが、ある行為をなせば必ずなんらかの作用・反作用があると思うのですが、そこの点がわからないのです。

それから環境の問題ですが、本当に環境は重要だと感じております。非常に影響があることもわかりました。対人関係で高貴な人に近づき、低俗な人は避けようというということです。内部の神に従ったならばこれは自然な行為となるのだと思われますが、選択の自由で低俗な人を避けてもよいのでしょうか。これは利己的な行為ではないのでしょうか（こういうふうな差別をつけること自体が利己的なのですが）。僕は次のように思うのです。「欲する人に与えよ」「ブタに真珠を与えるな」「必要な人に与えよ」「去る者を追わず、来る者を拒まず」

香川県　武田雄児

お答え

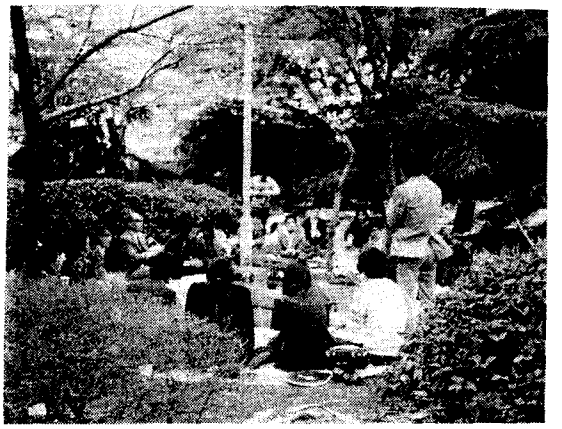
まずスペース・ブラザーズは「地球人が苦しんでいる場合に、そのすべてを助けようとはしない」という事実を考えてみる必要があります。他人を助けることが人間にとって絶対不可欠な義務であるとすれば、地球へ来ている聖なるブラザーズは地上のあらゆる人間の苦悩をかたっぱしから除きそうなものですが、ごく少数の例以外にそんなことはしません。モーセがイスラエルの大部族を率いてエジプトを脱出したときも、スペース・ブラザーズが指導した形跡はありますが、数万の人間を一挙に大母船に乗せて運んだ記録は見当たりません。なぜ輸送しなかったか？　私の考えによれば、「自分の事は自分で責任を持ち、自分で解決し、自分で始末しなければならない」という一大原則に従わせて、これにより脱出者たちのカルマが清算されるように仕向けたにちがいありません。また、ある一部の人だけ救助して他の人を見殺しにするのは不公平であるという見地に基づいていたとも思われますし更に、ひどいカルマを持つ人々を救済すれば、その人々のカルマの一部分を救済者が吸収することになるという法則に従ったとも推測できます。

地球人のすべてが相当なカルマを背負っていることは、そのゆえにこそ私たちがこの低次な惑星に出生したと考えれば、充分にうなずけることです。したがって無差別に、めったやたらに他人を助けることは必ずしも宇宙の法則に従った態度ではなく、助けてよい人と、そうでない人とがあることを知る必要があります。その区分をどうしてつければよいか。それこそ自己の内部の意識の指令に従うのです。言いかえれば、テレパシックな印象によって相手の反応を事前に察知するのです。「この人はこちらの援助によって本当に人間の愛・親切・慈愛の精神に気づくだろうか。親切がかえってあだにはならないだろうか」をセンスマインドでなく、内部の直感によって感知することが大切です。別掲記事で述べましたように、深い洞察力による慈悲心の発露と単なるお人好しとは絶対に異なりますから、その相違を認識する必要があります。だからイエスが「ブタに真珠を投げ与えるな」と言ったのだと思います。如何なる行為にも作用・反作用があり、カルマ（原因と結果の法則）に従わねばなりませんから、原則としては、相手がどのような次元の人であるにせよ、愛の行為に対しては良き報いがあり、悪しき行為に対しては悪しき報いがあるはずですが、如何せんこの惑星では行為者の期待どおりに実現しないことが多いのです。その理由としては、①愛の行為者の想念が真に宇宙的な想念でなく、感傷におぼれた一時的な衝動にすぎなかった。②報いを求める欲望が心の片隅に存在していたために、報恩が得られない場合には分裂感情を起こす。③愛の行為を受けた相手に必ずしも報恩感謝の想念が起こらず、逆にセンスマインドで判断して行為者に反宇宙的な想念または行為を返し、それを行為者が吸収する、などです。

環境の問題も重要です。人間は環境が大切だと力説したのは「足長おじさん」のジュディーですが、もっと深く考えねばならぬのは、あるライフ・スパン（一生涯）の最初のステージを選んだのは、ほかならぬ本人自身であるということです。貧家に生まれるか、富裕な上流階級に生まれるかは、その直前の前生の最後において本人のソウルマインドが決定するのであって、偶然にある環境へ飛び出て来るのではありません。しかし地球人は大体に前生の記憶を失いますから現世の環境だけを見て、自分はなんという不遇な人間なのだろうと慨歎したりします。実際には今度は不遇な環境に生まれるほうが魂の目的に役立つのだとソウルマインドが判断した結果、そのような環境を選んでこの世に出て来ます。このように考えますと、貧者が富める人をひがむのは間違っています。だからといって貧富の差を肯定せよというのではなく、社会制度の問題は惑星単位で考えねばならぬ課題ですから、貧者がその次元で人間の平等を望んで改革活動を行なうのは誤りではありません。

選択の自由で低俗な人を避けるのは利己的な行為ではなく、むしろ時と場合によっては必要です。ひどく低次元の想念を持つ人のオーラは血のくさったような色を帯びており、そばにいるとその影響を受けます。これは伝染病患者に無防備で接触し続けると、いつか感染するのに似ています。だからこういう人は避けてなるべく高貴な人に近づくのがよいのです。すばらしいオーラを放つ人と接触すれば、その良き影響を受けます。根本的には万人は創造主の意識、ライフ・パワーによって生かされていますが、破壊的なカルマを持つ人と親密になると、そのカルマの一部を吸収して、思わぬ災厄に見舞われることがあります。男女の心中事件がその好例です。片方は自滅の運命を背負っている一方、他方はまだ生き延びて人生をエンジョイし、有益な体験を積んでセンスマインドを向上させるべき余裕があるにもかかわらず、相手のカルマに引きずり込まれて死を共にする実例がそれです。アダムスキーは「テレパシー」の中で、愛する人から来る想念にも気をつけよと述べていますが、たしかにこの惑星においては低次元な想念が充満していますから、寸刻も油断はできません。ちょっと気をゆるめると全くの俗物根性にとりつかれている自分を発見して天を仰いで長大息することになりがちです。長大息するのはまだましな方で、大抵の人は自己発見の意欲さえ持たないようです。

久保田八郎



パーティの全景

杯をあげる会員（左より4人目・久保田代表）

日本GAPお花見パーティー

盛大な春の宴！

昭和50年4月12日（上野公園）

春爛漫の季節、昭和50年4月12日〝神〟が祝福するかのように、すばらしく晴れ渡る〝上野公園〟で、日本GAP「お花見パーティー」が開かれた。

当日は月例会を早めに終わり、一同そろって東京文化会館を出て花見客でにぎわう公園内を通り抜けていく。会場は前もって会員の菅原氏、福沢氏、安田氏が準備している上野公園内の噴水の近くである。現地は午前11時頃からヒモテープで囲んで確保してあった。

全員が会場に着くころは、菅原氏、福沢氏の2人はお弁当、飲み物などの買い出しに車で出かけていて、安田氏が待ち受けていた。桜の木はたくさんあるが、私たちの場所にある桜は、背はあまり高くなく、花ビラの色は他と違って桃色をしていた。地面に花ビラが散らかる所へ桜の木と水銀燈を囲むようにして、円状に向かい合ってすわる。時刻は午後4時頃である。

全員がすわり終わったとき、タイミング良くお弁当、飲み物などが車で近くの道路まで到着したので、さっそく5～6人でパーティーの会場まで運ぶ。お弁当は上野松坂屋調製で1000円、それにおスシの詰め合わせである。すぐに弁当をくばり、酒、ビールが行き渡るのを待って、久保田代表の挨拶から開始。

「GAPにとって、このような〝お花見パーティー〟が開かれることは、大変にすばらしいことである。堅苦しくならないで、存分に楽しんで頂きたい」

があった。そして志田氏の「乾杯」の言葉と同時に、皆いっせいに杯を上げる。

GAP会員らしく、静かで、なごやかな雰囲気をただよわせながら、写真を撮る人、隣の会員と談笑する人、皆心から楽しんでいる。代表から「だれか歌いませんか！」と言われて、会員の1人が立ち上がって歌う。

桜の花ビラは、スペース・ブラザーズの手のひらからまかれるかのように、ヒラヒラと舞い落ちていた。

時がたつにつれて、宴も興にはいり、全員に歌、なぜなぞなどのかくし芸を披露してもらうことになった。

普段は静かな人達の集まりであるが、いろいろな歌をよく知っていてなかなかのものである。

いよいよ久保田代表の登場である。まず立ち上がり、マイクを片手に大学の応援歌を替え歌にして、GAP応援歌を歌う。体全体を使って、大きな声であるけれども、アルトのやさしそうな声で響くようであった。代表は、その他2～3曲歌ったが、むかし楽団の指導をしたこともあるほどで大変に上手であった。

あたりが、だんだんと日が暮れて、水銀燈の〝あかり〟がともされるころ、宴はますます盛況となっていった。上野の森は〝ちょうちん〟の灯と花見客でにぎわっていて、ときおり他のグループの歌声などが聞こえて来る。

午後7時頃になって、電車の都合で途中で帰る人もいたが、大部分の人は消灯の9時頃まで楽しんでいた。消灯と同時に惜しむように会場を後にして去っていったが、代表と一部の会員は上野の喫茶店でコーヒーを飲むことになった。将来日本に起こるかもしれない大地震に話がはずみ、去りがたい気持であった。時計の針は終電近く午後11時を過ぎている。

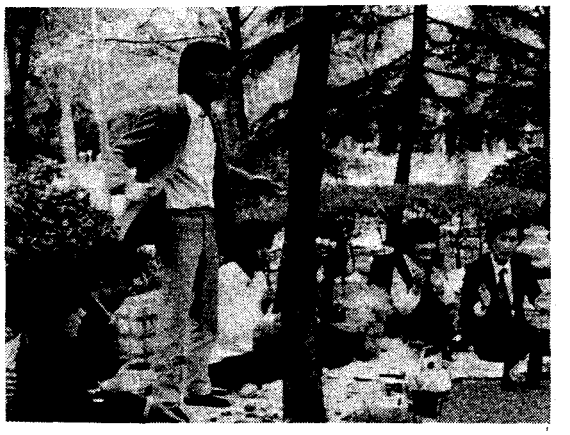
GAPにとって最初の〝催し〟であったが、記念すべき楽しい会合であった。これからもパーティー、ハイキングなど会員の親ぼくを深める機会を持ちたいと思う。

最後に〝パーティー〟のためにビールを寄贈して下さった岩手県花巻市の菅原一浩氏や、ヤカン、湯沸かし器を用意してくれた数名の会員に感謝したい。この日の参加者は35名の多数に及んだ。

（塙　公明記）

先生、先日の「お花見パーティー」に出席させていただきました。基本的に、GAPメンバーは同じような想念パタン

マイクを片手に大橋氏



手拍子を打ちながら歌う足立氏

だなと思いました。遠方ゆえ、中途で失礼したしましたが、短い時間であるけれど花の下で酒を飲みおうて、騒いで、次代の夢を見ました。先生が前世でパーティーを開かれた時、小生も招かれたのかも知れません。ディック・ミネ張りの先生の歌う姿を見て、タイコ腹をコルセットで締めつけた中世の貴公子を想像しました。あの時の楽しい気分では、小生がもっと酒が強く、時間と金があったなら、飲み明かしたいなと帰りの電車で想っていました。GAP活動に小生なりに協力いたします。

それでは先生、どうぞ体に気を付けて下さい。

（静岡県　高梨和明）

GAP会員は、桜の木の下でも一般の人たちと違い、メチャクチャに浮かれるような態度は示さず物思いにふけっているようで、寂然としていた。15～16回生まれかわりの最後の回の中にあるからか進んだ星へ生まれかわることをうすうす知っているのか、信念を抱いているためか、酒を地球との別れのためのものかのように、地球でこれまですごした過去を思っているみたいにしみじみと飲んでいるのが印象的だった。

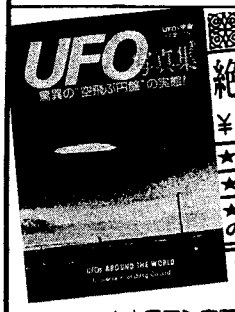
あの日、スペースブラザーズが来ていたのでは、と考える人もいた。確かに来ていたのだろう。それも花の上に。花の間から下をのぞいている大きな眼のあるのを私はひそかに感じていたのだ。

（神奈川県　長友隆彦）

久保田代表の挨拶（右），中央に立っているのは安田氏

わが国最初の〈空飛ぶ円盤〉写真集

UFO写真集



豪華版

絶賛発売中！ カメラでとらえた 驚異の記録!!

¥1300 〒300

★世界の貴重な写真〈カラー21点、白黒33点〉を掲載

★A4版・極上アート紙使用・美麗カバー付き豪華本

★全国のUFOファンの要望にこたえてUFO研究界の第一人者久保田八郎による和英両文の解説つき

UFO問題には深い意義がある

久保田八郎

〈カラー〉★セントジョージ付近で撮られた驚くべき写真 ★ホロマン空軍基地上空のＵＦＯ！★スイス・アルプスのＵＦＯ★トゥルサのＵＦＯ　抽象画ではない！★大気圏外のＵＦＯ！★ジェミニ７号から撮影された２個のＵＦＯ！★東京上空の円盤★埼玉県狭山市のＵＦＯ★千葉県松戸市に現われたＵＦＯ★ライティング・ライツ!?　★喜多方の上空を飛ぶ謎の美しい光体★阿蘇山上空のＵＦＯ群★銚子市の上空に長時間見られたＵＦＯその他〈白黒〉ラボックの謎の光体群★ブラジル沖軍公開の多高い円盤写真★コニストン円盤★米国東部とカナダをかすめた光球★ニュージャージー州で撮られた円盤★ライティング・ライツ　観客なき踊り子？　★長野県上田市のＵＦＯ★高松市に出現したＵＦＯ★ブラジルの円盤★宮崎県で謎の発光体を目撃★アフリカ上空で撮影されたＵＦＯ★琵琶湖上空のＵＦＯ★石巻市の点滅光跡★北海道に出現したＵＦＯ★東大阪のライティング・ライツ１★和歌山県のライティング・ライツ　２★枚方市上空のＵＦＯ★ＵＦＯ、関門橋上空に出現！★富士市に低く舞い降りた円盤！★宮崎市上空のＵＦＯその他多数満載

■書店で品切れの節は、直接当社少マ係へ現金書留か振替でご注文下さい。
〒110.東京都台東区秋葉原3 3.アキバビル　振替東京119478　電話(255)8784(代表)　ユニバース出版社(コズモ出版社改め)

「コズモ」改題

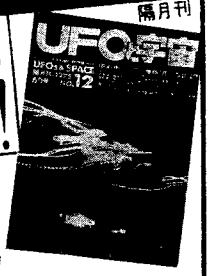
わが国唯一の〈空飛ぶ円盤〉専門誌

UFOと宇宙

隔月刊

12号 ¥360 〒115

発売!!



大増ページ！

定価はそのまま!!

内容はさらに充実!!!

〈口絵写真〉オールカラー●東京上空のＵＦＯ●円盤一帯広市に出現！埼玉県嵐山町で発生した怪現象一謎の飛行体を撮影！●埼玉県入間市に現れた２機のＵＦＯ●ここにも２機のＵＦＯが一茨城県龍ヶ崎市で高校生が目撃、撮影〈内容〉●甲府市にＵＦＯ着陸！●オーストリアの光るカタツムリ状物体●〈古代の天空人〉E・F・デニケン●　北海道で撮影されたUFO●円盤、またも千葉県に出現！●長野県に落下した小型円盤！●ＵＦＯ情報●私は宇宙人？　を見た●ＵＦＯ目撃レポート●科学ニュース●美しい白線の軌跡！●重力波とは何か●原子・銀河系・理解（２）●私のＵＦＯ目撃記録●表紙写真説明●ソ連圏のＵＦＯ現象（１）シベリアの謎の大爆発

■書店で入手できない場合は、現金書留か振替で直接当社少マ係へご注文下さい

ユニバース出版社（旧コズモ出版社）から出ているわが国唯一のＵＦＯ専門誌**ＵＦＯと宇宙の12号**が発売されている。これはかつて「コズモ」という題号だったが，第10号からどういうわけか改称された。題号としては「コズモ」の方が神秘的な感じがしてよかったという声が多いそうだが，改称後も売れ行きは結構伸びているらしい。類似誌がないことと他誌にありがちな興味本意的記事でなく情報誌としての性格を確立しているからだろう。初期の編集はいただけなかったが，この**12号**は表紙デザイン，記事の選択，編集レイアウト等，綜合的に見れば抜群である。編集態度は淡々として客観的であり，報道性が強く，判断は読者にまかせるといった意向がうかがわれる。特にトップ記事の**甲府市にＵＦＯ着陸！**は現地取材による立派なルポタージュで，記者の主観を極力抑制した堂々たる報告となっている。英文に全訳して海外のＵＦＯ専門誌に掲載すれば世界のＵＦＯ研究界の貴重な資料となるだろう。こうしたルポ類が国内だけで埋もれてしまうのは惜しい。科学的態度を打ち出そうとする傾向は毎号の＜天空と大地＞科学シリーズで看取できるが**重力波とは何か**，は少々難解で，何か箔をつけるための飾りのような感じがする。重力はＵＦＯとも縁の深い重要な問題なので，もっと平易に，しかもＵＦＯの推進原理と関連づけた捉え方をして欲しかった。もっともオーソドックスの学者に望むのは無理な話だろうが――。久々に**デニケン氏**も登場していて勇ましく自説をブチまくっている。ヘソ曲がりだと見る人もあろうが，これはこれで面白い読物となっているし，第一，どこで入手したのか氏の珍しい顔写真が大きく掲載されているのがよかった。ＵＦＯ写真ばかりでなく国内外の高名な研究家のポートレートを次々と載せるのもよい趣向である。全国のローカル紙に掲載されるＵＦＯ関係記事を細大漏らさず蒐集してまとめたＵＦＯレポートは地味な記事のようで実は我々読者にとって最も有益な資料となるように思う。歴史的事実の年代記となるからだ。全国の新聞に目を通すのは大変だろうが（第三者に依頼しているのかもしれないが），載せるのなら疎漏のないように徹底を期してもらいたい。また時々この記事の活字の大きさが変わるのは感心しないので，毎号統一するとよい。圧巻は**シベリアの謎の大爆発**だ。この有名な大事件は意外とＵＦＯ関係書に出てこないし，紹介されても簡単な記事ばかりなので，これは絶好の文献である。内容も興味深いしイラストも秀作である。こういう記事を読むと宇宙の神秘を求めて限りなく夢が拡がってゆく。**口絵カラー写真**も得がたい資料だが，欲を言えば撮影者全員に直接コンタクトして取材した結果を本文記事として載せるとよい。写真の解説が少々物足りないように思う。紙数の都合もあるだろうが，もう少し配慮が必要なのではあるまいか。82頁の英文キャプションも中途半端で，これでは海外に輸出されてもさほど効果はあるまい。書くのならば１頁全部に英文でもっと詳細に書く方がよい。こうした英文も久保田八郎氏が執筆するそうだが（聞く所によると氏は写植貼込み，版下制作，写真複写，デザイン，レイアウトまでやるという）このような多芸多才的傾向はとかくＵＦＯ研究家としてのイメージを稀薄にさせがちなので，編集に際してはなるべく各分野の専門家に分担させる方がよいだろう。もっともユニバース社の編集部員は全員が写植貼込みによる版下作りのベテランだそうで，これも久保田氏の影響なのかもしれない。（ＸＹＺ）

日本GPA月例研究会

日本GAPは左記のとおり東京と大阪支部の二ヵ所で毎月「月例研究会」を開催して、宇宙哲学の研さん、UFO研究、情報交換、テレパシー練習、会食（夕食）等を行ない、会員の精神的向上と親ぼくを図っています。都府内及び近郊の方はぜひご参加下さい。出席者は会員に限ります。

東京例会

1、日時　毎月第二土曜日、午後二時より六時まで。

2、会場　上野公園内「東京文化会館」四階会議室　電話（828）2111　国電上野駅の「公園口」下車。改札口の真向かい。会館正面に向かって左側の入口から入り、奥のエレベーターから四階へ行く。

3、会費　二〇〇円。茶菓が出る。

4、携行品　テキストとして「生命の科学（文久書林刊）」を持参。

二時→三時＝「生命の科学」講義、三時→四時半＝代表挨拶・報告・テレパシー練習・休憩、四時半→六時＝自己紹介、研究発表、座談、質疑応答。

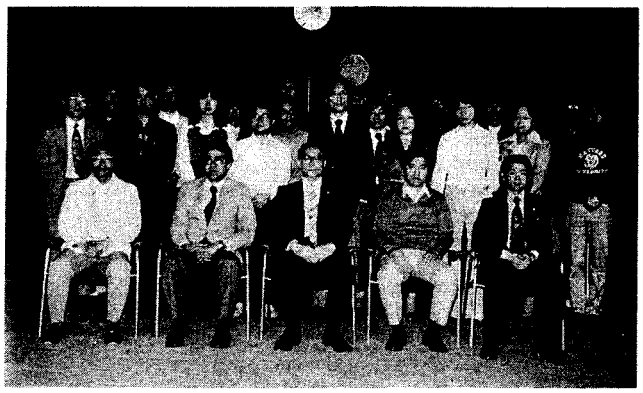
大阪支部例会

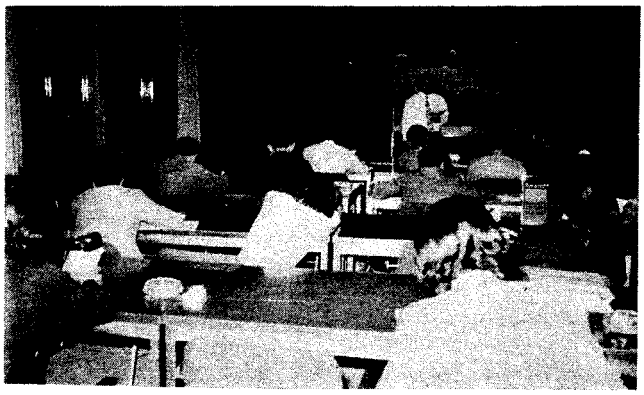
1、日時　毎月第三日曜日、午後一時より五時まで。

2、会場　大阪府吹田市出口町四丁目
吹田市民会館　電話（388）7351
国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。

3、会費　一〇〇円

4、携行品　テキストとして「宇宙哲学（たま出版刊）」「生命の科学（文久書林刊）」を持参。





英語研究会

本年5月より会員の要望にこたえて久保田八郎がUFO関係原書購読力向上教養講座として開設。アダムスキー著「空飛ぶ円盤同乗記」の原書 Inside the Space Ships を講義。語学力増強のみならず翻訳書では得られぬ微妙な文意の把握に絶好。久保田の奉仕活動につき受講料は無料なるも，下記の要領に従って下さい。

1. 日　時　毎月第2土曜日の月例研究会終了後，7時より9時まで。
2. 会　場　東京文化会館，月例研究会場と同じ部屋
3. 教　材　コピーを出席者に配布。
4. 会　費　1回につき400円（テキスト製作費と会場費を含む）テキストを所持する方は2回目からは会場費のみ均等割。
5. 講　師　久保田八郎
6. 資　格　会員ならだれでも可。

編集後記

■薫風の五月、陽光きらめく窓外を時折眺めながらこの稿を書いています。56号の誕生は日本GAP活動史上画期的意義を帯びていると言えるでしょう。一九六一年創刊号をガリ版で出して以来、みずから和文タイプライターを操作してのタイプ印刷、オフセット印刷を経て、ついに本格的な活版印刷にこぎつけることができました。すべて会員諸兄姉のご支援のたまものです。ただし編集・レイアウト（タイトルの写植貼込みを含む）は編者が行ない、その分の費用は浮かせました。それにしても三十数万の経費を要しますので簡単には発行できませんが、精一杯の努力は続けており、今後も頑張りますからご期待下さい。

■本号からデスモンド・レスリーの「アダムスキーに関するコメンタリー」を連載致します。これはロンドンのネヴィル・スピアマン社発行 Flying Saucers Have Landed（デスモンド・レスリー、ジョージ・アダムスキー共著「空飛ぶ円盤実見記」）の一九七〇年改訂版に加えられたレスリーの貴重な解説記事で、未発表の写真類と共にアダムスキーの体験の真実性を擁護しています。原文全体を熟読すればわかりますが、でっちあげとは到底考えられません。

■この原書 Flying Saucers Have Landed と「空飛ぶ円盤同乗記」の原書 Inside the Space Ships を入手するには次の方法があります。希望者は直接ご注文下さい（各二千円弱）。

(1) 注文書に原書名と発行所名（Neville Spearman Ltd., London）を横文字で記入して左記へ申し込む。

(2) 〒160－91 東京都新宿区新宿三－一七－七 紀伊国屋・洋書業務部・店売課・受付係

(3) 数ヵ月後に右書店から現物到着通知と請求書が注文者へ来るので書店へ送金すると、折返し現物が本人へ送付される。（航空便による取り寄せは受け付けず、すべて船便扱いとなるので、気長く待つ必要がある）

■連載中の「UFOの秘密」は増野一郎氏の名訳にかかわらず、内容が古いせいか反響がなく、したがって本号をもって一応打ち切ることとし、次号からは別な記事を連載致しますから御了承下さい。何を載せるかは目下思案中です。

■クリシュナムルティーの哲学は難解だという声をよく耳にしますが、内奥の直感力に従った生き方を根本理念としている点でア氏の哲学と同じレベルをゆくものです。熟読玩味されれば、他との〝同一化〟の危険性を警告している深遠な内容に気づかれるでしょう。なおこの記事の訳者で多年東京の月例研究会の司会者であった志田真人氏は、会社の長期出張で六月末にインドネシアへ赴任されることになりました。ご尽力に深謝しますと共にご健闘をお祈りする次第です。

■テッド・オーウェン氏の「奇蹟を起こす方法」は本邦初公開のすばらしい記事です。これはあらゆる望ましい物事の実現に応用できますからぜひお試し下さい。編者も大いに試みて、かなりの成果をあげています。この応用の結果報告をお寄せ下されば逐次本誌に掲載致します。

■拙稿「超能力開発の意義」は紙数の関係で思っていることの半分も書けず、中途半端な記事に終わって、誤解を招く恐れがあるかもしれません。疑問点があれば遠慮なくご質問下さい。

■アダムスキーの「永遠に生きるためには」は、本誌第19号に掲載した記事で、後にア氏の論文をまとめて高文社より「空飛ぶ円盤とアダムスキー」と題して出版した際、どういうわけかこの記事が洩れたため、19号を持たぬ会員の方は十五～六回説の出典をご存知ないので、あらためて再録した次第です。

■お花見パーティーは盛大でした。幹事、参加者各位に厚く御礼を申し上げます。来年もまたやりましょう。

■初めての試みである英研も予想外に参加者が多く（第一回は二十一名）、しかも皆さん熱心で、張合いのある時間をすごしました。翻訳で読むのとは違って英文で仔細に研究すると正確な文意を把握でき、思わぬ収獲があります し、英語に慣れ親しむことにもなって一石二鳥です。多数ご参加下さい。なおこの会費を臨時号で三〇〇円と発表しましたが、テキスト作製費がかさむために初回だけ四〇〇円と改訂します。ご了解下さい。

■ニューヨークで活躍中の宮内温夫氏（三二歳）の花嫁になる女性を日本GAP会員中より探しています（会員自身に限る。会員の家族は不可）。立候補希望者は第三者を通じて久保田宛ご一報下さい。申し出の秘密は厳守します。氏は商業美術の名門プッシュピン・スタジオで唯一の日本人イラストレーターとして、世界的に名高いミルトン・グレーサー氏のもとですぐれた作品を制作してアメリカ商業美術界で頭角を現わしており、またアダムスキー哲学を画業や生活で生かしているすばらしい方です（詳細は本誌55号に掲載）。

■先号の編集後記で宇宙的な音楽について云々しましたが、これは個人の好みによりますので、どれと決めるわけにはゆきません。各自で選定されるとよいでしょう。

■会員の方々から相談や照会等の手紙を多数いただきますが、すごく多忙のため早急な返事の不可能な場合が多く、ご迷惑をかけて申し訳ありません。できるだけの努力をしますので、一応お待ち下さるようお願い致します。

■本号にはダニエル・フライの著書の内で名高い「地球の人々へのメッセージ」の全訳を付録として添付しました。翻訳は会員の藤間弘道氏で、これを会員安田正人氏がみずからガリ版で製版し、費用自弁で印刷所に依頼して作製されたものです。ご両人のご奉仕に衷心より感謝致します。なお印刷部数は五五〇部限定のため会員名簿順により古い方から五五〇名様だけに贈呈しますのでご了承下さい。この版権は安田氏の所有ですから他誌へ転載することはできません。

■宇宙的な事象を研究し、より高度な知識と思想を求めようとする一方、日常生活で他人の感情を害するような言動を平然となすような感覚では全く無意味ですから、「親しき中にも礼儀あり」を重んじ、他人との接触時には極力言葉や態度に注意して、心あたたまるよむな雰囲気をかもし出すようにお互いに留意しようではありませんか。

■会費切れの方には別に通知致しますので、なるべく早目にご納入のほどお願いします。

■御寄付の御礼。（昨年十一月十一日より本年五月末まで。敬称略）中岡桂園（滋賀県）五千円、関谷正明（同）五千円、丹野広（千葉県）五千円、鈴木俊雄（福島県）一千八百九十円、鈴木伸一（千葉県）七千円、小野和郎（静岡県）一千四百六十円、井口才司（東京）三万九千五百円、馬場礼二郎（福岡市）三千円、岩田重子（千葉県）一万円、高木正美（千葉県）一千五百円、津野田俊行（熊本市）一千円、佐山則夫（仙台市）五百円、佐藤テル（福島市）一千円、安部雅子（山口市）一万九千円、高木清（千葉県）二千四百六十円、無名氏二千円、安藤俊（宮城県）切手四百円分、菅原一浩（岩手県）三万円、大久保秀彦（青森県）八百円、福原道雄（千葉県）四百六十円、風間進（東京）一千三百十円、笠原弘可（仙台市）一万円、喜多優子（名張市）五千円、成田登起子（青森県）一千円、漆山晃治（山形県）一千五百二十円、菅原史崇（埼玉県）六千三百円、照井美枝子（函館市）五千一百五十円、塙公明（東京）四万円匿名氏（千葉県）一万円、千田光明（神奈川県）一千円、中里信彦（千葉市）五百円、小杉幹夫（同）切手二千円分、勝田誠宏（久居市）一千円、橋本和宏（神奈川県）八百円、浜村建郎（千葉県）漢方薬六千円分、無名氏延命茶、クコの実の粉末。（K）

GAPニューズレター 56号
1975年6月25日発行
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365－818
振替東京35912（久保田八郎名義）
頒価300円・送料70円

空飛ぶ円盤シリーズ

空飛ぶ円盤と宇宙人　黒沼健著
円盤の存在とその出発地をさぐり、古代科学と円盤についてのかかわりあいを興趣深く論証す。　三四〇頁　九五〇円

空飛ぶ円盤騒ぎの発端　高梨純一著
アーノルドの目撃からワシントン上空の円盤の乱舞まで、円盤研究の歴史と成果をまとめる。　二四八頁　九〇〇円

空飛ぶ円盤の跳梁　高梨純一著
円盤の出現と共に激増する放射能。謎の物質エンゼルス・ヘア等重要にして興味ある事項を網羅。　二四八頁　八五〇円

空飛ぶ円盤実在の証拠　高梨純一著
―その科学的究明―
多くの貴重なデータにもとづき、科学的方法をもって円盤の実在を見事に証明した注目の書。　二四六頁　九〇〇円

ヒューマノイド　空飛ぶ円盤搭乗者　平野威馬雄編
円盤着陸とその搭乗者に関する科学的究明と宇宙人の来訪、及びその活動ぶりをまとめる。　二四〇頁　九八〇円

空飛ぶ円盤の謎と怪奇　黒沼健著
円盤襲撃に関するノストラダムの大予言にはじまり、世界各地における目にみえない宇宙人の攻撃をまとめる。　二六〇頁　九八〇円

空飛ぶ円盤とアダムスキ　久保田八郎編　九五〇円

空飛ぶ円盤のすべて　平野威馬雄編著　九〇〇円

アポロと空飛ぶ円盤　平野威馬雄・荒井欣一著　九〇〇円

空飛ぶ円盤は実在する　A・ミッシェル・田辺貞之助訳　九〇〇円

空飛ぶ円盤実見記　G・アダムスキ・D・レスリー　八〇〇円

空飛ぶ円盤同乗記　G・アダムスキ・久保田八郎　九〇〇円

空飛ぶ円盤の真相　G・アダムスキ・久保田八郎　九〇〇円

空飛ぶ円盤の秘密　T・ベラサム・久保田八郎　八五〇円

●東京　文京　本郷5－30　振東141750●　**高文社**　●京都　左京　百万遍　振京23523●

アダムスキー哲学三大名著　絶賛発売中！

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接にどうぞ。

G・アダムスキー　久保田八郎訳

宇宙哲学

¥480　〒120

東京都新宿区納戸町33 たま出版　振替東京94804

宇宙問題探求者必読の書

宇宙人から伝えられた人間の生き方を詳述

テレパシー■生命の科学

ジョージ・アダムスキー/久保田八郎訳

¥400　〒120　　¥550　〒120

絶賛！アダムスキーの弟子でありコンタクティーでもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学！　特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書！

★★なぜ空飛ぶ円盤は来るのか★★

フレッド・ステックリング/久保田八郎訳

好評発売中！　¥650　〒120

文久書林　東京都文京区白山1－29－12　振替・東京2521 Tel.(813)2495

●本誌旧号
●想念観察手帖

すべて品切れとなりました。
在庫ありません！

オーソン肖像写真

ジョージ・アダムスキーが砂漠で最初にコンタクトした金星人は後に「同乗記」でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記憶にもとづいて画家に描かせた肖像画をカラー写真にしたものを日本GAPでは月例研究会で頒布してきた。残部が少々あるので希望者は直接本部宛注文されたい。スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものである。

◎キャビネ判（11.5×16.5c）　¥500　〒40

◎（名刺判は製作中止）

上記写真のみは直接日本GAPへご注文を。